
死んだハンター達は今

yugata

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死んだハンター達は今

【Nコード】

N1332T

【作者名】

yugata

【あらすじ】

モンハンのお話です。本当にお話です。いや マジで 気になるなら見てみ ほんた（ry

皆話したくない過去もあります。(前書き)

なんか 主人公が特別な力を持ち、強大な悪に立ち向かう！

とか めんどくさいので、普通の話をするハンター達にしました。

(普通ではないか)

では ごゆっくりお読みください

皆 話したくない過去もあります。

謎の人物「はあゝ 暇だな。何かやることないのか？」

謎の人物B「面白い暇つぶしなら、あるわよ ナチヤ」

ナチヤ「おつ マジが で、なんだ面白い暇つぶして？」

謎の人物B「その前に私の名前言いなさいよ」

ナチヤ「え？ 何でだ？ まあいいか えっと・・・ ライリ＝マ
ーチスだっけ？」

ライリ「はあゝ 他人の名前くらい覚えなさいよ」

ナチヤ「・・・ それより、面白い暇つぶして何だよ！」

ライリ「うん。面白い暇つぶしてのはね、昔話よ。もちろん死ぬ
前のね」

ナチヤ「昔・・・話・・・か」

ここは、死後の世界。人間の言葉で言うと、天国にあたる所。

ここは、次の生まれ変わりに、なるまでの休憩所。皆、好き放題に
酒やら、ゲーム 寝る 食べるなどをしている。

ここには、暗黙の了解みたいのがあり、それは、生きていた頃の話
をしないこと。まあ、話とところで何も無い。そんな世界である。

謎の人物C「おゝい 何やってんのよ？」

謎の人物D「ちよつと 待てよ シアン 俺は酒の飲み過ぎで、頭
が痛くて走るの勘弁なんだよ」

シアン「えゝ じゃあ走るのが嫌なら、全速力でこっちに来てよ」

謎の人物D「人は、それを走るといふんだよ・・・」
タッタッタ 結局走った

ライリ「あら？ 随分しんどそうな顔をしているわね。トアスク」
トアスク「いや 酒の飲み過ぎで頭痛いのに、シアンに無理やり走らされた」

シアン「？別に無理やり走らせてないよ」

ナチャ「いや 大体想像付くからいいよ」

シアン「そんなことより、何してたの？二人で」

ライリ「今から 昔話をしようと思っていたのよ」

トアスク「死ぬ前のか？」

ライリ「ええ そうよ。暇つぶしにね」

ナチャ「俺は、乗り気ではないがやるんだったら、話すよ」

シアン「私は、何でもいいよ」

トアスク「まあ、破ったところで、何か起きるわけでもないし、いいよ」

ライリ「私も勿論いいわよ。じゃ誰が最初に話す？」

シアン「一番面白そうな ナチャ君から どうぞ！」

ナチャ「え！？ 俺からかよ。ちえ んじゃ話すか。これは、俺が死んだクエストの話だ」

皆 話したくない過去もあります。(後書き)

次回から、話がスタートです。ナチヤ ライリ「マーチス シアン
トアスクは、全部書いてる時にテキトーに決めました。あとフル
ネームは、考えるのがだるいので、ライリだけで。

今後キャラを増やす予定はありません。(話に出てくるだけのキャラ
かもしれないけど・・・)
では また次回に ノシ

第1話 ナチヤの過去 というより、死の話だな（前書き）

ナチヤの過去の話です

特に言うことは、ありません。どうぞ、じっくりお読みください

第1話 ナチャの過去 というより、死の話だな

ジリリリリリ

謎の人物「ああ うっせえ 寝ねえじゃねえか！・・・って、今日は、クレスとリオレウスを狩りに行くんか。寝てる場合じゃないな。よっと」

ドスン 謎の人物ことナチャは、ベットから降り、いつものバサル一式の装備に着替えた。

ガヤガヤ ここは集会所。ハンターが色々するところだ。（説明めんどい）

クレス「あつ！ いたいた。遅いよ！」

ナチャ「ああ 悪いな 家の目覚まし壊れて鳴らなかったんだよ」

クレス「本当に？」

ナチャ「ああ 嘘だ」

クレス「やっぱし まあ私はナチャごとときには騙せないわよ」

ナチャ「何だよ ナチャごときて・・・ まあいいや、竜車は、どれだ？」

クレス「あそこの木の近くに停めてある竜車だよ」

ナチャ「よし 行くか」

クレス「うん！」

ガタガタ 竜車の中 ハンター二人と猫一匹が揺れながら目的地に行く。

クレス「そういえば、今日の武器は、いつもと違うね」

ナチャ「ああ これは前に、ゲリヨス行った時に作った、デュアルタバルジン改だよ」

クレス「ああ この前のゲリヨスね。私の火竜弩がまさに火をふいた、あれね」

ナチャ「ああ そのよく分からない例え通り、火をふいてたな」

クレス「っ！ よく分からないってなによ！非常に分かりやすかつ

たでしょ！」

ナチヤ「・・・ そうだな」

クレス「なによ、その間は！ったく もう知らない」

ナチヤ「とりあえず、俺は目的地着くまで寝るよ。おやすみ」

クレス「・・・お休み」

アイルー「（なんか気まずいにや）」

目的地 森丘

アイルー「着いたにや」

クレス「ふあゝ あれ、いつの間に寝たんだろ？」

ナチヤ「本当にいつの間に俺の腹を枕にして寝たんだろうな」

クレス「えっ！？ ごごっごめん」

ナチヤ「別に謝ることじゃないだろ」

クレスの顔が赤い 久しぶりに見た気がするな

ナチヤ「そんなことより、早く準備して行こうぜ」

クレス「えっ！？ あっうん」

ハンター準備中

ナチヤ「やっぱり綺麗だな」

クレス「そうだね この風景見ると、狩りに来た感じがしなくなるよね」

ナチヤ「まあ でもモンスター見つけると現実に引き戻されるけどな」

クレス「・・・言わないでよ。この一時を大切にしたいんだから」
ナチヤ「そんなこと言っていないで、早く行くぞ」
クレス「あっ、ちょっと待ってよ」

ナチヤ「うん いないな」

クレス「そうだね、何処にいるんだろ レウス」
ギヤオオー（レウスの鳴き声）

ナチヤ「噂をすれば、なんとやらだな」

クレス「なんとやらではなくて、影よ ことわざはしっかりと覚えようね ナチヤ君」

ナチヤ「うっさい 戦いに集中しろよ」

レウスは様子見で空から火球を放った。 そんな火球にあたるほど、バカなハンターではない。火球を避け、反撃をした。クレスがライトボウガンで的確に相手の弱点である、頭に通常弾Lv2を当てていく。運よく、その一発が目当たり、レウスは空から落ちた。

ナチヤ「流石だな クレス 次は俺の番だ！」

ナチヤの双剣が、レウスの頭を切り裂いていく、さらに毒を浴びせた。

レウスは、立ち上がる頃には、怒りに燃えていた。

クレス「ナチヤ 咆哮よ 気をつけて」

ナチヤ「分かってるよ」

そう言い、すかさずレウスから距離をとる。

しかしレウスは、それを読んでいたらしく、咆哮をすぐ止め、攻撃しようとしているクレスに突進をしかけた。

クレス「!? ヤバ・・・」

クレスは言葉を発する前に突進を食らった。

ナチヤ「!!!」

レウスは、目を潰した人間を殺り、少し満足しているが、まだ餌は残っていると云わんばかりにまた咆哮をした。

ナチャ「この時は俺、結構冷静だったんだぜ」

シアン「そんなのどうでもいいから 早く続き」

ナチャ「はいはい それでそのレウスは・・・」

まだまだ、クレスは生きているかもしれない。いや こんな所で死なせるか。絶対生きて戻るんだ。

レウスは、飽きずに突進をしてきた。ナチャは、それを素早くかわし、クレスがふっ飛んだであろう場所に急いだ。

ナチャ「ハアハア どこだ クレス」

俺は必死に探した。と言つても数秒で見つかったが。クレスが生きているか確認する。まだ辛うじて息をしている。

ナチャ「良かった 生きてた とりあえず、ここから逃げ出そう」

レウスは、火球をはくモーシヨンになっている。

ナチャ「ちっ かわす！」

己に言い聞かせ、難なく避けた。だが、相手は、ただのレウスでは無かった。ナチャが避けた所に火球がきていた。

ナチャ「なっ！」

双剣の一つでガードしたが効果は薄く、もろに火球を食らった。しかし、クレスはしっかりと守っている。

火球が当たった所は、煙で見えなくなつた。

ナチャ「ぐっ 喉が・・・ 火に強い防具でも、ここまで食らい、

あのレイアみたいな火球のはきかた、あいつ上位じゃないな」

ナチャは、冷静に分析するが、分かった所で 何の解決にもならな

い。

ナチャ「だが 閃光玉は、どんなランクでも、きくはずだ。 食らえええ」

火球が飛んできた方向に閃光玉を投げる。

閃光玉が当たったしらないが、ナチャはクレスを抱きながら必死に逃げた。

ナチャ「ハアハア 何とか逃げたな」

ナチャはキャンプに戻った。クレスを助ける一心で我を忘れて逃げてきたが、あのレウスの火球は特別で、毒もついていたらしい。

ナチャ「まあ・クレスを・守ったからいい・か・」

ドシン ナチャは、その場に倒れこんだ。

ナチャ「こんな感じかな」

シアン「それってレウスなの？火球はレイアに似た動きで、毒も持ってたなら、レウス色のレイア希少種じゃない？」

トアスク「なんだそれ 聞いたことも、見たことも、考えたこともないな」ライリ「それより ナチャはクレスの事をどう思ってたのよ！」

ナチャ「え？ 親友であり、最高の相棒みたいに思っていたけど・・・」

ライリ「・・・ いいわ 貴方に聞いた私がバカだった」

トアスク「いいことを思い付いたんだが、クレスは生きているんだろ？」

ナチャ「ああ あの時は安全な場所にやったから多分生きてるはずだ」

トアスク「じゃあ 広場にあるあの地上世界が見える水晶の所に行

って、今のクレスさんを見に行こうよ」

シアン「いいね 面白そう」 行こうよ」

ナチヤ「え！？ やだよ」

ライリ「ナチヤに拒否する権利なんてないわよ」

ナチヤ「ひどっ！ 全く人の気持ちを考えるよな」

トアスク「じゃ 行こうか」

第1話 ナチヤの過去 というより、死の話だな（後書き）

まだナチヤの話は、続きそうですね。

いい忘れてたんですが

キャラの詳細は特に設定しません。皆さん各自でキャラをイメージして下さい。

大まかに言うなれば

ナチヤ（男） 身長など標準

ライリ（女） 身長など標準

シアン（女） 身長など標準以下かな

トアスク（男） 身長など標準以上かな

クレス（女） 身長など標準より少し下

こんな感じですかね。

ベターですが気にしません。

あともうひとつ、誤字 脱字は無視して下さい。私は文才ないので、よろしく。では また次回 ノシ

第2話 ナチヤの話は、とても長いね(前書き)

えっと 今回もナチヤの話です。今回で終わらせようと思いましたが、終わりませんでした。頑張って一話を長くしないようにしてるんですが、長いですね。では
ごゆっくりお読みください

第2話 ナチヤの話は、とても長いね

トアスク「ああ 頭が痛い」

ライリ「大丈夫？ 本当にヤバそうだけど」

ナチヤ「まあ 俺らは霊体だから、死なないけどな」

トアスク「死なないなら、痛みも消してくれると、ありがたかったのにな」

シアン「痛覚があるのは、トアスクみたいのに大量に酒を飲ませないためじゃないの？」

トアスク「もしそれが本当なら、おかしい話だな。ここは、いくらでも物を生み出せるはずだぞ。酒なんて、減らないだろ」

ナチヤ「神様が出すの面倒くさがってるんじゃない？ きっと自動で物を生み出せないんだよ」

ライリ「それは、ありそうね」

シアン「きつと そうだよ」

トアスク「神様を軽く貶したよな お前ら」

ライリ「それより、広場来たけど、どうやって探すの？」

トアスク「ああ それなら、ナチヤがクレスのことを想像しながら水晶を見れば、出てくるはずさ」

ナチヤ「なっ！マジかよ。やんの？」

ライリ「ナチヤに拒否権は無いって言ったでしょ」

シアン「そーだ そーだ」

ナチヤ「嫌なんだが・・・ トアスク助けてよ」

トアスク「・・・（面白そうだから黙ってみた）」

ライリ「はい 助けは無いようね。では、始めましょう」

ナチヤ「逃げられないな はあゝ やるか」

クレスの顔を思い浮かべる。確かに長い時間あってないが、はつきりとクレスの顔が思い出せる。多分、俺はこの顔を・・・いやクレスを忘れることは、無いだろう。

トアスク「おっ きたね」

シアン「どんな人かな？ワクワクが止まらないよ」

ナチャ「この家が・・・！？俺の家！」

ナチャ以外「えっ!？」

ナチャ「いや 確かに、この家だ。・・・」

ライリ「じゃあ クレスはナチャが死んだあとから、ずっとナチャの家にいるんだ」

シアン「中、見ようよ」

ナチャ「ああ (なんか緊張するな)」

トアスク「？ この人達は医者達かな？」

ナチャ「何か喋ってる。聞いてみるか」

ライリ「覗き見に盗聴か、今考えると犯罪ね」

シアン「いいんだよ。私たち死んでるんだから」

ライリ「・・・そうね(そういう問題なのかしら?)」

ナチャ「静かに。聞こえるぞ」

老婆「何度言っても無駄だよ あたしは、ここから離れない。たとえ死ぬとしてもね」

医者「よく考えて下さい。死んだら、何も出来なくなるんですよ。

だから、入院して下さい。クレスさん」

クレス「何も出来なくなるね・・・ でも死んだら出来ることもあるのよ」

看護師「？ 死んだら出来ること？」

クレス「そう あの人に会えるのよ。私を命をかけて守ってくれた、あの人に。」

シアン「命をかけて守ってくれた人って、ナチャの事じゃない？」
トアスク「まあ さっきの話を聞く限りでは、そうだな」
ナチャ「……」

医者「はあ、分かりました。では、一週間に一度は来ますよ。それでもいいですね」
クレス「それで、お願いします」
医者「では、今日は帰ります。では お体に気をつけて下さいね」
クレス「はい」

シアン「いや、なんか凄いとこ見たね」
ライリ「そうね。でも、クレスさんは、ずっと一人なのかしら？」
トアスク「ん、見た感じだと、一人だと思うよ」
ナチャ「……」
シアン「なんで黙っているのよ、ナチャ」
ナチャ「……ごめん いやちょっとな」
ライリ「……」
トアスク「ん？ クレスの様子がおかしいぞ！」
ナチャ「!!!」

クレス「ハアハア やっぱり限界かね。まあ これで、ナチャに会えるから、いいかな。・・・ちよつと心配だけどね。会えるのかも分からないし、むこうが覚えているかも分からないからね」
クレス「でも、いつか会えるよね ナチャ」
バタン その時、世界からまた一人死んだ。

全員「・・・」

トアスク「あつ！ どこに行くんだ。ナチャ」

ナチャ「（今から行けばいるかもしれない）」

シアン「うーん もしかしたら、死んだ人が来る、あの門に行つたんじゃない？」

ライリ「無二の門ね。確かに行きそうね」

トアスク「まさか、また移動かい？」

シアン「ほらっ 行くよ みんな」

ライリ「ええ」

トアスク「またか 頭が痛いんだけどな・・・」

ハアハア つたく、何で霊体なのに疲れるんだよ。
いくら走つたんだろう。クレスの願いを叶えるために、頑張りすぎ
だな、俺。

無二の門

ナチャ「ここか・・・」

どのくらい前だろうか、最後に、ここに来たのは。最初は、何が何だか分からなかったからな。あの頃の俺は、死後の世界なんて信じていなかったし。

ライリ「ちよつと」 待ちなさいよ」

シアン「トアスク 置いてきたけど、いつか」

ナチャ「よく分かったな。俺がここに来るって」

シアン「ここで、一番長く住んでるのは、誰と知っているのかな？」

ナチャ「シアン様々だろ。それより、探すの手伝ってくれないか？」

トアスク「ハア」 ちよつと ハアハア 待ってくれ ハアハア

よ」シアン「ごめんね」 だってトアスク遅いんだもん」

ライリ「とりあえず、謝ってないわね」

ナチャ「えつと」 話聞いてた？」

トアスク「ああ 手伝えばいいんだろ」

ナチャ「そうだよ よろしくな（よく聞いてたな）」

第2話 ナチヤの話は、とても長いね（後書き）

なかなか終わらないナチヤの話。

気づいたんですが 第2話で言ったクレスの言葉

クレス「・・・言わないでよ。この一時を大切にしたいんだから」

今考えると、テキストに書いたとは、思えませんね。

え？自慢ですか？

そうですよ。自慢ですよ。何か？

ちなみに俺は言わなければいけないことは、大抵忘れるので、言うのが後になります。まあそこらへんは暖かい目で見守って下さい。

（守らなくてもいいから、スルーして

では また次回に ノシ

第3話 次は誰にするんだろうか？（前書き）

ナチヤの話を早く終わらせたかったから、色々と展開速いです。
では、ごゆっくりお読みください

第3話 次は誰にするんだろうか？

ちきしよう 見つかんね。意地でも、見つける。クレスに、もうあんな顔は、して欲しくない。

トアスク「見つかったかい？」

ライリ「いいえ 私は見つけてないわ」

シアン「私も」

ライリ「ナチヤは、諦めずに探しているわね」

トアスク「何の力が彼を動かすのかね」

シアン「筋肉でしょ」

トアスク「いや そういう、物理的ではなくだな・・・」

シアン「じゃあ何なの？」

トアスク「いや それは、今はちょっと・・・」

トアスクはライリを一瞬見た。ライリは、かなり不機嫌そうな顔をして、ナチヤを見ている。

トアスク「まあ 多分見つからないとおも・・・って、ナチヤが走りだしたぞ」

シアン「追いかけるでしょ？」

ライリ「もちろん そのつもり」

トアスク「え？ 俺は頭痛いからゆっくり行くよ」

シアン「いいシーン見逃しても知らないから じゃあね」

シアンとライリは、急いでナチヤを追いかけた。

トアスク「元気あるな」 女の子ってのは「

今、一瞬だがクレスが見えた気がする。まったく、こんなに人数多いと、クレスが見えた所に簡単に行けやしない。どうにかして・・・

謎の人物「ナ・・・チャ？」

ナチャ「え!？」

振り返った、声のする方に。

その頃のシアンとライリ

シアン「ん〜 ナチャ殿は、どこだろ」

ライリ「殿って何よ。まったく急にどっか行っちゃうんだから」

シアン「あつ! あれじゃない? ジャンプすれば見えるよ」

ライリ「あつ! あれね。行くわよ シアン」

シアン「ラジャ〜」

謎の人物「ナチャなの?」

ナチャは、頭が混乱していた。(あれ? クレスはおばさんだったよな。何で俺が死んだ時ぐらいの年に戻っているんだ?)

補足【霊体は、自分の見た目を年齢別に変えることができます。さらに、最初は年齢が20歳ぐらいに設定されています】

ナチャ「(天の声が聞こえた)」

ナチャ「クレス・・・?」

クレス? 「やつぱり貴方はナチャなのね! 会いたかった」

ナチャ「クレス」

俺は、この時どんな顔をしていたんだろう。クレスが泣きながら抱きついてきて、無言で抱き返した。

シアン「あらら 抱きついて泣いてるよ」

トアスク「まあ ハッピーエンドか」

シアン「いつの間になっていたの……あの二人にとってはね。あと勝手に終わらせないでよ」

トアスク「いや エンドは言葉のあやだよ。しかし、後ろの殺気が怖いな」

シアン「そうだね。どうしようか」

トアスク「とりあえず、ナチャとクレスは、話すことが山ほどあるだろうから、そっとしておいてあげようか」

シアン「そうだね。で、ライリをどうする？」

トアスク「女の気持ちは、女の方が分かるだろ。頑張れ！俺はあつちに色々報告してくる」

シアン「あつ！ ちよつと！ ……」

ライリ「……」

シアン「えつと」 とりあえず、話してた所に戻るっか？」

ライリ「……そうね」

私は、もう二度と見たくない、ライリの本気で、殺気を放っている様子を。

トアスク「お取り込み中、失礼するよ」

ナチャ「ん？ トアスクか」

クレス「？」

誰？と言っている顔だ。

トアスク「初めまして、私は、ナチヤの友人のトアスクという者です。 ナチヤ 話したいことがいっぱいあるだろうから、話しててくれ。俺達は、24時間後に、話してた所に戻るから、落ち着いたら来てな」

ナチヤ「ああ 分かった。色々とすまん。ありがとう」

トアスク「礼なんていらさないよ。じゃ ごゆっくり」

（24時間後）

シアン「1日ではなくて24時間って言うのは、この世界に日にちがないからだよ。この世界は特別だからね。」

トアスク「まあ 俺から言わせれば、日にちがあるほうが特別だかな」

ライリ「二人で何言ってるのよ？」

シアン「えつと・・・ 助言？」

ライリ「はい？」

トアスク「まあ 気にするな。さっ そろそろ時間だな」

ナチヤ「大丈夫か？クレス」

クレス「うん。大丈夫だよ。まだちょっと慣れないけど」

霊体になったばかりで、クレスは上手く動けない。まあ 確かに、いきなり婆さんから、二十歳に若返って感覚も、違うだろうしな。

シアン「あっ！ 来た来た」

ナチャ「悪いな。待たせたか？」

トアスク「いや、特に待つてはいないよ。(まあ 謝罪するなら、ライリにしてくれると助かるな)」

クレス「えっと この人達は？」

ナチャ「こいつらは、この世界で、できた友達だ」

シアン「はいはい。私、シアンって言います。よろしく」

トアスク「ちよつと前にも言ったが、俺はトアスクだ。よろしく」

ライリ「・・・ライリよ。よろしく」

ナチャは、鈍感だから気付かないがライリはとても怒っている・・・。

クレス「あつ！ えっと私はクレスって言います。よろしくお願ひいたします」

ナチャ「俺はナチャって言うんだ。4649」

シアン「ねえねえ クレスって身長何cm？」

クレス「えっ えっと身長は・・・」

ナチャ「・・・え」

トアスク「ドンマイ」

トアスクが優しく肩を叩いてくれたが、それが更に俺を悲しくさせた。

ライリ「ナチャ！ちよつとこつち来なさい」

ナチャ「？ 何だよ。そんな怒った声して」

トアスク「(さつきから、ずっと怒ってたよ)」

ライリ「いいから来なさい」

ナチャ「ちよ！引つ張るな。服が伸びる」

その後、ライリに色々と言われたが よく分からなかった。(何を言われたかは、イメージしといて下さい)

トアスク「おつ 帰って来た。」

シアン「あれ？今回は意外と短いね」

クレス「？」

ライリ「まだ、あれだけど まあいいわ 次は誰が話すの？」

クレス「？ 話すって何をですか？」

ライリ「そういえば、説明してなかったわね。実はカクカクシカジカだったのよ」

クレス「え！酷いナチャがそんなことしてたなんて」

ナチャ「ちよつと待てー！！何を話したんだよ！」

ライリ「別に、起こった出来事をありのままに、話してただけよ」

トアスク「ハハハ まあ いいじゃないか ナチャ」

ナチャ「良くないよ・・・」

シアン「話を戻して。誰が話すの？」

トアスク「俺がやるうか？」

ライリ「そうね、トアスクでいいかしら」

シアン「えゝ 私が言いたい」

ライリ「じゃあ シアンでいいでしょうが・・・」

シアン「やったー！じゃ 話すね。これはね、私の家族についての話です」

第3話 次は誰にするんだろうか？（後書き）

クレスは、入れたほうが、良かったのか？ 主人公が完全に三角関係なんだよね。あとクレスのキャラですが、間違えてツンデレっぽく書いたところもあります。大人しいキャラでいきたいと思いません。

まあ 若い頃に、じゃかんツンデレだったが、年をとるにつれ、大人しい人になったと書けば丸く収まるけどな。

では 次は、いよいよシアンの話です。ちょっと出てきましたが、シアンが一番この世界に長く住んでいます。

まあ 関係は無いんですが・・・

では また次回に ノシ

第4話 シアンの過去（前書き）

シアンの過去の話です。

クレスが入りましたが、上手く書けるか不安ですね。

頑張れ クレス！

クレス「はい 頑張りたいと思います」

ナチヤ「え？ 何で出たの？」

シアン「クレス ここは出てきちゃ駄目だよ」

クレス「！ そうなんですか すみませんでした」

ナチヤ「では ごゆっくりお読みください」

トアスク「なんで」

ライリ「私たちは、出番がないのかしら」

ナチヤ「……（あるじゃん）」

第4話 シアンの過去

謎の人物「村長 行ってくるね！」

村長「ああ 行つてらっしゃい」

謎の人物は、元気に家から飛び出した。謎の人物はシアンです。シアンは、産まれて直ぐに、母親に捨てられ、この村の村長に預かってもらっている。父親は、産まれる前に死んだ、と村長に言われている。そんな彼女だが、ハンターに憧れ、ハンターになった。

シアン（5歳）「私ね、ハンターになるの。それでね、モンスターいっぱい倒すんだ」

村長「フッフ 楽しみだね」 シアンが、ハンターになるのが

シアン（5歳）「期待しててね。絶対に、凄いハンターになるからね」

シアン「そんなこともあったのかな」

受付嬢「私は村長から聞いたんだけど」

シアン「そっか そんなことより、何かいいクエストないの？」

受付嬢「そうね、これとかどう？ 【蟹の前夜祭】ダイミヨウザザミ3頭同時クエストよ」

シアン「へへ 面白そうなクエストね。んじゃ これでよろしく」

受付嬢「はい 確かに、受け取りました。では、明日の午前7時に竜車を用意しておくわ」

シアン「はい。じゃ また明日」

受付嬢は、軽く手を振って、書類を整理し始めた。

あの受付嬢は、少し特別で、ちょっと他の受付嬢と比べると、老け

ている。だが、それを本人に言っていると、半殺しは絶対される。何人が、言ってしまった、又は、バツゲームで言ったハンターがいたが、誰一人抵抗して勝ったことは無い。いちようシアンも気をつけている。

シアン「んゝ 今日、特にすることが無いなゝ。そゝだ マオリック農場に行こう！」

補足ですが、村の名前は マオリック村です。

シアン「みんなゝ 頑張ってる？」

アイルー全員「はいですにや シアンさん！」

シアン「よゝし 今日、暇だから私も手伝うよ」

アイルーから感激の声が大量に聞こえた。

農場の管理をしているアイルーの楽しみは、シアンではないかと、村で噂が流れている。

ナチャ「シアンって、アイルーに好かれるのか？」

シアン「うゝん 分かんない」

ライリ「まあ シアンは、可愛いもんね アイルーの気持ちもよく分かるよ」

シアン「えへへ 褒めても何もでないよ」

ライリ「別に、何か欲しいわけではないわよ」

トアスク「そんなことより、話の続きをしないか？」

シアン「えゝ まだ違うお話したいよね？ クレス」

クレス「えっ！ 私ですか？」

ナチャ「ちょ まだ慣れてないんだから、無茶ぶりするなよ」
シアン「む」 皆が、私の言うことに悉く反論してくる」
トアスク「俺は 反論してないような・・・」
シアン「えっと どこまで話したんだっけ？」
トアスク「（無視か・・・）」
シアン「そうそう、農場まで話したんだよね」
トアスク「まだ 何も言っていないがな」

明日 午前7時頃受付嬢「じゃ 行ってらっしゃい」
全身リオハートU装備でヒドウンボウを持ったシアンは竜車に乗ろうとしていた。

シアン「あれ？ 何で来たの？」

受付嬢「朝は、受注するハンターが少ないからね、来てあげたの」
シアン「そっか うん ありがとうね」

受付嬢「死んじゃ駄目よ」

シアン「私が蟹3匹で死ぬわけないでしょ」
受付嬢「フッフフ そうね」

砂漠【昼】

シアン「あゝ あっつい」

シアンは、クーラードリンクを飲んでいたが、暑くないとは言えない。

シアン「おっ！ 発見した」

ダイミヨウザミも、シアンを見つけて威嚇をしている。

シアン「ふふっ こんな雑魚余裕だよ」

第4話 シアンの過去（後書き）

シアンは、戦闘をさせる気がなかったんですが、トアスクもライリも戦闘を入れたと思うので入れてみました。あとネタが2Gなのは、気分です。後々3rdも入れようと思います。（フロンティアは詳しく知らないので、入れません）

では また次回に ノシ

第5話 【蟹の前夜祭】はテキストに考えました。(似てるのがあるかな?)

ヤバイ 更新スピードがおかしいなWWW

まあ ダイミヨウザミとの戦いです。考えるの疲れました。三匹
同時は、組み合わせが色々ありました。

最初から、三匹

最初は、二匹

最初は、一匹

今回は どれでしょうかね？

では ごゆっくりお読みください

そういえば、この前クレスにこのセリフをとられた。

第5話 【蟹の前夜祭】はテキストに考えました。(似てるのがあるかな?)

ダイミヨウザザミは、一方的にやられていた。攻撃が一撃当たれば勝てる相手だが、ダイミヨウザザミの攻撃は全く当たらない。

そして、シアンの攻撃は的確にダイミヨウザザミの弱点に当たっていく。

シアン「弱すぎるね、よくここまで生きてきたよ」

シアンがまた弓を引いた。

しかしダイミヨウザザミは余裕を持っていた。

シアン「！」

その時、シアンの下からもう一匹のダイミヨウザザミが出てきた。

シアンは、直感で気付き致命傷は防いだが、片足にダメージを食らった。

シアン「くっ 足が・・・ まあ いいハンデね」

シアンが本気になった。シアンは本気になるとキャラが変わるらしい。

ダイミヨウザザミは、二匹で一気に終わらせようと、攻めてきた。

一匹は、横向きに鎌を上げながら近づき、もう一匹は両鎌を上げて近づいてきた。シアンは動きが鈍くなっているため、ギリギリに避けた。ダイミヨウザザミは頭が良くないので、仲間同士で攻撃を食らった。シアンはそのチャンスを見逃さずに、攻撃をした。

ダイミヨウザザミの口から、泡が出ている。怒ったようだ。

シアン「あゝあ めんどくさいな お目潰せば、ある程度楽になるよね」

ダイミヨウザザミは、さつきより早くシアンに近づいてきたが、シアンは避けずに弓を溜めている。

ダイミヨウザザミは好機だと思い、さらにスピードを上げてきた。

シアンが弓を放った。シアンの弓使いは、特殊で、溜める時間を長

くすると、威力は多少落ちるが、通常の二倍くらいの数が射てるようになる。

そして、矢は放たれた。大部分は目に当たり、そうでないのも 弱点や足の関節に当たった。

ダイミヨウザザミは、たまらず怯んだ。

シアン「フフ これで終わりだと思っただけよな？」

シアンはさらに攻撃を続ける。相手が二匹いると思わせないくらいにシアンが優勢だった。しかし、物事はそう上手くいかない。三匹目がやってきた。

シアン「ったく 三匹目か 最初に戦ってたやつ倒せば、二匹ね（まあ 二匹は目が使い物にならないから、実際は1・5匹ってところかな）」

狙いは最初に戦ってたダイミヨウザザミになった。しかし、それを他のダイミヨウザザミがタイミングよく邪魔をした。

シアン「邪魔ばかりしていると、嫌われるよ。あんまり使いたくないけど・・・」

シアンはさつきとは違う溜め方をした。

シアン「出来るか知らないけど いけるかな」

シアンの放った弓は、宙を放射状に舞い、ダイミヨウザザミ達がいた中心で弓についていた爆弾がバラバラに落ちた。

ダイミヨウザザミ達は、突然の爆発に、多少驚いたが怯みはしなかった。

そして、煙が晴れたところでシアンを確認した。

シアン「じゃあね。三匹目は、空気だったよ」

三本の貫通矢が、同時に放たれた。ダイミヨウザザミの脳を貫通した。

シアン「貫通矢の溜めは、時間が異常にかかるから、使いにくいんだよね」

ダイミヨウザザミはその言葉を全て聞く前に、絶命した。

ナチャ「あれ？ シアンってこんなに強かったか？」

シアン「えゝ 知らないの 私は、地元では、無敵って呼ばれてたんだよ」

ライリ「知らなかった そんな人だったなんて・・・」

クレス「人は、見かけによらないんですね」

シアン「クレス それは、どういうことかな？」

トアスク「まあ 気にするなよ。(同じこと思ってた) シアン 足の怪我はどうしたんだ？」

シアン「そんなの戦いに集中してて、痛みなんて感じなかったよ」

クレス「そういえば、家族の話じゃなかったんですか？」

シアン「もちろん 家族の話だよ。さっきのは前置きでこっから本番！」

シアン「いっくよゝゝ」

第5話 【蟹の前夜祭】はテキトーに考えました。(似てるのがあるかな?)

すいません。なんか倒せなくなったので、シアンがめちゃくちゃ強くなりました。

あと 曲射をシアンは使っていました。テキトーに、表現しましたが・
・。

そして、シアンが「いっくよ」と言ったが、次回にまわされる。

トアスク「落ち着け シアン！」

シアン「え？ 落ち着いてるよ。落ち着いてなきゃ、あいつを殺せないじゃん」

トアスク「(怖っ！ キャラが、反対だな)」

この後、シアンは 他の人に押さえられ、おさまりました。

では また次回 ノシ

第6話 家族の定義も、あやふや（前書き）

今回でシアンの話が終わります。

何が家族の話なんだろうか？

気付いてると思いますが・・・

では ごゆっくりお読みください

第6話 家族の定義も、あやふや

シアン「むぐう ちよつと痛むな」
シアンは帰りの竜車に乗っていたが、ダイミヨウザザミの攻撃を地味に食らい、片足が痛くなっている。

シアン「ふぐ ただいま」

受付嬢「あら、お帰りなさい。どうだった、三匹同時は？」

シアン「まあ 普通かな。そんなに弱くなかったよ」

受付嬢「そう はい。これが今回の報酬金よ」

そういつて、ゼニやら札が入っている布の袋をカウンターから差し出した。

シアン「じゃあ 帰るね」

受付嬢「また 来てくださいね」

シアン「ここ以外に行けるとこないよ ばいばい」

シアンは、自分の怪我のことを言わなかった。なぜか、受付嬢は私が怪我や風邪をひくと、なにかと騒ぐから最近は隠してる。

シアン「ただいま」

村長「お帰り シアン」

シアン「そういえば 村長って、受付嬢とはどうやって知ったの？」

村長「・・・ あの人がこの村に派遣された時に出会ったんだよ」

シアン「（あの間は、なんだろ？） そっか でも私の過去の話をしていないでよ」

村長「何かいけないかい？」

シアン「うぐ 村長のいじわる。あ！ 私、用事思い出したから ちよつと出掛けてくるね」

村長「そうかい じゃあ 行ってらっしゃい」

シアン「うん。行ってきま〜す」

シアン「あの間が気になるな」 ちよっと調べてみよ」

シアン「こちら シアン 敵はいない。侵入する」

シアンは、何かのマネをしながら、村の集会所に忍びこんだ。

シアン「まあ ここが手っ取り早いよね」

ここは、ギルドの情報がある部屋。泥棒は、受付嬢の資料を探している。

シアン「むむ 発見した 本部応答願う 目的の物が見つかった」
まだマネを続けていたようだ。そして シアンは見つけた資料を見た。

シアン「（上手くすれば あの受付の人のことが分かるかも）」

シアン「・・・え？」

受付嬢「何してるの!」

シアン「あっ! えっとこれには浅いけど訳があるの」

受付嬢「言い訳なんて聞きたくないのよ。それより今持つてるその資料は何？」

シアン「!!! これは・・・」

受付嬢「いいから返しなさい」

シアンは 反抗出来ずに資料を受付嬢に取られた。

受付嬢「・・・ これを見たの？」

シアン「・・・うん ごめんなさい」

受付嬢「まあ いつかは、話さないといけなかったから」

シアン「じゃあ やっぱり」

受付嬢「そうよ 私があなたの母親よ」

シアンは、状況が上手く把握出来なかった。目の前にいる、受付嬢の人が自分の母親。今まで普通に友達感覚で喋っていたのでどんな喋り方をすればいいかも分からない。

母親「シアン よく聞いてね。私は、貴方を捨てた。でも、後悔したの」

シアン「・・・」

母親「だから、頑張って受付嬢になって、この村に来た。貴方に会えて嬉しかったわ。でも、私は自分の一番大切な子供を捨てた、最低な親よ。だから、言い出せなかった。」

シアンは、自分でも気付かないうちに泣いていた。

母親「泣いちゃ駄目よ。せつかくの可愛い顔なんだから。そんな顔を誰が見たがるの？」

そう言ってシアンの頭をなでる。十数年間、溜めていた親への感情が一気に出て、涙が止まらなくなっていた。

母親「・・・」

シアンは母親に抱かれ、気がすむまで泣いた。

シアン「あれ？ いつのまに寝たんだろ？」

周りを見渡す

シアン「お母さん！ どこ！？ ねえ」

そこに母親の姿は、無く一つの紙が置いてあった。

シアンへ

私は貴方に会わせる顔なんて無い。でも、最後に、話になってないけど、母親として、話せて良かった。あと、お父さんは立派な八

ンターだったのよ。貴方も立派なハンターになりなさい。
最後に

愛してるよ シアン

〜〜より。

シアン「……ずるいよ。自分で勝手に決めて、どこかに行っちゃ
うなんて……」

村長「本当に行くのかい？」

シアン「うん 大丈夫だよ。私は、強いもん」

村長「それでも心配だよ。本当の親では、ないけどここまで育てて
きたからね」

シアン「……うん。ありがとう 村長。それじゃ 行ってきます」

ライリ「なんか、空気が重くなったような……」

シアン「なに皆静まってるのよ〜 別に私は、平気だし気にしない
で」

ナチャ「ああ すまないな。それで母親は見つかったのか？」

シアン「見つけられなかったよ。でもいいの。あの時に、母親だっ
て分かったから」

トアスク「ふっ シアンらしいな」

シアン「ちよっと〜 今鼻で笑ったでしょ!」

トアスク「笑ってないよ」

笑いながら言っても、説得力がない。

シアン「あとで トアスクは、お酒を頭が痛くなるまで飲むの刑ね」
トアスク「ひどっ!」

ナチャ「ドンマイ」

ライリ「自業自得ね」

クレス「頑張ってください」

トアスク「誰も助けはくれないんだね・・・」

シアン「私が終わったから、次は誰が話す？」

ライリ「私は、最後がいいわね。(こんな空気になつては、話ずらいわ)」

トアスク「じゃあ 話すのは俺か。んゝとな この話は、俺がハンターでバリバリ働いてた頃の話だ」

第6話 家族の定義も、あやふや（後書き）

今回を終えて

母親と村長の名前は、考えるのがめんどろだったんで、書きませんでした。あと 受付嬢であってるのでしょうか？（モンハンのクエストを受注する時の人）

今回は、トアスクの話です。キャラが沢山でる予定なので、疲れますね、名前考えるのが。

ナチャ「名前は、俺が一番酷いよな」

トアスク「いや 俺じゃないか？」

シアン「私だよ」

ライリ「シアンは、無いわ」

クレス「私は、比較的普通ですね」

これには、ある方程式？がある。ちなみに三文字が多いのは仕様です。

ナチャ「そうゆうことか」

トアスク「ああ そのようだ」

ナチャ& a m p ;トアスク「男性の名前をテキトーにするなー！！」

では また次回に ノシ

第7話 トアスクの過去（前書き）

トアスクの過去の話です。

一話で終わりました。

全体としては、短いですが、一話としては長いです。

あと補足ですが、遅刻してくる人は礼儀がないと俺は思います。

では ごゆっくり お読みください

第7話 トアスクの過去

ここはある街の集会所

謎の人物「よっ！トアスク」

トアスク「ん？ シナオか」

シナオ「ん？ シナオか じゃねえよ。もつと挨拶みたいのがあるだろ」

デイルク「遅刻してきた奴に挨拶などいらなと思うが？」

シナオ「いや どんな人にも礼儀はきちんとしないと駄目だ」

デイルク「なら礼儀がなつてない奴にも礼儀をきちんとするのか？」

シナオ「そりゃしなくてもいい(さつきと矛盾してるが、どうせデイルクは、礼儀がなつてないことをするはずだ)」

デイルク「なら、お前に礼儀をきちんとしなくてもいいことになるな」

トアスク「確かに そうなるね」

シナオ「あっ！」

謎の人物「・・・早く行かない？」

シナオ「クリスト！お前いつからいたんだ？」

トアスク「ずっと いたよ」

シナオ「え マジ？・・・ごめん」

クリスト「・・・」

シナオ「(怒ってるのか、ないのか、わかんねー)」

デイルク「クリストの言う通りクエスト行くか」

トアスク「そうだな 今日、何を狩るんだ？」

クリスト「・・・モノブロスとディアブロス・・・両方とも亜種」

トアスク「意外ときついな」

シナオ「俺にとっては、モンスターなんて皆雑魚だぜ！」

デイルク「そのアホ発言をいつまで言えるんかね？」

シナオ「いつまでもさ！」

デイルク「駄目だ。この馬鹿。じゃ行くか」

シナオ「デイルク テメーさつき馬鹿って言ったろ」

デイルク「何のことだ？馬鹿」

シナオ「お前ー！ 喰らえ、必殺【スーパーシナオタツクル】」

しかし、外れたようだ。

トアスク「あゝあ やっちゃったよ」

シナオ「痛って〜」

その時、ギルドマネージャーの怒りの拳がふりおろされた。

竜車の中

シナオ「痛い。あのギルドマネージャー、モンスターより強いんじゃないの？」

デイルク「また殴られるぞ」

トアスク「まあ ここには、居ないから大丈夫だろ」

クリスト「・・・」

砂漠【夜】

シナオ「寒いな。ホットドリンクもう一本飲もうか？」

デイルク「止めとけ、後で泣くぞ」

シナオ「俺が泣くわけないだろ」

トアスク「そんなことより、白いあの子を見つけたよ」

白いモノプロスがこちらを見て威嚇していた。

シナオ「おっしや シナオ様の力を見せてやるぜ」

デイルク「死ななければ、なんでもいいさ」

トアスク「まあ このメンバーを倒せる奴はいるのかね？」

クリスト「・・・いない」

トアスク「そうだな」

モノブ羅斯は、先手必勝で、突進をしてきた。

シナオ「余裕だぜ！」

ハンター達は、バラバラに避けた。

クリスト「……」

クリストは、避けたらへビーボウガンで直ぐ撃ち始めた。

モノブ羅斯は、標的をクリストにし、振り向いたとき、トアスクのハンマーが頭を豪快に撲った。

シナオ「ナイス スタンプ！ 次は俺だな」

シナオは太刀でモノブ羅斯の足を切りつけた。

モノブ羅斯は、危険だと感じ、地中に潜り逃げようとした。

デイルク「潜れると思っっているのか？」

デイルクは、潜る時のことを考えあらかじめ、いい場所で大剣をためていた。

デイルク「オラアアア！！！」

その強力な一撃は、モノブ羅斯の尻尾を、綺麗に一刀両断した。

モノブ羅斯は、尻尾を切られた痛みで、悶え苦しんでいる。

トアスク「よし 一気に畳み掛けるか」

全員で、モノブ羅斯を倒そうとした時

シナオ「ん？ おい！ 皆離れる！」

黒いディアブ羅斯がこちらに突進を、しかけていた。

全員急いで、モノブ羅斯から離れた。

デイルク「危なかつたな」

シナオ「俺のお陰だろ」

シナオは、自慢そうな顔をしている。

デイルク「まあ 今回は、誉めてやる」

シナオ「なんで今回だけなんだよ！」

トアスク「もうお喋りは、させてくれなそうだよ」

白いモノブ羅斯と黒いディアブ羅斯は、早くも突進をしかけようとした。

クリスト「モノブロス・・・一人で十分」

トアスク「じゃ モノブロスは頼んだぞ。俺達は、ディアブロスを狙う」

シナオ「おうよ」

ディルク「了解した」

モノブロスは、尻尾を切ったディルクを狙おうとしたが、クリストがそれを阻止する。

シナオ「やっぱ クリスト強いな」

ディルク「前をよく見る馬鹿」

シナオ「俺は馬鹿じゃな・・・うげふ」

ディアブロスは、突進を止めて、追いかけてきたハンターにむけて、尻尾を振っていた。

トアスク「大丈夫か？」

シナオ「いてゝ 大丈夫だ 問題ない」

ディルク「アホなこと言ってるから、本当に大丈夫だな」

ディアブロスは、追撃をしかけようと、シナオに突進をしようとしたが、トアスクのハンマーが、頭に直撃して怯んだ。

シナオ「サンキュー トアスク」

クリスト「シナオ・・・危険かも」

モノブロスがシナオに向かって突進をしていた。

シナオ「ちょよ なんで皆俺が狙いなんだよ」

だがシナオに攻撃が成功する直前にモノブロスは、クリストの弾によつて転んだ。

シナオ「よっしゃ 止めは俺が決めるぜ」

シナオは、ある一部のハンターが使える太刀の技術を使える。

シナオ「喰らえ 必殺【スーパーシナオ大回転斬り】」

通常の鬼人斬りの最後から、更に大きく回転しながら斬る技である。だがディアブロスがシナオを狙って攻撃をしていた。

トアスク「そつちにディアブロスが行ったぞ・・・って、おい！」

シナオの必殺技は、やたらと隙間が多い。

シナオ「また 俺かよ！ いやもう攻撃は止まらないぜ」

シナオにディアブロスの攻撃が当たる直前に

ディルク「馬鹿は手間がかかるな」

ディルクが足元に入り、大剣で足をおもいつきり、斬りつけた。

ディアブロスは、突進中で攻撃はないと安心していただけのと急な攻撃で、倒れた。

ディルク「必殺なんだろ 必ず殺せよ」

ディアブロスは、モノブロスの横に倒れていた。

シナオ「任せな！ いくぜえええ」

シナオの大回転斬りがモノブロスとディアブロスを同時に斬った。

シナオ「いや〜 疲れたな」

トアスク「そうだね」

ディルク「ああ、あの時にチャンスをあげたのにな」

クリスト「シナオ・・・カッコ悪い」

シナオ「いや 無理でしょ。二体同時に倒すなんて。でもモノブロスは倒したぜ」

トアスク「え〜 シナオならやってくれると思ってただけだな」

クリスト「全くだな」

シナオ「テメーら 絶対期待とかしてなかっただろ。じゃなきや、直ぐにディアブロスが、トアスクとディルクのコンボ攻撃で死ななかつたし」

ディルク「何のことだ？」

シナオ「ディルク一回殴らせる！」

トアスク「止めなよ。まあ、途中は、どうあれ倒した結果は、変わらないだろ」

シナオ「ちっ そうだけだよ〜」

ディルク「そうゆうことだな」
クリスト「そうだね・・・」

ナチャ「シナオって馬鹿だな」

ライリ「あんたが言える立場じゃないでしょ」

ナチャ「いや 俺は馬鹿じゃないし」

シアン「馬鹿だよ 多分」

クレス「うん。馬鹿だと思う」

トアスク「馬鹿の鏡でしょ」

ナチャ「え？俺ってそんなキャラだっけ？」

ライリ「冗談よ。なに騙されてるの」

ナチャ「ちょ 笑うな。(騙された)」

シアン「トアスクも結構強かったんだね」

トアスク「まあ 俺は四人組だったからな。一人のシアンとは違うさ」

クレス「シアンさんは、ずっと一人だったんですか？」

シアン「別にそんなことは、なかったよ。100回に一回グループ組んで狩ったよ」

全員「(・・・一人だね)」

シアン「ん？どうしたの？」

ナチャ「もうなんでもいいよ。じゃあ次はライリだろ？」

ライリ「そうね。私も家族の話だけど、兄弟の話をするわ」

第7話 トアスクの過去（後書き）

いや〜 終わらせ方がよく分からなかったので、テキトーにしときました。

シナオ「俺ってシアンと名前が似てない？」

シアン「似てるよね。試しに、名前のところを最初の文字のシにしてみる？」

シ「いいね。賛成」

シ「俺は、シナオ 世界一の馬鹿だよ」

シ「ちょ 勝手に変なこと喋んな」

ク「私もクリストさんと被りますね」

ク「・・・」

ク「えつと・・・」

ク「・・・」

ク「・・・」

ナチャ「なんだこの茶番」

ライリ「まあ たまにはいいんじゃない？」

トアスク「たまにじゃないような・・・」

ライリ「そっそれは、あれよ。気にしたら負けみたいな感じよ」

トアスク& amp ;ナチャ「・・・」

ライリ「ちよつと！黙り込まないでよ！」

デイルク「俺の出番を作ってはくれないか？」

シ「や〜い デイルクのアホ顔〜」

シ「あ！止める。俺が殴られるだ」 ぐはっ！

シアン「いいね。シ、気に入った」

クレス「私は駄目ですね」

ナチャ「え〜つと、もうグダグダだから、止めようか。では また
次回 ノシ」

第8話 ライリの過去。そして後書きの人物を一個間違えた（前書き）

とうとう全員が、過去の話をしませぬ。まあ、過去の話は、作ればいくらでも、できますね。ちなみに、ナチヤとクレスを除いた人達の死ぬやつは、まだ考えていません。いつかでてくると思います。では、ごゆっくり お読みください

第8話 ライリの過去。そして後書きの人物を一個間違えた

ライリ「これは、私が小さい時の話よ」

ナチャ「ライリの小さい時ってあんまり想像出来ないな」

ライリ「なんでもいいでしょ。始めるわよ」

謎の人物「フェリクス兄ちゃん起きてよ」

フェリクス「なんだよ ライリ。兄ちゃんは眠いの」

ライリ「アルミン兄ちゃんが呼んでるの！起きて！」

フェリクス「はいはい。起きればいいんだろ」

ライリ「早くアルミン兄ちゃんの所に行くの！」

フェリクス「分かったから、押すな。階段が危ないだろ」

ライリ宅の居間

アルミン「いつまで寝てるつもりだったんだ？」

フェリクス「そりゃ、寝れるまでさ」

アルミン「永遠の眠りにつくか？」

フェリクス「それは、遠慮しとく」

ライリ「アルミン兄ちゃん！私、フェリクス兄ちゃんを一人で起こして呼んだよ！」

アルミン「偉いな」 さすが我が妹のライリだ。どっかの弟とは違うな

そう言つて頭を撫でた。

フェリクス「どっかの弟って俺だけじゃん・・・」

謎の人物「あんたたち、いつまで漫才みたいのしているの。今日は、ハンターの仕事があるんじゃないの？」

今話した人はライリの母、ミヨアだ。

フェリクス「そうだったけ？」

アルミン「そうだよ。忘れたのか？」

フェリクス「えっと、レウスだったけ？」

アルミン「今日は、クックだろ。あと、お前じゃまだレウスは倒せない」

フェリクス「いや、俺はいけるさ！」

アルミン「はあ、早く用意しろよ。おいてくぞ。（その自信はどこからでてくるんだ）」

フェリクス「任せな！直ぐに用意するぜ」

フェリクスはそう言い二階の自分の部屋に戻った。

ミヨア「ほら、ライリ。貴方の朝ごはんよ」

モンハンで出てくる食材を使った料理が運ばれてきた。（この言い方で、料理系は全て大丈夫だな）

ライリ「やった！野菜がある！」

アルミン「ライリも珍しいよな。野菜が好きなんて」

ミヨア「まあ、あの子は意外と一般人とは違う所が多いわよね」

ライリは食事に集中していて、あまり聞いていない。

（数分後）

フェリクス「準備できたぜ」

アルミン「じゃあ行くか」

アルミンは、フェリクスより一年前にハンターになり、フェリクスよりもハンターランクは高いが、今はフェリクスの手伝いをしてい

〈集会所〉

フェリクス「クツクか。何回くらい行っただけ？」

アルミン「15回くらいじゃないか？」

フェリクス「なんでもいいや」

そして、アルミンとフェリクスは竜車に乗り込んだ。

その頃のライリ

ライリ「そうか。ハンターは、あの変な乗り物に乗って行くんだ」

ライリは、兄達を追いかけて驚かせようとしたが、子供のライリは竜車さえ知らず、その竜車が全て目的地が違うことも知らない。

ライリ「よし。私も乗ろう」

ライリは、一番近くにあった。竜車の荷台に飛び込んだ。

火山【昼】

謎の人物「何をしている。小娘」

ライリ「zzzz」

その時、何かがぎれる音がした。

謎の人物「起きろー！！」

ライリ「わっ！なになに、モンスター？」

謎の人物「お前はここで何をしているんだと聞いている」

ライリ「え？私？私は、お兄ちゃん達を追いかけて、きたんだよ」

謎の人物「何故俺が乗った竜車にいた？」

ライリ「お兄ちゃん達が竜車に乗ったから」

謎の人物「（駄目だなこりゃ）とりあえず帰れ」

ライリ「でも、竜車行っちゃったよ」

謎の人物「なに！」

どうやら、童車を操るアイルーは、めんどくさがりで、早く帰ったらしい。

謎の人物「はあゝ　なんで今日は、こんなに運が悪いんだ」

ライリ「オジサン。お兄ちゃん達どこ？」

謎の人物「俺はオジサンじゃない。フォルクだ」

ライリ「じゃ、フォルクオジサンお兄ちゃん達はどこ？」

フォルク「俺はオジサンと呼ばれるほど老けてないが、まあいい。今の状況を説明してやる」

〜フォルクの説明〜

ライリ「じゃあ私はお兄ちゃん達に会えないの？」

フォルク「そうだ」

ライリ「やだ！お兄ちゃん達に会いたい」

フォルク「そんなこと言われてもな」

ライリ「会いたい。会いたい。あゝたゝいゝ」

ライリが泣きながら叫んでいる。

フォルク「分かった。分かった。お兄ちゃん達に会いたいなら、俺の言うことを聞け」

ライリ「うん！何するの！」

フォルク「（切り替え早いな）俺がクエストを終了すれば帰れる。だから、お前は、このキャンプ場で待つてろ」

ライリ「私、お前じゃないもんライリだもん」

フォルク「（子供はめんどいな）分かった。ライリは、ここで大人しくしててな」

ライリ「はい！了解しました」

敬礼をしながら、言った。

フォルク「やることないだろうから、そこのベットで寝てればいいさ」

ライリ「私眠たくないよ」

フォルク「それじゃあ、寝なくてもいいよ。あと、絶対に、ここから離れるなよ。死ぬからな」

ライリ「！怖いよ」

フォルク「ここは安全だ。心配するな。じゃ行ってくる」

ライリ「行つてらっしやあゝい」

フォルク「（やっぱり切り替えが早いな）」

第8話 ライリの過去。そして後書きの人物を一個間違えた（後書き）

ライリの子供の時の話にするはずではなかったんだが、都合上こうなった。

そして、新キャラがまた増えた。

フェリクス「俺は、クレスの兄でアルミン兄さんの弟だ」

アルミン「まあ、フェリクスの説明で俺がどうゆう関係分かるだろ」

シナオ「分かったぜ。アルミンとフェリクスは兄弟であり恋人なんだな」

デルク「どつからそんな考え方になるんだ。馬鹿が」

シナオ「いや、いつも言ってるけど馬鹿じゃないし」

クレス「ナチャも馬鹿ですよ」

ナチャ「またその話かよ！」

クレス「ちよつと、私のお兄ちゃん達の出番が少ないじゃない」

ナチャ「お兄ちゃんって……。似合わない」

ライリ「!!!いいじゃない。呼び方なんて！ナチャのアホ、馬鹿」

ナチャ「ひどっ！そこまで言わなくても」

ライリ「ふん。知らない！」

アルミン「ナチャ君でいいのかな？」

ナチャ「あつ、はい。そうですねけど何か？」

アルミン「ライリは絶対に渡さないからな!!!」

ナチャ「はい？どうゆうこと？」

フェリクス「あゝあ。まあ、アルミンはシスコンなんだよ」

アルミン「なっ！シスコンではない、唯一の妹を大切にしているだけだ！」

フェリクス「じゃあ、唯一の弟も大切にしろよ」

アルミン「してるだろ？」

フェリクス「してねえよ」

ミョア「なに、あんたらやってんのよ。後書きで600文字以上って、ふざけてるの！」

ライリ「あつ。お母さんが怒った」

シアン「最後の出番は、私ね！では また次回」

いやいや やらせないから、では また次回 ノシ

第9話 ライリは子供の頃と性格が随分と違う(前書き)

ライリって子供の頃と性格が全く違いますね。
まあ 何があって、ツンデレになったんだか。
では ごゆっくり お読みください

第9話 ライリは子供の頃と性格が随分と違う

ライリ「暇だな。お父さんはギルドでギルドクイーンとして働いてるんだから、ライリを迎えに来てもいいじゃん」

ライリは、ギルドナイトをギルドクイーンと間違えている。

ライリ「キャンプ場から出たら死ぬ、なんてどうせデタラメだから、遊びに行こつと」

ライリはキャンプ場から出た。

そこには、赤い火竜、リオレウスがいた。

ライリ「なにあのかつこいいの!？」

リオレウスは相手は子供だと、余裕である。

ライリ「わ〜い。遊ぼうよ〜」

フォルク「!!!あの馬鹿」

レウスは、火球をはくモーションをしている。

ライリ「口が赤い!火でも出すのかな?」

子供のライリに容赦なく火球を放った。

しかし、ライリは当たる寸前に、フォルクに助けられた。

フォルク「外には出るなと言ったはずだろ!!!」

ライリ「嘘だと、思ったの!」

フォルク「もう嘘ではないことは、分かっただろ。だからキャンプ場に戻れ」

ライリ「え〜。やだ!だつてあんなにかっこいいだよ」

フォルク「理由になつてないから。あと、お前・・じゃなくて、ライリはあの火球を喰らって死なないのか?」

リオレウスは、フォルクに突進や火球を仕掛けるが、全て避けられた。

ライリ「死なないもん!」

フォルク「はあ〜 あんまりやりたくないが」

フォルクは、ライリの首を双剣の持ち手で殴り気絶させた。そして、

急いでキャンプ場に行くこうとした時。

レウス「ギャオオー」

キヤーシャベッター。

レウスはキャンプ場に行く道の真ん中にいた。

フォルク「ちっ。邪魔だな」

レウスは、そこを退こうしないで火球ばかり放っている。

フォルク「この状況・・・どうするか」

閃光玉があるが、閃光玉を投げて、あそこで暴れても困るし・・・
フォルクが考えているとき、急にレウスの尻尾が切られた。

フォルク「なんだ!!!」

謎の人物「クレスは何処だ？話さないと殺すぞ、ヘタレウス」

レウスの尻尾を切った人物は赤い服・・・いやギルドナイトスーツを着ている人だった。

しかし、レウスは人語を理解できずに攻撃を仕掛けようとした。

ギルドナイト「これだから低脳なやつは嫌いなんだよ」

レウスは突進をしたが、頭を蹴られながら、背中に乗られた。

ギルドナイト「内臓はここかな？」

レウスは背中から太刀を思いっきり刺された。そして、火炎袋が破られ、火球が出せなくなった。

ギルドナイト「レウスが火球出せないなら、家の兄弟でも倒せそうだな」

レウスは抵抗しようと翼をひろげ飛ぼうとした。

ギルドナイト「めんどいな。翼なんて邪魔なだけだろ？レウスちゃん」

そして、レウスの翼はギルドナイトによってボロボロに切り裂かれた。

フォルク「なんだ・・・あの化け物は」

レウスがとれる行動は、突進しかなくなった。

ギルドナイト「上に俺がいちゃ、お前は何も出来ないな。じゃ 終わりだ。よっ」と

そして、ギルドナイトの太刀がレウスの頭を真つ二つにした。
ギルドナイト「？あそこにいるのは？クレスか？」
フォルク「ヤバイ。こっちに気づいた。逃げても無駄だろうな。」
逆に近くか」
ギルドナイト「やっぱり腕の中にいるのはクレスか」
フォルク「えつと・・・何をすればいいですか？」
ギルドナイト「お前がクレスを助けたのか？」
フォルクは、ここまでの経路を話した。

ギルドナイト「ハハハ。流石我が娘だな」
フォルク「いやいや。あまりにも危険でしょ」
ギルドナイト「いや、普通はレウスを見たら動けなくなるだろ」
フォルク「いや、逆に緊張感が全くないのも困りますよ」
フォルクはギルドナイトと仲が良くなっていた。
ギルドナイト「そういえば自己紹介がまだ、だったな。俺は、そこ
でのびてるライリの父親のサバレだ。よろしく」
フォルク「俺はフォルクだ。よろしく」
サバレ「いやゝ。俺の嫁のミヨアから連絡があつてな」
フォルク「だから、ここが分かったのか」
サバレ「でも目撃者がいなかったら、見つからなかっただろうな」
フォルク「運がいい子だな」
サバレ「まあ 俺の娘だからな」
二人は笑った。
ライリ「・・・ん？ここはキャンプ場のベット？」
サバレ「おつ。ようやく目を覚ましたか」
ライリ「あ！お父さんだ！」
ライリはサバレに抱きついた。

サバレ「もう勝手にどっか行くんじゃないぞ」

ライリ「うん！知ってる」

サバレ「知ってるなら、行くなよな！」

ライリ「キヤー。お父さんが怒った」

羨ましい親子の会話がフォルクの前でされていた。

フォルク「（俺も娘が欲しいな）」

ライリ宅

サバレ「今帰ったぞ」

ライリ「ただいま」

元気よく家に帰ったが。

ミヨア「ライリ！貴方何処に行ってたのよ！心配したんだからね！」

ミヨアが本気で怒っている。

ライリ「お父さん、怖い」

そう言っつて、サバレにしがみついた。

ミヨア「お父さんもお父さんよ。なんでガミガミ」

フェリクス「あゝあ。また母さんの説教が始まったよ」

アルミン「良かった。ライリが生きていて良かった。神様ありがとう

うございます。」

フェリクス「（駄目だなこいつ）」

ライリ「こんな感じかしら？」

ナチャ「あんまり家族の話ではないな」

ライリ「いいでしょ。文句でもある？」

ナチヤ「いえ。ありません」

シアン「フォルクって結局どんな人なの？」

ライリ「子供に人気なオジサンみたいな感じだよ。オジサンという年ではないけどね」

クレス「さっきの話でも言っていましたね」

トアスク「サバレは強んだな。そのレウスは上位だろ？」

ライリ「確かだね。まあ私のお父さんはG級ハンターだったから」

ナチヤ「G級か。凄いな」

シアン「皆、話が終わったけど、どうする？」

トアスク「話たい人が話すのでいいんじゃない？」

ナチヤ「いいと思うよ」

ライリ「異論は無いわ」

クレス「私は、どうすれば・・・」

シアン「あ！クレスがいたんだ。じゃあやっぱりクレスに話してもらおうよ」

ナチヤ「クレス 大丈夫か？」

クレス「大丈夫だよ。昔のことは結構覚えているから」

トアスク「何の話だい？」

クレス「私とナチヤが初めて会った日の話です」

ナチヤ「え！それは、止めない？」

シアン「面白そ〜。話してよ」

ナチヤ「いや、やめる！」

ライリ「ナチヤに拒否する権利は無いわよ。何度も言わせないで」

ナチヤ「・・・マジか」

クレス「えっと。話しますね」

第9話 ライリは子供の頃と性格が随分と違う(後書き)

どんな話にしようか、まだ考えていません。
まあ、恥ずかしいような話にしないと、いけないので、ちゃんと書けるか不安ですね。

ナチヤ「心配ならやめよう！」

シアン「やめないよ〜」

クレス「ナチヤ。ごめんね」

ナチヤ「え？ああ、まあ・・・その・・・(謝られたら批判が出来ない)」

サバレ「ライリ！俺の胸に飛び込んでこい！」

ライリ「いきなり出てきて、なによ？」

アルミン「いくら父さんでも、それは譲れない」

サバレ「アルミン。俺に勝てると思ってるのか？」

アルミン「愛は奇跡を起こす！」

サバレ「じゃあ勝負だ！」

アルミン& amp ;サバレ「さあ 来い！ライリ！」

ライリ「・・・」

フェリクス「ドンマイ」

ライリ「・・・うつさい」

フォルク「俺はもう本編では出なそうだな」

シアン「いや。頑張ればでれるよ」

フォルク「！何を頑張るんだ」

シアン「まだ出ていないキャラになるんだよ」

フォルク「まだ出ていないキャラか」

シナオ「ひゃっほ〜い。俺が連続で後書きに登場だぜ」

ディルク「うるさい。クリストを見習え」

クリスト「・・・」

シナオ「いや。クリストを見習ったら喋らないじゃん」

デイルク「うるさいのよりは、ました」

クリスト「・・・前は後書きに出れなかった」

シナオ「確かに。出てなかったな」

トアスク「実は俺も出てないんだ。重要キャラなのにな」

シアン「まあ一番キャラが薄いからだよ」

トアスク「俺も何かキャラを作らないとな」

フォルク&トアスク「・・・思いつかない」

ナチャ「つたく。いつまでこの茶番するんだよ」

デイルク「え？俺がやるの？分かったよ。確かに、それは困る」

シナオ「今誰と話してたんだ？」

デイルク「ん？まあ 秘密だ。えっと、そろそろキャラが多くなっ

たのでキャラ紹介したいと思います。なので、クレスの話は次回の

次回にします」

ナチャ「普通は俺が言うんじゃないのかよ」

ライリ「ナチャじゃ役不足なのよ」

アルミン「ナチャ。貴様、許さん」

サバレ「一時休戦だ。殺るぞ」

ナチャ「は？なんでだよ。しかも俺は死んでるし」

アルミン「痛みを味わえ」

ライリ「やめてよ。アルミンお兄ちゃんとお父さん」

アルミン&サバレ「すまん。全力で謝るから許してくれ」

ミヨア「私は許さないわよ」

全員「あ！」

この後ミヨアの説教が長い間続いた。

では次回はディルクが言った通りキャラ紹介です。
後書きなのに、1000文字越えてる。なんか、おまけ、みたいな
感じですね。

では また次回 ノシ

第10回 キャラ紹介(前書き)

言うことは無い。お前の信じる道を行け。それが一番だ。

ではごゆっくり お読みください

第10回 キャラ紹介

ナチヤ「今回はキャラ紹介です。テキトーに見ても問題はありませ
ん」

主人公：ナチヤ

男。性格は常識人。よくいじられる。

ナチヤ「何か皆の視線が怖い。そんなに俺が主人公なのが嫌なのか
？」

ヒロイン：ライリ

女。性格はツンデレ。ナチヤのことが、あれかもしれない。

ライリ「はあく。アルミンお兄ちゃんとお父さんが五月蠅いわね」

重要人物：シアン

女。性格は子供っぽい。死後の世界で一番長く住んでいる。

シアン「戦闘になると性格が変わるらしいけど本当なのかな？」

重要人物：トアスク

男。性格は穏やか。シアンによく迷惑をかけられている。

トアスク「俺の武器がハンマーって少し意外なんだよね」

重要人物：クレス

女。性格は大人しい。ナチヤのことを、あれかもしれない

クレス「皆さん。よろしくお願いいたします」

キャラ：村長

女だと思われる。シアンの育て親。性格は特に決めてない。

村長「これが最後の出番かね」

キャラ：受付嬢（特別）

女。シアンの母親だった人物。お父さんフラグを立てて、行方不明になった。

受付嬢「なんか言い方が酷いわね」

キャラ：クリスト

男。性格は無口。だが仲間とは上手くやっている。

クリスト「……」

キャラ：シナオ

男。性格は馬鹿。ディルクによくちよっかいをだす。

シナオ「俺が真の主人公だぜ！」

キャラ：ディルク

男。性格は常識人。シナオによくツツコミを入れる。

ディルク「また、あの馬鹿が変なこと言ってるな」

キャラ：フェリクス

男。性格は多少真面目の面倒くさがり。

フェリクス「妹も可愛いと思うが、アルミン兄さんや父さんほど愛していないな」

キャラ：アルミン

男。性格は常識人だがシスコンである。

アルミン「ライリがヒロインなら主人公は俺じゃないと駄目だな。
ナチヤを殺すか」

キャラ：サバレ

男。性格は親バカ。ライリの父親。

サバレ「誰が何の役なのか知らないが、ライリは絶対に渡さない」

キャラ：ミョア

ライリの母親。性格は少し怒りやすい。よく夫のサバレに説教をしている

ミョア「別にいつも怒ってるわけじゃないわ」

キャラ：フォルク

男。性格は心配性かな。ライリを一人に出来ず戻ろうとしてた時に
レウスと会った。

フォルク「いや子供をあんな所に一人にする人はいないだろ」

謎：作者

前書きと後書きにでてくる」「さえない者。

ナチヤ「なんで出てきた？」
気分さ

シアン「やっと終わったよ」

トアスク「そうだな」

クレス「こうして、見るとキャラが被ってる人もいますね」

ナチヤ「クレス そういうのは、触れちゃいけないだよ」

クレス「え！？そうだったの」

ライリ「何でもいいわ」

シアン「どうやって締めるの？」

トアスク「誰かが終わりつて言えばいいだろ」

シアン「この小説は今回を、もって終わりまゝす」

ナチヤ「ちょ 終わらせんな」

クレス「今回はこれで終わりです。次回こそ私の過去の話なので期待して待ってて下さいね」

ナチヤ「主人公の俺が締めるんじゃないんだ・・・」

第10回 キャラ紹介（後書き）

キャラの紹介が終わりました。まだまだキャラが増えると思います
がらその時は、またキャラ紹介をやりたいと思います。

ナチャ「誰か助けて〜!!」

サバレ「助けてなんて来ないだろ」

アルミン「来たとしても俺達を倒せるやつなんていないさ」

ナチャはマジでアルミンとサバレに殺されそうである。

ナチャ「俺は死んでるから！霊体だから！」

アルミン& a m p ;サバレ「問答無用！」

二人がナチャに攻撃をしようとした時。

ミョア「あんたたち、何やってるの!!」

アルミン& a m p ;サバレ「あ！ヤバイ」

アルミン「父さん。親バカなんだから俺を守れよ」

サバレ「時には厳しく、時には優しくだ」

アルミン「・・・」

ミョア「二人とも、家で説教ね。早く来なさい!!」

アルミン& a m p ;サバレ「はい」

アルミンとサバレの目が死んでいる。

ナチャ「助かった。あの二人の弱点はミョアか」

シアン「大丈夫だった〜？」

ナチャ「あれ？シアン。何でいるんだ」

シアン「皆いたよ」

ライリ「大変ね。主人公つて」

クレス「危なかったね」

トアスク「あの二人は危険すぎるな」

ナチヤ「いや、いたなら何で助けなかったんだよ」
全員「面白そうだったから」
ナチヤ「……………」

シナオ「俺が最後のセリフだぜ。では さようなら」
ディルク「違うよ。お馬鹿ちゃん」
シナオ「あ！また馬鹿って言いやがったな！」
クリスト「……………また 次回にノシ」

第11話 クレスの過去（前書き）

今回は頑張って恥ずかしい話にしましたが大変ですね。
ではごゆっくり お読みください

第11話 クレスの過去

謎の人物「今日は初めてフルフルを狩りに行くんだ。頑張っていかなきゃ」

謎の人物こと今回の主人公クレスは気合いを入れていた。

クレス「一人だと心配だな。誰か一緒に行ってくれる人いないかな」

クレスの何気ない一言をしつかり聞いていた人物がいた。

謎の人物「お嬢さん。何かお困りですか」

いかにも紳士ですよ、と言っている口調の人が話し掛けてきた。

クレス「えっ！いや今日は初めてフルフルに行くのに不安だから誰かと一緒に行きたいなと」

謎の人物「なら私が一緒に行きましょう」

クレス「え？あっはい。よろしくお願いします」

謎の人物は変な口調だがナチャヤである。

ナチャヤ「何処の竜車ですか？」

クレス「あそこの竜車です」

そういつて、ある竜車を指差した。

ナチャヤは、かつこよく乗ろうとしたが乗る前に石に躓いた。

ドシン（効果音）

クレス「（かつこ悪いな）」

ナチャヤ「（やつちまった）」

そして普通に竜車に乗った。

ナチャヤ「（ヤバイ。何か話さくては）ああ。そうだ。自己紹介が、まだだったね。私はナチャヤだ。よろしく」

クレス「私はクレスって言います。よろしくお願いします」

ナチャヤ「ふむ。呼び方はクレスでいいかな？」

クレス「はい。ナチャさんでいいですか？」

ナチャヤ「いや。気にすることはない。ナチャでいいよ」

カツコイイのか、悪いのかよくわからない。
そして目的地に着くまで、無言のままだった。

雪山【昼】

ナチャ「(ホットドリンクを忘れたけど支給品にあって良かった)」「
もう色々かつこ悪いナチャは、フルフルを余裕で倒し逆転を図ろう
としていた。」

ナチャ「あれがフルフルです」

クレス「あれがフルフルですね。絵と似てますね」

そりゃ絵が真似したからな

ナチャ「クレスは、まずフルフルの動きを見ていてください。私が
見本を見せましょう」

そう言つてナチャはフルフルに近づいて双剣で攻撃をした。

フルフルは、ハンターが近くにいるので体内電気のモーションにな
った。

ナチャ「何をしようと知りませんが、チャンスですね」

ナチャは攻撃を続けた。

そして、フルフルの体内電気を、もろに喰らった。

クレス「大丈夫かな？あの人」

クレスは、ちよつと心配そうに見ている。

ナチャ「くつ、なんだ。あの攻撃。キアラ作ってる場合じゃないな」
ナチャは本音を漏らした。

ちなみにナチャも、フルフルが初めてである。

ナチャ「だが俺は負けない。・・・多分」

フルフルは口から電気を放った。

ナチャ「なんだあれ？」

ナチャは、よく分からず電気を喰らった。

ナチャ「グハツ。痺れて動けない」

フルフルは倒れて動けないナチャに、のしかかりをした。

ナチャ「グボへ」

ナチャは、さすがに体力が不味くなっていた。

クレス「やつぱり心配だな」

素晴らしいクレスは火炎弾を撃った。

フルフルは狙いをクレスに変え電気を口から出した。

クレス「よいしょ」

クレスは普通に避けた。どこかの誰かと違って。

クレス「意外と弱い！」

フルフルはガンナーで行くと特に問題なく倒せる相手だ。

しかし

フルフル「ギャオーオーアアア」

どんな叫び声だ。

フルフルが怒った。

クレスは耳をふさいで動けなくなった。

フルフルは、すぐさまクレスに攻撃をしようとしたが。

ナチャ「やらせるかー！」

気合いで鳴き声を無視し、ようやく麻痺から解放されたナチャが双剣の乱舞をした。

フルフルはナチャの乱舞に怯みクレスに攻撃が出来なかった。

フルフルは、また体内電気をしてナチャを吹っ飛ばそうとした。

ナチャ「何度も同じのが当たると思うなよ」

ナチャは、すでにフルフルから離れていた。

そしてクレスの火炎弾が背中を直撃した。

フルフルは弱いと判断したナチャに電気のしかかりをした。

ナチャ「電気がついた、のしかかりかよ。余裕だぜ」

しかし範囲が広がっていたのに気付かず喰らった。

クレス「あの人は何がやりたいんだろ」

クレスは冷静に弾を撃っていた。

フルフルはクレスの攻撃を無視してナチヤを倒そうとしていた。

ナチヤ「なめんなよ！フルフルが」

ナチヤがキレた。

フルフルは、さっきとは違う感じがしたが気にせず電気のしかかりをした。ナチヤはそれをストレスで避け頭に乱舞をした。フルフルはあまりの痛みに怯んだ。

ナチヤ「まだまだー！」

ナチヤの攻撃は続きフルフルは弱っていった。

クレス「（凄い。さっきとは別人みたい）」

だがフルフルも負けじと咆哮をしようとしたが、ナチヤの双剣が首にある声帯を切り、声が出せなくなっていた。

ナチヤ「終わりだ」

ナチヤは、そう言い最後の乱舞をしようとしたがフルフルが体を回転させて尻尾で攻撃をした。

ナチヤ「ゲハッ」

そして、クレスの弾がフルフルに当たりフルフルは絶命した。

第11話 クレスの過去（後書き）

恥ずかしいというか、かつこ悪いですね。

ナチヤ「いや本人は恥ずかしいだろ」

あと言うの忘れてたが茶番は話が終わったあとにやるから、今話してネタを潰すなよ。

シアン「うん。ネタを潰せばいいんだね。分かった」

ライリ「任せなさい」

分かってないよ。

ネタが無くなるのは、ヤバイので

また 次回に ノシ

第12話 人は成長し変化するんだよ（前書き）

フルフルって見た目あれだよ。言わないけど。

今回でクレスの話が終わります。

では ごゆっくり お読みください

第12話 人は成長し変化するんだよ

帰りの竜車の中

ナチャ「クレス一人でも勝てただろ。フルフルくらい」

クレス「いえ。ナチャがフルフルの動きを見せてくれたから攻撃を喰らわなかったんですよ」

ナチャ「ああ。俺はすっかり喰らったがな」

ナチャはフルフルの攻撃を受けたが骨折など大きな怪我は、していない。

クレス「今日会ったのも何かの縁ですし食事でもしませんか？」

ナチャ「（これは、もしかしたら俺に気があるのかも）」

クレス「?どうしたんですか？」

ナチャ「いや。なんでもない。まあ今日は特に予定がないから食事をしようかな」

クレス「どこで食べます？」

ナチャ「集会所のところでもいいだろ？」

クレス「分かりました。そういえば聞きたかったんですが、最初に会った時の紳士キヤラはなんですか？」

ナチャ「あれは・・・紳士になってみたかったんだよ。（もてそうだったから、なんて言えない）」

クレス「紳士になってみたかったんですか、面白い人ですね」

ナチャ「（これは完全に俺に気があるな。やったぜ俺）」

集会所（食堂）

ナチャ「旨いな」

モンハンで出てくる食材が調理された物が出ている。

クレス「そうですね。特にこのエビなんて・・・」

楽しい会話が続いていた。そしてナチヤは勝負にかけた。

ナチヤ「クレス。君の瞳は、夜の空に浮かぶ無限の星よりも美しい。そして俺はそんなところに惚れた」

クレス「・・・？」

クレスは気づいてないようだがナチヤは続ける。

ナチヤ「そう。これは運命なんだよ。さっ。愛のキスを」

そう言っつてナチヤはクレスに近付く。

だが。　パシン

ナチヤの頬にビンタが贈られた。そしてクレスは、その場から立ち去った。

クレスは愛のキスだけ分かったらしい。

ナチヤ「ふっ。乾杯」

そのあと、ナチヤは一人寂しく食事をした。

シアン「今のナチヤからは想像が出来ないね」

ライリ「酷いわね。これは」

トアスク「さすがに、ダメだろ」

クレス「最初は、こんなんでしたよ」

ナチヤは話の途中から少し離れた所で凹んでいた。

（数分後）

ナチヤ「諦めた。俺は過去を全て受け止める！」

ライリ「じゃあ。告白したいのところにもう一度言っつてみて」

ナチヤ「いや。それは」

シアン「あれ〜。全て受け止めるんじゃないの？」
ナチャ「くっ。分かったよ。言えればいいんだろ。言うよ」

ナチャ「クレス。君の瞳は、夜の空に浮かぶ無限の星よりも美しい。そして俺はそんなところに惚れた。そう。これは運命なんだよ。さっ。愛のキスを」

トアスク「まだ会って1日も経ってないのに、よく言えたな」

ナチャ「あの頃の俺は黒歴史なんだよ！」

シアン「そういえば、この話って失恋の話だよな」

ナチャ「うるさい。失恋とか言うな。今は仲が良いからいいだろ」

シアン「私がうるさい？ナチャもう一回死にたいの？」

ナチャ「すみませんでした。（キャラが変わったら本格的にヤバイ）

「

ライリ「まあ面白いと言うより、ひくわね」

ナチャ「あ〜。俺ボロクソに言われてる」

トアスク「まあ、そんな時期もあるさ。」

ナチャ「トアスクにもあったのか？」

トアスク「いや・・・俺は特に・・・」

ナチャは更に精神的ダメージを受けた。

ナチャ「もういいさ。次は誰が話すんだ？」

シアン「私が話したい！」

トアスク「じゃあシアンにしようか」

シアン「ふふふ。私が初めて二回目を話すんだ〜。やったね」

ナチャ「いいから。早く話してよ」

シアン「ごめんごめん。じゃあ、私が村から出てハンターをしていた時の話をするよ」

第12話 人は成長し変化するんだよ（後書き）

告白の言葉はテキストに考えました。まあ、失恋の話だったら、あの程度恥ずかしいかなと思いやりました。

フェリクス「そういえば、父さんは母さんにどうやって告白したんだ？」

ミヨア「秘密よ」

フェリクス「（何故隠す）」

クレス「えっと。報告します。次回から番外編をやります。いつまで続くかわかりません。決して本編が思いつかなくて番外編をやろうと思ったではありません。以上です」

シアン「なんで私の話が思いつかないのかな」

トアスク「いや、思いつかないとかじゃないって言ってるよ」

ライリ「どうせ嘘よ。じゃあ今回は私が終わらせるわ。別に最後のセリフが言いたいわけじゃ、ないんだからね。では また次回に
ノシ」

第13話 皆の会話（前書き）

番外編です。何故ライリの説教が、いつもより短いのかの理由が分かります。

第3話のセリフ

シアン「あれ？今回は意外と短いね」

では ごゆっくり お読みください

第13話 皆の会話

これはナチヤがクレスに会って暇になっている三人の話です。

シアン「暇ね。何するの？」

トアスク「食事でもするか」

ライリ「・・・」

シアン「・・・そうだね。食事しようか」

三人は食堂らしき所に行った。

そして注文をした。

トアスク「シアン！止める！」

シアン「大丈夫だよ。私は酒に強いんだからね」

トアスク「いや。弱いから。自覚してないだけだから」

しかし、シアンは無視して飲んだ。

シアン「うゝ ヒック」

トアスク「飲んでしまった」

シアン「トアスク！飲め！」

トアスク「シアン様困ります」

シアン「シアン様であゝ。シアン様々だろうが！」

トアスク「すいませんでした。シアン様々」

シアン「やっぱ、気に入らん。シアン様と呼べ」

トアスク「(なんなんだー)」

しかしライリはこんな状況でも落ち込んでいた。

〔数時間後〕

トアスク「やっと、寝てくれたよ」

シアン「zzz」

トアスク「ライリ 話をしてもいいかい？」

ライリ「？」

トアスク「クレスを合わせた5人の中で一番辛いのは誰だと思う？」
ライリ「辛いと思うのは人それぞれ、だから分からないわ」

トアスク「確かにそうかも知れない。でも・・・俺が一番辛いと思うのはシアンだと思う」

ライリ「?・・・なんで？」

トアスク「シアンが五人の中で、ここに一番長く住んでいるのは知っているだろ？」

ライリ「うん。前に聞いたわ」

トアスク「でも、これは知らないと思う。シアンは生きてる時ほとんど一人だったらしい。そして物思いがついた時には両親がいなかったらしい」

ライリ「え?そうだったの？」

トアスク「ああ。この前二人で飲んでた時に、ふと言ったんだ。そして悲しそうな顔をした」

ライリ「・・・」

トアスク「俺が思うにシアンは、この世界で俺やライリ、ナチヤと会って、とても嬉しいと思うんだ。だから大切にしている、この関係を誰よりも。シアンは、この世界で一番長く住んでいる。だから恐らく一番早く生まれ変わる。シアンはそれを望んでないんだよ。生まれ変わっても、また一人になると思っちゃうんだ。いつ消えるかもわからないで、この関係を大切にしている。だから俺はシアンが一番辛い思いをしていると思うんだ。しかもシアンは気を使って表には出さないしね」

ライリ「確かに。今私が思ってることはシアンの辛さに比べたら、ちっぽけかもね・・・」

トアスク「俺は、そんなシアンに気づいた時からシアンのやりたいことは、やらせてきたつもりだ」

ライリ「そう。だから急に優しくなったりしたのね」

トアスク「まあな。ナチヤに説教みたいのするつもりだろ?まあ、やってもいいが辛いのは自分だけじゃないことを頭に入れてくれ」

ライリ「分かったわ。なんか今まで考えてたのが馬鹿みたい。私も飲もうかしら」

トアスク「どんどん飲んでくれ。シアンが無駄に注文したからな」

ライリ「ええ。飲みまくるわよ」

そうして、ライリも飲みまくり、寝てしまった。

シアン「こら〜。トアスク！シアン様だろ〜」

トアスク「寝言か。どんな夢を見てるんだらうな」

トアスクは寝ているシアンの頭を優しく撫でた。

第13話 皆の会話（後書き）

ナチャ「こんなこと話してたのかよ」

シアン「トアスク、勝手に変な妄想しちゃ駄目だよ」

トアスク「いや。後書きでシアンがそれ言っちゃ駄目だろ」

トアスクの妄想は違うのでしょうか？まあ俺も知りませんのでイメ
ージして下さい。

では 次回の予定は、また番外編です。

シアン すまん！

シアン「許さないよ。許してほしいなら私を主人公にしてよ」
それは無理だ。

では また次回に ノシ

第14話 サバレの娘探し（前書き）

番外編 第2話です。タイトル通りサバレがライリを探す時の話です。
ではごゆっくり お読みください

第14話 サバレの娘探し

サバレ
俺は今ギルドナイトとして働いている。

ちよつと前はG級ハンターだった。愛する家族のために全力を尽くしている。

ピルル ピルル（電話の音）

サバレ「こちらギルド。要件を話してくれ」

ミヨア「あ！サバレ？私よ。ミヨア」

サバレ「ん？ミヨアか。何か用か？」

ミヨア「ライリが何処かに行ったのよ！探して」

サバレ「ライリが！任せる絶対に見つける」

サバレは自分の仕事を無視してライリを探しに行った。

サバレ「ライリのことだ。ハンターに関係する所だろう」

サバレはライリが一番行きそうな集会所に行った。

サバレが集会所に入るとハンターの視線が、こっちにきた。

サバレ「ちよつどいいな。誰か小さい子供を見なかつたか？」

サバレは大声で言った。さすがのハンターもギルドナイトには逆らえない。現在の例えるなら警察のようなものだ。

謎の人物「あんた？ギルドナイトだろ？」

不良みたいな人が話しかけてきた。

サバレ「そうだが。何か用か？」

不良「俺は、今日小さい子供を見たぜ。確か女の子だったな」

サバレ「なに！詳しく教える」

不良「落ち着きなよ。教えてやるが条件がある」

サバレ「条件だと？」

不良「そうだ。俺と腕相撲をしる！」

どうやら、この人は見た目不良だが中身は、そうでもないらしい。サバレ「……。分かった。その勝負受けてたとう」

観客「おー！あいつギルドナイトと戦ってるぜ」

不良？「ギルドナイトを倒したら、この集会所で腕相撲の王は完全に俺になる」

サバレ「(まさか。こんなことのために勝負を挑んだのか)」

審判「両者。力を抜いて。よい。ドン！」

不良？が、いきなりサバレを押ししている。

サバレ「中々やるな」

そう言つてサバレは、巻き返し最初の位置に戻した。

不良？「ほう。ならこれはどうかな？」

不良？が更に力を込めた。

サバレ「悪いな。時間が無いんだ」

その瞬間、不良？の体が空中に浮いた。

審判「勝者。ギルドナイト」

観客「おおっー！！！」

不良？「負けたぜ。約束通り教えてやろう」

そして不良？は小さな女の子が火山行きの竜車に乗ったことを教えた。

サバレ「そのの。アイルー」

アイルー「ニヤ？俺のことかニヤ？」

サバレ「そうだ。急いで火山に行つてくれ」

サバレはマタタビを大量にあげた。

アイルー「まかせるニヤ。速攻でいくニヤ」

サバレ「(攻撃をするのか?)」

そうしてサバレは火山に急いだ。

サバレ「っつ！。どうした？」

急に竜車が止まった。

アイルー「目の前にリオレイアがいるニヤ」

サバレ「レイアだと？ちっ、しょうがない。殺るか」

サバレはレイアを見た。

サバレ「あれは？恐らくG級だな。人が急いでるのによ」

サバレは、いきなりレイアに近いた。

レイアは迎え撃つために火球を放った。

サバレ「軌道がバレバレだ」

レイアの火球は避けられサバレがレイアに攻撃をしようとした時。

サバレ「なに！」

レイアは三弾火球の後にサマーソルトをしてきた。

サバレ「G級特有の動きか忘れてた」

サバレはレイアのサマーソルトをギリギリで避けていた。

サバレは着地するレイアの尻尾に攻撃をした。しかし相手はG級。

数回の攻撃では尻尾は切れなかった。

第14話 サバレの娘探し（後書き）

戦闘の途中だけと次回に回します。

全くシアンの話が浮かばない。一人にするのか、それとも100回に一回のグループでいくのか、迷ってます。

ナチャ「そういえばシアンって酒飲んでもキャラ変わるよね」

シアン「そうなの？いつも寝ちゃって分かんない」

トアスク「酷いぞ。本当に」

シアン「何〜！私が酒を飲んだキャラが酷い。絶対ありえないもん」
クレス「じゃあ今飲んで証明すれば、いいんじゃないですか？」

ライリ「あ！それを言っちゃ・・・」

シアン「なるほど。任せて今飲むから」

シアンはどこから出したか知らないが酒を飲み始めた。

トアスク「ヤバいな。どうする？」

ナチャ「頑張れトアスク！行くぞ。クレス」

クレス「え？うん」

ライリ「私を置いていかないでよ」

トアスク「え？皆逃げるのは・・・」

シアン「トアスク！そこで土下座しろ」

トアスク「何でだよ！」

シアン「私の命令が聞けないのか？ああ、分かった。今直ぐ痛み
地獄に送ってやる」

トアスク「すすいませんでしたー」

こうしてトアスクは死んだ。

トアスク「いや。元々死んでるから」

シアン「何やってんだ！早く来い！」

トアスク「ハハハ」
トアスクは笑いながら泣いている。

では また次回もサバレのお話です。 ノシ

第15話 サバレの娘探し2nd(前書き)

これは話した物を別視点で見たやつですね。

番外編というよりサバレ編とかのほうが、いいですね。

ではごゆっくり お読みください

第15話 サバレの娘探し2nd

サバレはレイアに、おされられていた。サバレの娘を早く助けたい、という気持ちでサバレを焦らせた。

サバレ「このまま、だと負けるな・・・」

サバレは、いつもと違いネガティブな考え方だ。

サバレ「なんだ？あの動きは？」

レイアはサマーソルトの動作とは少し違うが二、三步下がった。そして通常の火球とは違う火球？をした。

サバレ「な！広範囲に火が！」

サバレは初めてみる技らしく喰らった。

サバレ「ゲホゲホ！ちっ、なんだ、あの技」

レイアは更に突進をしてきたが、サバレは辛うじて避けた。

サバレ「くっ。腹に痣ができたかもな」

レイアの広範囲の火球を喰らいながら痣だけで、すんだのは、サバレの長年の感で致命的に、なるところを避け防いだからだ。

サバレ「後でミョアに説教されるな。この落とし前どうしてくれるんだ？」

サバレはミョアが自分を大切に思っていることを知っており、ミョアの説教は受けたくないが愛が込もっている。

サバレは家族のことを考えた。

・
・
・

サバレ「そう。俺は、こんな所で死ぬわけには、いかない。お前を倒しライリを助ける！」

レイアは気にせず突進してきた。

サバレ「やるか。あの技を」

サバレはレイアに突っ込んだ。そしてレイアの突進をギリギリで避け、下から上へと剣を振り尻尾を切った。

レイアは尻尾を切られた痛みで苦しんでいる。

サバレ「見せてやろう」

サバレは鬼刃斬りをした。レイアは頭に連続に攻撃が当たり怯んでいる。

そして鬼刃斬りの最後から派生した攻撃。

鬼刃大回転斬りを放った。

レイアはそれが直撃し頭に大きな負傷をした。

サバレ「まだ生きているか！」

だがリオレイアは勝てないと悟ったのか、どこかに飛んで逃げてしまった。

サバレ「追いかけてたいがライリの方が優先だ」

そう言っつてサバレは竜車に乗り火山に行った。

火山【昼】

サバレ「ありがとうな」

アイルー「これが仕事だから礼はいらないニヤ」

サバレ「？そうか。じゃあマタタビを、あげようと思っていたが止めよう」

アイルー「!!!冗談ニヤ。マタタビが欲しいニヤ」

サバレ「本音が出るぞ」

そう言っつてアイルーにマタタビを渡した。

サバレ「さあ。ライリを探るか。もし居なかったら、あの不良みたいのを殴るか」

レウス「ギャオオー」

サバレ「ん？レウスの声か？あ！あんな所にいる。ライリにとって危ないな。殺すか」
そうしてサバレはレウスの所に行った。

くライリ宅く【深夜】

ミョア「？サバレ。お腹の横が汚れてるけど何かあったの？」

サバレ「！！いや、少し転んだだけだ」

サバレは必死に嘘を、つこうとしてるがバレバレである。
そしてミョアに見せると言われ見せた。

ミョア「！？。酷い痣じゃない。なんで言ってくれなかったのよ！」

サバレ「いや」。また説教かなと思ひ・・・」

ミョア「・・・。そんなことだけ？」

サバレ「え！？いや、その・・・」

ミョアが説教だけでは止まらず激怒しそうである。

ミョア「もう。知らない！」

ミョアは、そう言つてサバレを腹にビンタをした。

サバレ「痛い！止める。ミョア」

ライリ「！？。お父さんとお母さん！喧嘩しちゃダメー」

ミョアにライリが泣きながら、くつついてきた。

ミョア「ライリ！？寝たんじゃないの？」

ライリ「トイレ」

サバレ「ハハハ。ライリ 別にお母さんとお父さんは喧嘩してる訳ではないぞ」

ライリ「？」

サバレ「ミョアは恥ずかしがりやで、ツンデレなだK（ry

く
ミョアの右ストレートがヒットした。

ミヨア「さっ。寝ましようね。ライリ」

ライリ「うん！」

ライリは元気よく返事をした。しかし今サバレに質問しても返事は、こないだろう。

返事がない。ただの屍のようだ。

第15話 サバレの娘探し2nd（後書き）

ちなみにサバレが使った鬼刃大回転斬りは本物です。シナオが使ったのは誰かのを自分で作り出した技です。なので通常よりも隙が大きいです。（無駄にモーションを入れている）

トアスク「ライリがツンデレの理由が分かったな」

ナチャ「？そうなの？」

トアスク「ああ。ナチャは鈍感だったな」

ナチャ「それよりサバレが逃がしたレイアどうなったんかな？」

トアスク「さあな。まあ生きてそうだけどな」

ナチャ「ていうか、なんで二人しか居ないの？」

トアスク「分からない」

三人だよ。俺を忘れるな。

トアスク「どうせ。二人だから帰っても大丈夫だろ」

ナチャ「そうだな。お疲れ様で〜す」

そうして一人になった。

では 次回は ナチャの恥ずかしい話をもう一度やります。期待して下さい。

ナチャ「ちょっと待てー！」

トアスク「悪かったよ。テキストに話せばいいんだろ？」
そうそう。

ナチヤ「トアスクのおかげで俺は説教が短く済んだだよな」
トアスク「そうだよ。感謝の気持ちは？」

ナチヤ「では また次回に・・・早くトアスク言つてよ」

トアスク「ん？あ！俺か。ノシ（これが感謝の気持ち・・・）」

第16話 シアンの過去2nd(前書き)

ようやくシアンの話ですね。一人新キャラが出てきます。
ではごゆっくり お読みください

第16話 シアンの過去2nd

私はシアン。お母さんを探しながらハンターをしています。最近私
私が強い噂が流れてよく話かけられます。

シアン「今日は何を狩りに行こうかな？」

謎の人物「ちよいと、そこのお嬢さん」

シアン「ん？私かな？」

シアンは振り返ったが誰もいない。

謎の人物「こつちじゃ！こつち」

シアンは下から声が聞こえていたので下を見た。

シアン「あ！ギルドマスターだったんだね」

シアンはギルドマスターと同じくらいの目線になるよう、しゃがんだ。
だ。

ギルドマスターは竜人であり、人間よりも寿命が遥かに長い。

シアン「どうしたの？」

ギルドマスター「確かシアンといったか？」

シアン「うん。そうだよ」

ギルドマスター「強いと思つての頼みじゃ。古龍クシャルダオラの討伐をしてもらいたい」

シアン「古龍・・・クシャルダオラ・・・」

話は時々聞く。風を操り、そこらへんのモンスターが逃げる位強いらしい。モンスターは基本自分より強すぎなければフィールドにいるが古龍の場合は居ない。

シアン「へへ。面白そうだね。分かった。行くよ」

ギルドマスター「今回は危険だから、もう一人腕利きのよい奴を用意してある」

シアン「誰？」

ギルドマスター「ちょっと、こつちに来てくれ」

そうして、こちらに来た一人のハンターがいた。伸長はシアンより

大きい女のハンターだ。

謎の人物「私の名前はチヨ。普通にチヨと呼んでね」

シアン「私はシアンだよ。シアンって呼んでね」

ギルドマスター「じゃあ頼んだよ」

二人「了解」

そして密林行きの竜車に乗った。

〔竜車の中〕

シアン「そうだ！出逢えたんだから握手しようよ」

チヨ「止めたほうが身のためよ。私の右腕が疼いてるの。貴方を殺したいと」

シアン「へ・・・へへ。そうなんだ」

シアンは面倒な人だと思った。

〔密林〕

シアン「酷い雨ね」

チヨ「これは私の力に神が怯え泣いているのよ」

シアン「・・・。クシャルダオラを探そっか」

シアンは、どんな反応をすれば、いいのが良く分からずにいた。

シアン「そういえば。チヨはクシャルダオラと戦ったことあるの？」

チヨ「私の目は特別でね。相手の動きが先読みできるの。だからクシャルダオラなんて相手にもならないけど今回は特別に戦ってあげてるのよ」

シアン「そうなんだ・・・。（普通に戦ったことが無いって言えばいいのに）」

シアン「？あれは風？」

シアンは初めて風を目で見た。クシャルダオラが出す風は人の目に見える。その謎は、まだ解かれていない。

チヨ「あれがクシャルダオラ。なんて禍々しい妖気……」

シアン「……。先手必勝ね」

シアンは、とりあえず矢を放った。

だがクシャルダオラの周りにある風によって弾かれてしまった。

シアン「！？弾かれた！」

シアンは軽く動揺したが観察していけば突破口は見えると思いきや、クシャルをよく見た。

クシャルは風ブレスをやってきたが、シアン達は火球と同じように避けた。

チヨ「喰らいなさい。これが私の魔の力よ」

そう言っただけで片手剣で普通に攻撃をした。

しかしクシャルの風で後ろに倒れた。

シアン「弓も効かないし、近付くと風で転ぶのか」

シアンは倒せるか心配になってきた。

シアン「？ 攻撃をする前は風が無いような気がする」

その時クシャルは上空に飛んだ。

シアン「飛んだ！地上だけじゃないの！？」

クシャルは、そこから風ブレスをしてきた。

シアンは軽く動揺しており風ブレスを避けられずに喰らった。

シアン「痛い……。本気だしちゃうよ？」

チヨ「本気？私に勝てるかしら」

なんか知らないがシアンとチヨはクシャルを倒した方が勝ちの勝負をし始めた。

クシャルは地上に降り、シアンに突進をしてきた。

シアン「攻撃中も風はないようね。だったら、そこらへんの雑魚と

「一緒」

シアンは通常ではあり得ないが転びながら回避する回避中に矢を撃った。

クシャルに初めてのダメージを与えた。

チヨ「あの子は魔神の力を授かっているというの！」

チヨがまた意味が分からないことを言っている。

クシャルはシアンの方を向いた。シアンは弓を溜めているようだったのでチャンスだと思い風ブレスをした。

シアン「貴方のブレスが強いのかな？普通に私のほうが強いよ」

シアンは貫通矢を放った。

風ブレスと貫通矢は衝突したが風ブレスは、ただの風になり貫通矢はクシャルのもとに飛んだ。

チヨ「化け物ね。でも私も魔神から力を授かっている」

そう言っつてクシャルの後ろ足を斬った。

クシャルは怒ったらしく咆哮をした。

第16話 シアンの過去2nd（後書き）

ナチャ「このクシャルは可哀想だな」

トアスク「全くだ」

クレス「でもクシャルダオラが勝つかも知れません！」

ナチャ「それは無いだろ。シアン強いし」

ライリ「まあ相手は古龍よ。良いところまで、いきそうじゃない？」

トアスク「まあ。クシャルは死ぬことが確定だな」

ちよつと。そこネタバレすんなよ。シアンが負けるかもしれないだろ！

ナチャ「シアンはハンター生活d（ry）」

言わせるかボケ！

これ以上ネタバレはさせない！

シアン「今回は私が言うよ。では また次回に」 ノシ」

第17話 一度でいいからハーレムを体験したい(前書き)

やらないか？

では ごゆっくりお読みください

第17話 一度でいいからハーレムを体験したい

チヨ「きゃー！さっきとは、まるでスピードが違うじゃない」

クシャルは怒ってから動作スピードが上がっていた。

シアン「攻撃しにくい！」

シアンはイライラしていた。クシャルは飛んで風ブレスをした。

シアン「あー！そうだ。あれやろう」

シアンは風ブレスをしているクシャルに近付いた。

チヨ「ガンナーなのに近付いている。血迷ったかしら」

シアンはクシャルが風ブレスをしている最中に。

シアン「あんまり、やらないけど雑魚ならいいや」

シアンは矢を手に持ち、小さなクシャルの尻尾に矢を刺した。

クシャルも尻尾に矢を刺され空中から落ちた。

シアン「意外と肉質やらかいな。じゃあ次ね」

クシャルはシアンを狙おうとしてシアンの方に向いた。そしてクシャルダオラは最悪の状況を見た。シアンが15本位の矢を一気に引いていた。

シアン「古龍だったら耐えてくれるよね？」

クシャルはシアンの矢を避けることはできず、喰らった。だがクシャルダオラも雑魚とは違い、目に当たらないように少し頭をずらした。そのせいで角が変わりに折れた。

チヨ「？風が無くなった。これがコスモパワーなのね」

クシャルは、さっきの攻撃により更に怒った。

チヨ「風が無いなら、いくら怒っても関係ないわ」

風が無くなってチヨの力が発揮された。ふざけた性格だが腕は良い。更にスピードが上がったクシャルの攻撃を上手く避け攻撃をしていた。シアン「別に弱くないな。少し見直した」

シアンは翼を中心に狙っていた。

チヨ「これでも喰らいなさい。アルティメットダイ！」

片手剣で尻尾を切る時に言うチヨ特有の掛け声だ。

クシャルは尻尾を切られ苦しんでいる。

シアン「今度こそ、お目目貰うよ」

シアンの矢がクシャルの目に正確に当たった。

クシャルダオラは苦しみの声をあげた。

その時シアンとチヨの足の下が光った。

シアン「避けて！チヨ」

チヨ「え？うん」

チヨが避けた直ぐ後に雷が落ちた。

チヨ「神の裁きかしら？」

シアン「クシャルダオラが死んでる」

チヨ「え？嘘でしょ」

クシャルダオラは、さっきの雷に、やられたらしく色々な所が焦げている。

シアン「なんだったんだろ？」

チヨ「さあ。私達には分からないわよ。神の気まぐれだからね」

シアン「・・・もうなんでもいいや」

空が晴れてきた。クシャルダオラが死んだことによって空が晴れたのだろうか？二人は見てなかったが白い竜が空を飛んでいた。

シアン「終わったよ」

トアスク「疑問があるんだが質問いいか？」

シアン「いいよ」

トアスク「なんで足の下が光った時に避けたんだ？」

シアン「女の勘よ」

クレス「凄いですね。シアンさんの勘は」

シアン「女の勤ならクレスもライリも持つてるよ」

ライリ「私にも？無さそうよ？」

シアン「勤なんて、テキトーに言っただたればいいの。当たらないの。当たらないの。その時はその時よ」

クレス「ようするに。テキトーですか？」

シアン「うん！」

トアスク「だが、そのテキトーで命が救われたんだな」

ナチャ「よし。次は誰が話すんだ？」

シアン「私話したい」

ナチャ「さっき話したろうが」

シアン「ちえ〜。ナチャの馬鹿」

ナチャ「馬鹿じゃないから！いつまで俺は馬鹿ネタを引きずられるんだよ」

ライリ「私が話すわ」

ナチャ「いきなり。話が変わったな」

ライリ「これは私の家族から聞いた話だけだね。私が赤ちゃんの頃の話よ」

第17話 一度でいいからハーレムを体験したい（後書き）

ナチャ「チヨが初めての二文字だな」

チヨ「それは神が私を選んだからよ」

ナチャ「そつそうなんだ。（なんだこの性格は・・・）」

チヨ「ちなみにシアンより大きい女の人って書いたけどシアンは身長かなり小さいわよ。そこらへん間違えないでね」

シナオ「最近俺が出てないぜ」

デイルク「もう馬鹿は必要ないんだろ？」

シナオ「いや。この小説は俺がいないと駄目だ！」

デイルク「いや、なんでそうなるって・・・誰か来たぞ」

チヨ「貴方聞き捨てならないわね！私は神に選ばれた人間。私がいないと駄目なのよ」

シナオ「んだとく。意味分かんないこと言いやがって。それなら俺と勝負だ」

チヨ「いいわよ。何の勝負かしら？」

シナオ「フッフ。今回は番外編で俺とチヨの勝負をするぜ！
は？なに言ってるんだ。」

チヨ「だから、どんな勝負なのよ！」

シナオ「秘密だ。じゃ また次回」

ふむ。今回は番外編らしい。いや、またネタが思い付かないわけじゃないよ。ということまでライリの話は後です。すいませんね。では

シナオが言いましたが また 次回に ノシ

第18話 番外編 シナオVSチヨ（前書き）

今回の番外編は本文が前書きと後書きの世界になります。
ようするに、なんでもあり。

チヨは中二病なキャラにしたいんですが難しいです。あんまり技名とか思い付かないんですね。誰かネタをくれると嬉しいですね。

チヨ「それは私の出番が増えるのかしら？」

ナチャ「まあネタがあるならチヨ編みたいので出ると思うよ。シアンの過去の話ではもう出てこなそうだし」

シナオ「俺にもなんかネタをくれ」

デイルク「馬鹿はネタという意味が分かってないだろ？」

シナオ「は？分かるしな！あれだる寿司の上にあるやつだろ」

デイルク「……。予想通りの返答で逆に反応しづらいな」

では ごゆっくりお読みください

第18話 番外編 シナオVSチヨ

シナオ「前書きに説明は軽くしてあるよな」

チヨ「さあ。勝負の内容を教えてちょうだい」

シナオ「勝負……。それは……。叩いて（株）ってじゃんけんポイだ！」

ナチャ「クレス。説明よろしく」

クレス「私ですか？これを読めばいいんですよね？」

ナチャ「そうだよ。噛まずに読んでくれ」

クレス「うん。分かった。叩いて（株）ってじゃんけんポイはパソコンを前にしてじゃんけんをします。勝つたらどこかの株式を买买す（10万円分）。負けた人は買った人がある条件を満たすまで叩き続けます。ある条件とは買った株式が二倍の額（10万なら20万）になるまで頑張るです。そして条件をクリアしたら負けた人が二倍にした額から始めます」

チヨ「なるほど。どんどん額が高くなるわけね」

クレス「そして叩かれている人が痛いと言ったら負けです。あと株式は何種類買ってもいいです」

シナオ「よく分からないが楽しそうだな」

デイルク「（馬鹿には出来ないゲームだな）」

チヨ「さあ。じゃんけんよ！じゃ〜んけ〜ん」

チヨ& amp ;シナオ「ポン！」

シナオ「よっしゃ。勝ったぜ！」

シアン「さあ実況は私、シアンでお送りします。解説はデイルクさんお願いしま〜す」

デイルク「え！？俺かよ。解説って何すれば……」

シナオ「パソコンは、どうやって点けるんだ？」

チヨ「私の技を受けなさい。ホーリーブレイク！」

チヨはシナオにビンタをした。

シナオ「痛っ！なにすんだよ！」

デイルク「一回戦目はチヨの勝ちだな」

シアン「この勝負一回戦とがあるんだ。めんどくさいな」

トアスク「さあ二回戦目です」

デイルク「？なんでトアスクが実況やっているんだ？」

トアスク「シアンが飽きたらしくて交代させられた」

デイルク「トアスクもお疲れ様だな」

ナチャ「二回戦目の説明もよろしくな。クレス」

クレス「二回戦目は50メートル走です。早くゴールについた人が勝ちです」

シナオ「余裕だぜ」

チヨ「魔神の力を授かった私に勝てるかしら？」

ナチャ「え。では位置について。よい。ドン」

シナオ「ウオラララ」

トアスク「シナオ選手がいきなり前に出ました」

デイルク「赤組早い。白組頑張れ。みたいのじゃ無いのか・・・」

トアスク「どこの運動会だ。さあチヨ選手。まだスタート地点から動いていませんが、どうしたのでしょうか？」

デイルク「恐らく。宇宙からの力を貰うのに時間がかかっているのです」

トアスク「なんで分かるんだ？」

ディルク「解説だからさ。まあテキストに言ってるだけだから」
チヨ「（解説の人は分かっているようなね）そう。これこそがコスモ
パワー！」
トアスク「シナオ選手今ゴールしました」
ディルク「本当に余裕ですね。ていうか、この演技はいつまで、や
るんでしょうか？」
トアスク「これが終わるまでだと思います」

そしてこの後も、くだらない競技が続き、最終種目になった。

トアスク「ようやくこの無駄な戦いが終わりますね」

ディルク「ここまでの結果は引き分けですね。この勝負に勝ったら、
この大会？の勝者になります。」

シナオ「最後に笑うのは俺だぜ」

チヨ「そろそろ神に選ばれた人間の本気を見せてあげるわ」

ナチャ「いつも通りよろしく」

クレス「最後の勝負は真面目に闘ってもらいます。各自、自分の得
意な武器を選んで下さい」

シナオ「俺は太刀だな」

チヨ「私は片手剣よ」

ちなみに、これはダンボールで作ってあります。

クレス「あと、これを着けて下さい」

頭と両腕と両足に紙風船を着けた。

クレス「今着けてもらった紙風船を時間中に多く割った人の勝ちで
す」

シナオ「これは俺が勝ったな」

チヨ「凡人なんかに戦闘で負ける訳が無いわ」

トアスク「最後によく真面目なのがきましたね」

ディルク「何故作者が今回やったか分かりますか？」

トアスク「さあ？理由はなんですか？」

ディルク「それは・・・対人戦を書きたかったからです！」

その時、トアスクに電流が、はしった。

トアスク「対人戦・・・何が凄いな。あと電流がはしったって、どんな表現だ」

ディルク「まあ。気にするなトアスク。一々突っ込んでたら限りがないぞ」

トアスク「おっと。会話してたら試合の準備が出来たようですね」

シナオ「一瞬で終わらせてやるぜ」

チヨ「できるならやってみなさい」

ナチヤ「じゃあ。試合・・・開始！！！」

第18話 番外編 シナオVSチヨ（後書き）

決着は次回です。

どちらが勝つのか？

本文を読んでいて気づいた人もいるかもしれませんが……。

あと小説書いてる時にナチャとシナオをよく間違えます。馬鹿キヤラ同士だからでしょうか？

ナチャ「まだ俺は馬鹿なのか……」

クレス「ナチャ！勉強すればいいんだよ」

ナチャ「そんな問題じゃない気がするから、いいよ」

ライリ「ちよつと私の出番はどうしたのよ！」

フェリクス「まあ。重要キヤラも時々重要じゃ無くなるんだよ」

アルミン「俺の中でライリは常に重要……いや主人公だ！」

トアスク「またライリ大好き野郎達が暴走しそうだからクリストよろしく」

クリスト「……では また次回に ノシ」

ナチャ「クリスト二回目じゃん。俺より言ってる……」

第19話 対人戦を書きたかったのは本当です(前書き)

ディルクとトアスクの演技が一回できてない所があります。ダメです
ね。

ではごゆっくり お読みください

第19話 対人戦を書きたかったのは本当です

トアスク「両者にらみ合ってますね」

デイルク「二人とも様子を見ているのでしょうか」

シナオ「よし。先手必勝！」

チヨ「そんな大振りで当たると思っているの？」

チヨはシナオが縦斬りをやってきたが横に回転して避けた。

チヨ「喰らいなさい」

チヨは攻撃をして少しの間身動き出来ないシナオの足の紙風船を狙った。

シナオ「足は、くれてやるが道連れだぜ」

シナオは太刀を横に振った。チヨ「!!!」

チヨは予想が違ったため避けられなかった。

パン。パン。

トアスク「両者1つずつ割れました」

デイルク「シナオ選手の予想外の攻撃にチヨ選手は頭の紙風船を割られました。普通だったら体を無理やり曲げて避けたりしますね」

トアスク「チヨ選手は一旦距離を、おきました」

チヨ「避けずに攻撃とは。中々面白いことやってくるわね。まさか貴方も神に選ばれたの？」

シナオ「よく分からないこと言っていると、もうひとつ貰うぜ！」

シナオはチヨに太刀を投げてきた。

チヨ「太刀を投げた！」

トアスク「太刀を投げるとは……。自殺行為ですね」

デイルク「いや。これは良い判断です。紙風船を割るだけなら鞘でも出来ます。さらに意表もつける。上手くいけば相手の紙風船だけを割ることが出来ます」

トアスク「なるほど。そういう意味が、あったんですね」

チヨ「なめてもらっちゃあ困るよ」

チヨは一度片手剣をしまい、投げってきた太刀を右手で取った。

トアスク「チヨ選手取りました。凄いですね」

シナオ「よっしゃあ。がら空きだぜ」

シナオはチヨの左腕の紙風船を狙った。

チヨ「危険だけどやるしかないわ」

チヨはシナオの鞘を足で蹴り弾いた。

シナオ「なに！」

デイルク「チヨ選手は強いですね。こんな状況もしつかりと判断して行動しています」

トアスク「でもシナオは戦闘に関しては馬鹿ではないんだよね」

デイルク「確かにな。なんで、だろうな？」

シナオ「片手剣は貰った！」

チヨ「は！？」

シナオはチヨの腰に掛かっている片手剣を奪った。

チヨ「私の武器が・・・」

トアスク「シナオ選手は武器交換が目的だったんでしょか？」

デイルク「はい。多分そうです。太刀よりも片手剣のほうが隙が小さいですからね」

シナオ「じゃあ本番といこうか！」

チヨ「あんまり太刀を使ったことないけど、やるしかないわね。悪魔の力を見せてあげるわ！」

トアスク「両者ダツシュで近いていますますが回避が難しくなるのでは？」

デイルク「そうですね。確かに回避が難しくなりますが攻撃の力が上がります」

トアスク「今上がっても意味ないような気がするんですが？」

デイルク「攻撃の力が上がったら回避しか出来なくなります。（ガードが出来なくなる）」

トアスク「なるほど。諸刃の剣ですね」

チヨ「避けられるかしら？」

チヨは太刀で突いてきた。

シナオ「余裕だぜ！」

シナオは横に回避をして避けた。

シナオ「今度は俺の番だな。喰らえ！」

シナオは腕の紙風船を狙ったが。

シナオ「！！武器が無い！」

チヨ「私も面白いことしなきゃでしょ？」

チヨは突いたと思われた太刀を上投げて、シナオの転がった方向の腕に盾を準備していた。

チヨ「片手剣ならガードすることは簡単よ！」

盾でシナオの攻撃を弾き、隙を作った。

チヨ「神の裁きを受けなさい。ゴットジャツチメント！」

チヨは上に投げた太刀を取りシナオの頭の上の紙風船を割った。
パン。

トアスク「上手いですね。でも技名があれですが・・・」

ディルク「両者とも本当に面白い闘い方をします」

シナオ「やべ。喰らっちゃった」

シナオは体勢を整えるため距離をとった。

チヨ「休む暇があるわけないでしょ」

チヨが攻撃をしてシナオを追い詰めていった。

トアスク「シナオ選手避けることしか出来ません」

ディルク「このままだと制限時間でチヨ選手が勝ちますね」

シナオ「あんまり、やりたくないけど。勝つためにやる」

シナオはチヨに足払いをした。

チヨ「な！卑怯よ」

チヨは空中に浮いた。

シナオ「足払い無しルールは無いぜ」

シナオは攻撃をした。

チヨ「甘いわよ」

チヨは空中であまりバランスがとれてないがシナオの片手剣を太刀

で弾いた。

シナオ「またかよ！・・・でもいけるぜ！」

チヨ「？」

シナオ「あんたが弾いた鞘は今どこにあると思う？」

チヨ「まさか！」

シナオは近くに落ちてた鞘を手に取り、チヨの腕の紙風船を攻撃した。チヨは、さっきの攻撃でバランスを崩し避けなかった。この間0.5秒である。

パン

トアスク「人では無い動きをしました。これで両者の割れた数は、また同じになりました」

ナチャ「はい。タイムアップです。今回は両者とも引き分けです」
二人「えー！」

クレス「ルールによると引き分けの場合今回の話は無しになります」
デイルク「それってやる意味無かっただろ・・・」

トアスク「いや。少しあるよ。見てみな」

シナオ「お前気に入った！」

チヨ「凡人でも多少は楽しめるわね」

デイルク「なんで、あいつらの友好度が上がってんだよ」

第19話 対人戦を書きたかったのは本当です(後書き)

ライリ「次こそ私の過去の話ね」

ナチャ「作者はライリのツンデレが足りないと思ってるらしいよ
シアン」でも書き方も、よく分からないらしいね」

トアスク「作者ダメだな」

クレス「トアスクさんは前書きの仕返しですか？」

トアスク「まあそんなところさ」

ライリ「ツンデレね。任せなさい！」

ナチャ「……。まあいいや。では また次回 ノシ」

第20話 ライリの過去2nd（前書き）

ライリの過去の話です。ライリの話は、いつもライリが小さい時の話ですね。何かあるのでしょうか？

では ごゆるり お読みください

第20話 ライリの過去2nd

ミョア「ねえ。サバレ、今週の休日キャンプ行かない？」

サバレ「まあ仕事は無いしいいが、ライリは大丈夫なのか？」

ミョア「私が見てるから平気よ」

サバレ「そうか。キャンプは、どこに行くんだ？」

ミョア「伝説の魚がいると噂される、あの湖の近くよ」

サバレ「あそこの近くか。よし。明日アルミンとフェリクスに言うてあげるか。きつと喜ぶぞ」

サバレはかなり楽しそうだ。

ミョア「あなたが一番楽しそうでどうするのよ。ちゃんと子供達を見ていてよね」

サバレ「了解。よし今日は早く寝ようかな」

ミョア「あら、そう。夜食にお刺身あるけど、いらない？」

サバレ「なに！じゃあ食べたら寝る」

ミョアは笑い、刺身を出す用意をした。

（明日）

フェリクス「やった！キャンプ行くの！？」

サバレ「そうだぞ。肉を食ったり釣りしたり色々する予定だ」

アルミン「どこ行くの父さん！」

サバレ「秘密だ。楽しみに待ってな」

フェリクス「え。ずるいよ」

サバレ「そんなこと言つと連れて行かないよ」

サバレは意地悪そうに言った。

アルミン「あ！フェリクスもう何も喋るな」

フェリクス「分かった。もう喋らないよ」
二人とも黙りこんでしまった様子を見てサバレは、とても嬉しそう
だ。

（休日）

ミョア「ライリ〜こっちよ」

ミョアはライリを頑張って歩かせている。ライリは一歳半の幼児？
である。

そしてライリはミョアが座っている上にダイブした。

ミョア「よし。合格よライリ」

ミョアはライリを撫でて褒めている。

ライリ「ママ、ママ」

ライリはまだ上手く喋れないようだ。

サバレ達は湖にいた。

サバレ「ハハハ。まだまだだな」

サバレ達は釣りをしているがサバレが大量に釣って子供達はあまり
釣れていない。

アルミン「くそ〜。父さんにどうにかして勝ちたいな」

フェリクス「アルミン兄さん良い方法があるよ」

アルミン「ん？なんだ？」

アルミンとフェリクスは、ひそひそ話をし始めた。

アルミン「なるほど！それでやってみよう」

アルミンは、いつもとは違うエサで釣り始めた。

サバレ「（さっきのエサが大きく見えたが気のせいかな）」

〈数分後〉

アルミン「きた！」

アルミンの竿が引いた。

サバレ「！？随分と大物だな」

サバレとフェリクスはアルミンの手伝いをした。

フェリクス「いくらなんでも大きくない？」

サバレ「確かに。そういえばエサは何を使ったんだ？」

アルミン「カエル」

その言葉を聞いた瞬間。

大物の魚「ギャオッスー」

サバレ「……。やってしまった」

サバレ達が釣ったのは魚ではなくガノトトスだった。

第20話 ライリの過去2nd（後書き）

ナチャ「まさかのガノトトスだな」

トアスク「でもなんで湖に居たんだろうな」

ライリ「それは次回を見れば分かるわよ」

ナチャ「え〜。もったいぶるなよ」

ライリ「うっ、うるさい！そんなに教えて欲しそうな顔しても教えてあげないから！」

ナチャ「駄目だった」

トアスク「ドンマイ。まあ次回まで待とうよ」

ナチャ「そうだな」

シアン「そういえば詳しい年齢設定が出たのって今回で二回目だよね」

クレス「シアンさんの話で一回ありましたね」

ナチャ「あつたけか？」

シアン「私が五歳の時に言ったセリフがあるよ」

クレス「ぜひ探してみてください」

ナチャ「えつと・・・宣伝？」

トアスク「さあな。しかし作者は細かい設定を読者に任せてるため次のような書き方が出来ないんだよね」

謎の人物の綺麗な金色の髪が風に靡いている。

謎の人物の青い目がこちらを睨んでいる。

ナチャ「変な例だな」

トアスク「まあ、そこは気にするな。このせいで色々困ったりしたらしい」

シアン「でも、作者は自分がイメージする人物と読者の人物が違う外見になって書き方がおかしくなるかも知れないから、実際は私達の外見を全くイメージしてないんだよね」

クレス「そうだったんですか。知りませんでした」

ライリ「意外と作者も苦労しているようね。でもキャラの設定を最初に考えなかったことが、いけなかっただけよね」

ナチャ「作者が俺みたいにポコポコにされてる・・・」

トアスク「今回は本文が短めだったので後書きで頑張りました。b

y y u g a t a」

シアン「作者はy u g a t aというハンドルネームだったね。忘れてた」

クレス「y u g a t aという名前になった理由は他の小説に短編小説としてありますのでよろしかったら見て下さい」

ナチャ「今度こそ宣伝だな」

まあ宣伝したい年頃なんです。

次回でライリの話が終わると思います。

ミヨア「今回は私よ。では また次回に ノシ」

第21話 ガノトトス初参戦！（前書き）

さあさあさあ。

やってまいりました。

この時間が！

では ごゆるり お読みください

第21話 ガノトトス初参戦！

ガノトトスが釣れた。

どうする？

攻撃

道具

特技

逃げる

サバレ「迷わず逃げるだな」

サバレはフェリクスとアルミンを抱えて逃げた。

ガノトトスは攻撃をせずに湖に帰った。

サバレ「よし。逃げきれたな」

フェリクス「なんで。父さん戦わなかったの？」

サバレ「お前らを安全な所にやるのが一番だ。それに今は武器を持つていない」

武器を使うとしても釣竿くらいしかない。

サバレ「しかしガノトトスが攻撃をしてくると思ったんだが、してこなかったな」

アルミン「きつと父さんがめっちゃ強いつて分かったんだよ」

サバレ「それだといいんだがな……。 (何か気になるな) 」

ミヨア「さっき大きな音が聞こえたけど何かあったの？」

ミヨアが駆けつけてきた

フェリクス「母さんだ！」

アルミン「ライリだ！」

サバレ「いや実はな」

サバレはさつき起こったことを話した。

（その間）

アルミン「ライリ。お兄ちゃんだぞ。分かるか？」

ライリ「アイチアン」

フェリクス「アイちゃん？」

アルミン「お兄ちゃんだぞ。ライリ」

アルミンは、まるでどこかの親バカのように教えている。

ミョア「そんなことがあったの。みんな大丈夫？」

サバレ「ああ。みんな怪我は無い。だが釣った魚たちは逃げたかもな。ガノトトスを釣った時ケースが倒れたから」

ミョア「魚は、どうでもいいわよ。危ないからもう湖に近づくのは止めようね」

フェリクス「え〜。もう一回ガノトトス釣りたい！」

ミョア「危ないから駄目よ。ライリと遊んでれば、いいでしょ」

フェリクス「俺はアルミン兄さんと違ってライリを過度に愛してないよ」

ミョア「あら過度なんてどこで覚えたのかしら？フェリクスは偉い子ね」

ミョアはフェリクスを撫でた。

フェリクスは少し恥ずかしいそうだが嬉しそうだった。

サバレ「釣竿とかは・・・まあいいか。さあライリと遊ぼう」

この後、アルミンとサバレのライリ奪い合いが始まったのは言うまでもない。

「その日の夜」

謎の人物「おゝい。ガノトトス」

湖からガノトトスが静かに上がってきた。

謎の人物「はい。今日のエサのカエルだぞ」

謎の人物はカエルをあげた。もちろん草食竜の肉といっしょに。

サバレ「やはりか」

謎の人物「!!!誰？」

サバレは隠れていた草むらから出た。

サバレ「俺はサバレだ。安心しろ。そのガノトトスを討伐しに来た

わけではない」

謎の人物「じゃあ何をしに来たの？」

サバレ「確認をしにきたただだ。お前の名前はなんだ？」

謎の人物「・・・。僕はアマデオだ」

サバレ「アマデオか。アマデオがガノトトスを育てたのか？」

アマデオ「そうだよ。説明するために、ちょっと昔ばなしをするけ

どいいかな？」

サバレ「ああ。してくれ」

ライリ「とりあえず休憩ね」

ナチャ「過去の話で、さらに過去の話をするとは・・・」

トアスク「ちよつと、ややこしいな」

シアン「なんで休憩するの？ライリ」

ライリ「いや喉が渴いてね」

クレス「そういえば私も喉が渴きました」

ナチャ「そろそろ休憩するか」

シアン「うゝん。まだ話は途中だけど休憩にしようか」

トアスク「あそこの建物でいいだろ？」
ナチヤ「よし。じゃあ行こうか」

〈移動〉

ナチヤ「みんな何を飲む？」
シアン「私はオレンジジュース」
クレス「お茶をお願いします。」
ライリ「サイダーにしようかしら」
トアスク「俺はビールな」
ナチヤ「了解だぜ」

〈数分後〉

ライリ「じゃあ話の続きね」

アマデオ「これは僕が5歳くらいの時の話です」

第21話 ガノトトス初参戦！（後書き）

ナチャ「そういえば題名が矛盾してないか？」

トアスク「確かにな。参戦と書いてあるが戦ってないな
気にするなよ。参戦って字的にカッコいいだろ？」

ナチャ「分かんない。どうゆうことだ？」

うわ。これだから馬鹿は・・・

トアスク「ナチャ。気にするな」

ナチャ「分かつてるさ。作者はyugataなんだから、こうすれ
ば？」

yugata「ここに言葉を入れる」

一人だけ浮いてるから、やだ。

ナチャ「別にいいだろ」

そういえば後書きと前書きの「」が無いのは作者が喋っているとい
メージしてください。本文のはカッコいい声の人が言っているとイメ
ージしてください。

トアスク「今気付いたけど、また三人だね」

ナチャ「他の奴は何をしてるんだろうな」

たしか皆で集まってカラオケ大会してるよ。

ナチャ「・・・はぶかれた？」

トアスク「そうらしいな」

グダグダだから終了にするか？

ナチャ「そうだな。では」

トアスク「また次回に」

ノシ

第22話 ライリの過去なのに別の人の過去の話（前書き）

ライリの過去ですが完全にサバレの話になってます。気にしたら負けです。

ではごゆるり お読みください

第22話 ライリの過去なのに別の人の過去の話

アマデオ「父さん。これは何？」

アマデオの父親はハンターである。そして研究者でもある人だ。

父「これはガノトトスだ。生まれたばかりだぞ」

アマデオ「かわいいね」

父「こいつが大きくなると人間と戦うんだ」

アマデオ「うん。さすがにそれは知ってるよ。ねえこのガノトトス貰っていい？」

父「駄目に決まってるだろ。モンスターは危険な生き物だ。それが子供だとしてもな」

アマデオ「・・・。そうだよね。分かった」

アマデオは、どうにかしてモンスターと人間が共生できないかと考えていた。そこでこのガノトトスを子供の頃から育ててみたかった。

（深夜）

アマデオ「父さんには悪いけど・・・」

アマデオはガノトトスを研究室から盗みだした。

アマデオ「大きくなるから大きい湖みたいのが無いかな？」

そしてアマデオは手頃の場所を思い出した。

アマデオ「あそこなら、人もそんなに来ないし大きい湖だから、あそこにしよう」

そうして、今いる湖にガノトトスを放した。

サバレ「なるほど。だから、このガノトトスは人を攻撃しないで湖

に帰ったのか」

アマデオ「そう。ガノトトスは僕が育てたから人間を襲う物では無いと思っっている。こいつのおかげでモンスターも理解すれば人間を攻撃しないことが分かったんだ」

サバレ「だが、それを理解出来る人間が多いとは思わない」

アマデオ「うん。僕もそう思う。人間は頭が良い動物だけど良すぎで逆に馬鹿になっている。感情が強くなりすぎて自分が制御できなくなったり、意味も無く人間を殺す人だっている。もちろんモンスターもね。でも僕にはこれをどうするかも分からないし、どうもできない。ただ・・・」

サバレ「ただ？」

アマデオ「ただ僕みたいながいることを世界に残したい。モンスターを討伐するのが当たり前になってるままだと嫌だから」

サバレ「そうか。俺はこれ以上何もしない。ガノトトスは死ぬまで育てるのか？まあ処理は、しっかりやれよ」

アマデオ「・・・。はい」

そして一週間後の新聞の記事。

【湖にガノトトスの死体】

ライリ「はい。終了よ」

ナチャ「モンスターとの共生か。出来ないだろうな」

トアスク「まあ俺達ハンターはモンスターを狩ることが仕事だから止められないよな」

シアン「でも、やってみたいと思わない？モンスターとの共生」

クレス「モンスターと戦わないならナチャみたいに死ぬ人が減っていいと思います」

ナチヤ「・・・。死んで悪かったな」

シアン「次は誰が話す？」

ナチヤ「そろそろ俺だろ」

シアン「じゃあやれば？」

ナチヤ「あっ・・・ああ。（なんか普通だな）」

ナチヤ「ライリの話聞いて似たような奴を思い出した。これはクレスに会う前の話で、まだ初心者頃だ。」

第22話 ライリの過去なのに別の人の過去の話（後書き）

モンスターと共生……。ある意味出来てるかもしれないね。「共に生きる」と書いて共生。モンスターと人間は殺しあっているがバランスはとれている？から共生していると言えるのでは無いでしょうか？。

ナチャ「もう、その話はいいよ」
ですよね〜

ナチャ「次は俺の話だな。ライリの話で似たよう奴がいたって言ったが秘密だ」

うん。この前みたいにネタバレしたら主人公から降格させてシアンを主人公にしようと思ってた。

ナチャ「……。怖いな。そして今回は二人だけか？」

他のはキャンプ行ったよ。さすが主人公、仕事熱心だね。

ナチャ「そうだな。俺は仕事熱心なんだよな。別に嫌われてないよな」

実は皆、今休憩中なんで控え室にいます。ナチャが休憩中なのに休憩してないだけです。

ナチャ「なん……。だと……」

では また次回に ノシ

第23話 ナチャの過去2nd（前書き）

主人公の過去の話です。まあ、この小説は話ごとに主人公みたいのが変わってるのでナチャが主人公なのか微妙なところですね。

ナチャ「だから普通に俺が特別な力を持って強大な悪に立ち向かう小説にすればいいのによ」

シアン「でもナチャ弱そう」

ナチャ「いや。主人公だから補正が掛かって強いはずだ」

クレス「特別な力って何ですか？」

トアスク「難しい質問だな。まあナチャがモンスターと喋れるとかそんな感じ」

ライリ「ナチャがモンスターと話せても戦闘には意味が無いわね」

ナチャ「もつと良い例があるだろトアスク。例えば俺の武器が特別で俺しか使えなくてモンスターの技をコピー出来るとかさ」

ライリ「ナチャ。どんだけ妄想を膨らませてるの？」

ナチャ「いいじゃん。主人公なのにカッコいい所が無い俺の身にもなってみろ」

ライリ「（ヒロインなのに特に主人公と何も無い私の身にもなってる欲しいわね。いや別にナチャとその・・・そんな関係になりたいわけじゃないけど・・・）」

ナチャ「？ライリ。顔が赤いぞ。熱でもあるのか？」

ライリ「っ！なんでもない！気にしないで」

ナチャ「そうか？まあ いいや。では ごゆっくり お読みください」

第23話 ナチヤの過去2nd

謎の人物「今日は先生を狩りに行こうかな」

謎の人物ことナチヤはクツクを狩りに行こうとしてた。

ナチヤ「よし。アイテムも装備も大丈夫だな。行くか」

謎の人物「ちよつと待って」

ナチヤ「?俺か?」

謎の人物「そっだよ。えつと自己紹介だね。僕の名前はダーフィット
と言っんだ」

ナチヤ「ダーフィットか。よろしくな。俺はナチヤだ」

外見から判断するなら俺と歳は近い

ダーフィット「いきなりだけど、君は初心者かい?」

ナチヤ「そうですねど何か?」

ダーフィット「いや。なんでもない。僕も一緒にクエスト行っていい
かい?」

ナチヤ「え?いいですけどクツクですよ」

ダーフィット「大丈夫。僕はそんなに強くないから」

ナチヤ「(自慢することじゃないよな)」

そうして二人は竜車に乗った。

〔竜車の中〕

ナチヤ「ダーフィットは、なんの武器が得意なんだ?」

ダーフィット「今持つてるランスでは無いよ。当ててみな」

ナチヤ「クイズか。そっだな。太刀か?」

ダーフィット「違っよ」

ナチヤ「じゃあ笛」

ダーフィット「なんで笛?まあいいや。正解は片手剣だよ」

ナチヤ「片手剣か。そっいえば、なんで今ランス使ってるんだ?」

ダーフィット「いや。ランスを使いたくなつたから使ってるんだよ。まだ練習足りないから上手くないけどね」
ナチヤ「そっか。まあ相手はクツクだから、いけるよな」

〔森丘〕

ナチヤ「クツクはどこかな？」
ダーフィット「いないね。よし別れて探そうか」
ナチヤ「そうだな。見つかったらペイントすればいいだろう？」
ダーフィット「うん。それでいいよ」
そうして二人は別れた。

ナチヤ「空が綺麗だな」
ナチヤはクツクが見つからなくて空を見ている。
ナチヤ「!?あれはクツクじゃないか？」
クツクが空を飛んでいた。
ナチヤ「よっしゃ。ラッキーだな」
ナチヤはクツクが飛んだ方向に急いだ。
ナチヤ「おっ。ダーフィットもいたのか？」
ダーフィット「うん。クツク見つかった？」
ナチヤ「こっちの方向に飛んでいたよ」
ダーフィット「そうなんだ。ってナチヤ後ろ！」
ナチヤ「ん？」
クツクが突進をしてくれていた。両方ともまだモンスターの殺気をあまり感じ取れないらしい。
ナチヤ「危ね！」
ナチヤはクツクの突進を、なんとか避けた。

ダーフィットはランスでガードをした。そして、そのままクツクを攻撃した。

ナチャ「ランスはガード出来ていいな。まあ双剣は避ければいい話だけだな」

ナチャは突進で隙があるクツクに数回攻撃をした。

クツクはハンターを一気に潰そうと尻尾アタックをした。(回転するやつ)

ダーフィット「うわ！」

ダーフィットはガードしたが横からの攻撃でありガード出来ず喰らった。

ナチャ「ダーフィット大丈夫か？」

ナチャは上手くクツクの尻尾アタックを避けさらに攻撃をしていた。

ダーフィット「大丈夫だよ」

ダーフィットはすぐに起き上がり攻撃を仕掛けた。

だがクツクは翼を広げて飛んだ。

ナチャ「飛んだ！」

と思ったが直ぐに降りてきた。だが降りてくるときの風圧でナチャは転んだ。

ナチャ「転ばせるために飛んだのかよ」

クツクは転んで隙のあるナチャを狙った。

ナチャ「ナメんなよ！」

ナチャは至近距離で突進をしてきたクツクの股をくぐった。

ダーフィット「凄いね。下手したら喰らってたよ」

ナチャ「まあ俺なら余裕だぜ」

ナチャが天狗になっている。クツクはナチャに攻撃を悉く避けられ怒った。

第23話 ナチヤの過去2nd（後書き）

Yugata「俺は気付いた。この小説に足りないものを」

ナチヤ「あ！俺の意見採用されてる。で足りないものってなんだ？」

Yugata「それは……。エロだ！！！！！」

ナチヤ「エロか！」

トアスク「ほどほどにしときなよ。R18とか勘弁だぞ」

Yugata「それは心得ているさ。だからエロって言っても少しだけだから」

ナチヤ「少しだけと言うと？」

Yugata「シアンやクレスやライリがポロリとか」

トアスク「うん。セーフかな？」

ナチヤ「それは主人公である俺が一番経験するよな。絶対」

Yugata「さあ？新キャラにやらせるかもな。あとお前らがいる場所が建物の中だし注文してるからどっかの店にいるんだろ？それじゃ無理だな」

ナチヤ「よし。今から風呂場に移動するぞ」

トアスク「良かったな。ここに女子軍呼ばなくて」

Yugata「まあ最初からこの話をするつもりだったから呼ばなかったんだよ」

トアスク「さすがにYugataもボコボコには、されたくないんだな」

ナチヤ「でも気付いたんだが、キャラの詳細を決めてないから胸の大きさとかどうすんだ」

Yugata「……。そこを考えてなかった。何か、いい表現を考えないとな」

トアスク「とりあえずエロは難しいな」

ナチヤ「そうだな。Yugata頑張れ。応援してるから」

サバレ「お前ら、もし家のライリに何かしたら……。分かるよな

？」

トアスク「いつの間に」

サバレ「俺はライリという単語は半径300キロメートルだったら聞こえるんだよ」

アルミン「もちろん。俺もだよ」

ナチャ「だが今日はサバレ達に勝つ方法がある」

トアスク「あるのか？」

ナチャ「よく聞けよ。上手くすればライリと一緒に風呂に入れるぞ。だがそれを決めるのはトアスクと俺だけだ。(移動的な意味で)さあ、ここで俺らを潰して久しぶりのライリとの混浴のチャンスを出すのか？」

サバレ& amp ;アルミン「くっ。動けない」

トアスク「凄いこと考えたな。まあ 終わりが見えないから俺が終わらせるよ。では また次回に ノシ」

第24話 クック大活躍!? (前書き)

前回の後書きが酷かったですね。謝りませんが

ナチヤ「いや謝れよ」

シアン「どんな話をしたの？」

トアスク「秘密だな」

ライリ「なんでよ。教えなさいよ」

ナチヤ「今回は何があっても無理だ。あとyugataが謝らないから俺が代わりに謝ります。すいませんでした」

クレス「ナチヤが謝るの久しぶりに見ました」

ナチヤ「そうか？」

クレス「いつも。テキトーに言ってたから」

ナチヤ「テキトーで悪かったな。ではごゆっくり お読みください」

第24話 クック大活躍！？

ナチャ「怒ったな」

クックは口から火が出ている。そしてさっきよりも速くなった突進をした。

ナチャ「よつと。このくらい余裕だぜ」

ダーフィットもしっかりとガードをした。

ダーフィット「全然パワーが違うよ。気をつけて」

ダーフィットもナチャも特に問題なくクックを追い詰めていった。

ナチャ「そろそろ。年貢の納め時だ！」

ナチャは鬼人化をした。

ダーフィット「とどめは、よろしくね」

ダーフィットの攻撃でクックが倒れた。

ナチャ「まかせな！うらああああ」

ナチャの乱舞がクックの頭を攻撃する。

ナチャ「終わりだ！」

そう言つて双剣の両方を一気に降り下ろした。

そしてクックは絶命した

ダーフィット「ナチャは強いね。僕なんて、まだまだだよ」

ナチャ「そんなことないさ。ダーフィットだって巧く転ばせたじゃないか」

ダーフィット「うん。ありがとう。ナチャにさ、あることを話したいんだけど、いいかな？」

ナチャ「いいよ。どんな話なの？」

ダーフィット「お父さんの話だよ。僕のお父さんはモンスターの研究者なんだ。そして哲学にも興味があるんだよ」

ナチャ「そうか」

ダーフィット「それでお父さんが言ってただけだね、人間とモンスターは殺しあわずに共生が出来るらしいんだよ」

ナチヤ「モンスターと共生？」

ダーフィット「うん。僕のお父さんは同じ研究者から話を聞いたらしいけど、モンスターも理解すれば攻撃をしてくないんだって」

ナチヤ「へへ。モンスターが攻撃をしてくないか」

ダーフィット「でもそれが分かってても人間が理解しないってお父さんが言ってた」

ナチヤ「人間が理解しないか。確かにそうだな。そして、なんでこの話を俺に？」

ダーフィット「なんとなく。ナチヤだったら、いいかなってね」

ナチヤ「そうかい。まあいいか」

〔集会所〕

ナチヤ「じゃなく。また会えるといいな」

ダーフィット「うん。じゃあね」

ナチヤ「なんか不思議な奴だったな。さあ家に帰るか」

ナチヤ「こんな感じだ」

シアン「ダーフィットのお父さんがアマデオと関係ありそうだね」

トアスク「だが他の研究者から聞いたなら確率は低いな」

ライリ「アマデオのその後は知らないわ」

シアン「気になるね。それより今回のナチヤは頑張ったね」

トアスク「いつもだつたらカツコ悪いのにな」

ナチャ「いや。たまたま話したのがカツコ悪いだけで大体カツコいいから」

ライリ「嘘っぽいわね。クレス本当なの？」

クレス「大体は言い過ぎだと思います。言つなら、たまにカツコいいですね」

ナチャ「そんなにカツコ悪かったけ？」

クレス「よく乱舞最中に喰らつてたよ。乱舞はチャンスの時にやるのに」

ナチャ「うっ！確かに闇雲にやってたな」

ライリ「馬鹿だからよ」

ナチャ「な！だから俺は馬鹿じゃないって！」

トアスク「まあ二人とも落ち着け。次は誰が話すんだ？」

クレス「私でいいですか？」

トアスク「俺は最後でもいいよ」

クレス「じゃあ私が話しますね」

第24話 クック大活躍!? (後書き)

今回はクレスの話です。

どんな話にするか、まだ未定です。

ナチャ「あれ？俺の意見採用されたんじゃないの？」

ライリ「それなら *Yugata* を書くの面倒だから止めたらしいわ

ナチャ「マジかよ。なんか残念だな」

ライリ「そんなんで落ち込まないでよ。その・・・」

ナチャ「？」

ライリ「私も、その・・・寂しくなるから」

ナチャ「？ごめん。声が小さくて、よく聞こえなかった。もう一度言ってくれ」

ライリ「いつ・・・嫌よ！ナチャの馬鹿！アホ！」

ナチャ「？なんで、そんなに罵倒されなきゃいけないんだよ・・・」

シアン「鈍感も困るね」

トアスク「あれがナチャだからいいだろ」

シアン「それも、そうかもね」

クレス「出番が無かったので最後は私です。では また次回に
シ」

第25話 クレスの過去2nd（前書き）

今回も戦闘があります。気付いたんですが戦闘でピンチになることが今までに、あまり無かったんですね。なので今回は頑張りたいと思います。

ではごゆっくり お読みください

第25話 クレスの過去2nd

クレス「ナチャ〜。また遅刻だよ」

今日はナチャと二人で何かを狩りに行くらしい
ナチャ「いや。俺の腹時計だと遅刻じゃない」

クレス「言い訳してないで早く行こ」

クレスはナチャを引っ張りながら電車に乗った。

アイルー「あと二人はどうしたニヤ？」

クレス「あと二人？」

ナチャ「俺達だけじゃないのか？」

アイルー「多分あんたらの後に二人受注されたなニヤ」

ナチャ「知らなかった。報告みたいの無かったけどな」

クレス「う〜ん。私も知りませんでした」

謎の人物A「こんちは〜。いきなりで、すみませんね」

クレス「誰か来ましたね」

謎の人物A「おお！貴方こそ俺の女神！」

クレス「はい？どうゆうことですか？」

謎の人物B「ナンパしてるのかな？スキラ」

スキラ「yes！してるよ、ナンパ」

謎の人物Bのパンチがスキラの顔を捉えた。

スキラ「ぐはあ」

スキラは戦闘不能。

謎の人物B「自己紹介もせず、すまないな。私はメライだ。よろしく」

ちなみにメライは女です

ナチャ「。。。ああ、よろしくな。俺はナチャだ」

クレス「私はクレスです。よろしくお願いします」

スキラ「俺はスキラさ。まあテキストによる」

ナチャ「（スキラってなんか変な奴だな）」

クレス「そういえば、なんで私達に連絡が来なかったんですか？」
メライ「それはスキラが驚かせた方がいいとか言って連絡されなかったの」

クレス「そうなんですか」

スキラ「クレス。このクエストが終わったら食事でもどうかな？」
いきなり紳土的キャラになって話しかけてきた。

メライ「やっぱり息の根を止めないとダメかね」

スキラ「ちよ！落ち着け。メライ落ち着けて。・・・アアー」
ボタン スキラは飛翔した。

クレス & amp; ナチャ「・・・」

（雪山）

ナチャ「寒いな」

クレス「そうですね。ホットドリンクグレートGとか、ないんですかね？」

スキラ「俺は貴方に対する愛でもう胸がほつかほK（ry）」

ナチャ「また殴られたな。これじゃあティガレックスと戦う前にアイルー送りだな」

メライ「いや。天国に送ってくれると助かる」

クレス「あ！いましたよ」

ティガレックスは、まだこちらに気づいてないようだ。

スキラ「任せな。俺が叩きのめしてやるぜ」

スキラがティガに突っ込んだ。

ナチャ「よし。俺も行くか」

クレス「私も行きます」

メライ「皆頑張つて、私は笛を吹いてから行くよ」

メライの武器は笛だ。そしてスキラの武器も笛だが何故か突っ込ん

だ。

スキラ「笛はハンマーより強いってことを教えやるぜ」

ティガは、こちらに気づいて咆哮をした。

ナチャ「俺が右足やるからクレスは左を頼むな」

クレス「うん。分かった」

ナチャとクレスは別れた。

ティガはとりあえず前にいるスキラに向かって突進をした。

スキラ「余裕、余裕」

ティガの前足の間を巧く利用して避けた。

ナチャ「ほ〜。よくあれが、できるな。俺は怖くて無理だ」

クレス「ナチャはビビりだもんね」

ナチャ「違うから。ビビりじゃないから。お化けとか平気だし」

ティガはさっきの会話が気に入らなくらくて雪の玉を投げつけてきた。

ナチャ「クレス」

クレス「大丈夫だよ。ナチャと違って」

二人とも避け攻撃を仕掛けた。

ティガはさっきからずっと攻撃をしているスキラにイラつきスキラを狙いにした。

スキラ「こっちに振り向いたら終わりだよ」

〔攻撃力アップ【大】〕

スキラのスタンプが見事にティガに当たった。

スキラ「ナイスなタイミングだな。メライ」

メライ「たまたまよ」

ティガはスキラの攻撃に激怒し怒りの咆哮をした。
だが

メライ「残念。高級耳せん吹いたから喰らわないよ」

ティガの咆哮は無意味であった。いやハンターにとっては無意味で

は無いが。

ナチヤは右後ろ足、クレスは左前足、スキラとメライは頭をそれぞれ攻撃した。

スキラ「メライ、いくぜ」

メライ「分かってるよ」

ブゴオ。ティガから鈍い音が聞こえた。

スキラのスタンプとメライの下から上にやる攻撃を同時に受けティガは大きなダメージを喰らい、脳震盪を起こしスタンした。

第25話 クレスの過去2nd（後書き）

ナチャ「そろそろキャラ紹介かな？」

トアスク「まだ早いだろ。もう少し経ってからな」

シアン「私は、もう新キャラばっかりで、よく分かんない」

トアスク「そう言われても、まだ数人しか出てないからな」

ライリ「新キャラ出るたびにキャラ紹介するのは、どう？もちろん後書きでね」

ナチャ「後書きを見ない人がいるからダメじゃない？」

シアン「そ〜だね。本文以外に力を入れてる作者にとって後書きと前書きを見ない人は天敵だね」

クレス「本文より後書きなどに力を入れるのは何故でしょうか？」

ナチャ「作者が、ふざけたのを書くのが好きだから」

トアスク「作者がストーリーを真面目に考えるのが面倒だから」

シアン「作者は男だから」

ライリ「作者は後書きが本文と勘違いしてるから」

クレス「色々な理由があるんですね」

トアスク「誰かの発言は、おかしかったが、まあいいか。ではまた次回に ノシ」

第26話 ナチヤは、この話を知っています。(前書き)

クレスの過去ですがナチヤの過去でもあるという、これまた不思議な話です。

ナチヤ「どこが不思議なんだよ」

トアスク「作者の頭」

ナチヤ「なるほど。理解した」

では、ごゆっくり お読みください

第26話 ナチャは、この話を知っています。

ナチャ「あの二人凄いな」

クレス「二人とも頭を狙ってるのに邪魔をしないね」

スキラとメライはスタン中のティガに二人で頭を攻撃するが、スキラが攻撃をする、スキラが次の攻撃をする時間にメライが攻撃をする、そしてスキラがまた攻撃をする。こんな感じの無限ループで攻撃をした。

ティガは、さらに怒った。

メライ「目が完全に逝っちゃってる」

ティガはかなり速い突進をするが、全て避けられる。

ナチャ「速すぎないか？」

武器をしまつて必死に逃げている。

クレス「きゃ！」

クレスは逃げているとき新雪の所に行つてしまい、足が雪に埋まつてしまった。ティガはそんなクレスを見逃さずクレスに突進をした

ナチャ「！！クレス」

ナチャはクレスを助けようとしたが間に合う距離では無かった。

ナチャ「くっ。こうなったら一か八かだ」

ナチャはクレスに向かって突進をしているティガに

ナチャ「切れるー！！」

ナチャの双剣がティガの尻尾を攻撃した。

だが尻尾は切れなかった。

ティガはクレスを近くにして倒せると確信した。

メライ& amp ;スキラ「まだだ！」

メライとスキラはティガの前足に攻撃をして爪を折った。

ティガは痛みにより怯んだ。しかしクレスはまだ足が抜けてなくティガはクレスを狙い、また突進をしようとした。

ナチャ「やらせない！」

ナチャの渾身の乱舞がティガの尻尾を攻撃し、尻尾を切った。
ティガは尻尾を切られたことにより少し跳んだ。その時クレスを飛び越えた

ナチャ「クレス大丈夫か？」

クレス「足が抜けないよ。ナチャ」

ナチャは少し涙目のクレスに変な感情を抱いた。

ナチャ「（なに考えてんだ、俺は）」

クレス「？ナチャ早く助けてよ」

ナチャ「ああ。悪いな。今助ける」

ナチャはクレスの手を引つ張って助けた。

メライ「あつ！危ない！」

ティガは尻尾を切られた痛みにもがいていたがその中で雪を投げつけてきた。

ナチャ「！！！！」

ティガが近くにいたのとクレスがいることによりナチャは避けられなかった。

バキツ 嫌な音がしてナチャとクレスは吹っ飛んだ。

クレス「ナチャ！ナチャ！大丈夫！？」

ナチャはクレスを庇ったため背中に大きなダメージを受けた。

ナチャ「くっ。大丈夫だと・・・思う」

ナチャはあばら骨が数本折れていた。それに気付かないクレスではない。

クレス「全然大丈夫じゃないよ」

メライ「二人とも大丈夫？ティガの方はスキラが引き付けてるよ」

スキラ「今日会ったばかりだが仲間を傷つけたら怒るぜ！」

クレス「ナチャ歩ける？」

ナチャ「・・・痛くて一人じゃ無理だな」

ナチャは強がるのを止めた

メライ「クレス。ナチャを安全な所に移動させてくれる？」

クレス「はい。任せて下さい。ナチャがこうなったのは私のせいで

すから」

クレスはナチヤに肩を貸しながら安全な場所に急いだ。
メライ「スキラの援護しなきゃね。私も仲間を傷つけられて怒って
るよ」

そしてメライとスキラはティガと戦った。

（安全な場所）

クレス「ナチヤ。ここなら安全だよ」

ナチヤ「悪いな。迷惑ばかりかけて」

クレス「迷惑かけてるのは私の方だよ。ナチヤがこんな風になっ
ちゃって・・・」

クレスは泣きそうになったが堪えた。

ナチヤ「俺のことは気にするな。早くスキラ達の所に行ってくれ」

クレス「でも・・・」

ナチヤ「早く行け！」

ナチヤは少し怒ったように言った。

ナチヤ「俺は大丈夫さ。だから早く」

クレス「・・・。うん、行ってくるね」

クレスはスキラ達の所に行った

ナチヤ「あゝあ。怒っちゃったよ」

ナチヤは何故か後悔した

第26話 ナチヤは、この話を知っています。（後書き）

この後の展開をどっちにしようか迷っている作者です。

今回は番外編に繋げられそうな所があるので番外編にしようと思えます。（ナチヤが一人になったから、それで何か話を作る予定）まあ流れる的にシリアス？な感じになると思います。

ナチヤ「トアスク。噂なんだが作者が番外編でエロ要素をマジで入れるらしいよ」

トアスク「そうなんだ。何かいい表現でも思い付いたのかね？」

スキラ「ちつ。ここには男しかいないじゃん」

ナチヤ「あれ？スキラ来てたのか？」

スキラ「いや。なんか面白そうだから来てみた」

メライ「スキラ！またナンパ・・・って男しかいないな」

スキラ「よし場所を移動だ。メライ！」

メライ「え！？また」

タツタツタ

トアスク「なんだったんだ？」

ナチヤ「さあな。そうだメライは男っぽい口調だが女だから間違えるなよ」

トアスク「本文でも言ってたな」

ナチヤ「？なになに。僕っ子を書きたいけど、どんなキャラが似合うのか分かんない」

トアスク「作者からの伝言か。何考えてるんだろっな」

ナチヤ「俺も知りたいな。まあいいか。じゃあせーの」

ナチヤ& amp ;トアスク「また 次回に ノシ」

第27話 主人公によくあること（前書き）

大きな怪我をよくしますよね。これは補正でいいのでしょうか？

ナチャ「大きな怪我か。今回は骨が折れたな」

シアン「それはナチャが、まだ未熟だからだよ。私なんて蟹で怪我したのにクシヤで怪我しなかったんだよ」

トアスク「それはシアンが蟹を甘く見すぎてたからだろ」

シアン「！！違うもん。トアスクのせいだもん」

シアンは軽く怒った。

トアスク「・・・何故に俺のせい？」

クレス「私の考えてだと

トアスクのせい

トアスクがいなかったら本当の話をしな

トアスクは特別

何か特別の感情がある

あれしか無い

だと思えます」

ライリ「あああ。聞こえてない。聞こえてない。ではごゆっくり

お読みください」

第27話 主人公によくあること

クレス「え？」

クレスはスキラ達の所へ戻って嫌な状況を見た。

もちろんティガは弱っていないながら生きてるがスキラとメライが血を流している。

クレス「どうしたんですか!？」

メライ「話は後よ。今はこのティガを倒す」

ティガは怒り状態でスキラに突進してきた。

スキラは怪我で多少動きが鈍っていた。

スキラ「よつと。よし喰らえ!」

ティガに向かつて笛でスタンプをした。ティガは喰らったが怒りで痛みをそんなに感じなくなりその場で構えた。

スキラ「つたく。回転かよ」

スキラは直ぐにティガから離れた。尻尾が切られているので攻撃範囲は、そこまで広くない。

クレス「よし。攻撃チャンス」

クレスはライトボウガンなので攻撃をした。ティガの狙いはスキラのまま変わらない。なぜなら体力的にスキラが一番早く倒せるからだ。ティガは動物の勘で、それが分かっていた。

メライ「私もいるよ？」

ティガは横からメライに殴られた。だが気にせずスキラに突進をした。

スキラ「ちつ。危険だがやるか」

スキラの後には断崖絶壁で横は恐らく新雪だと思われるところだ。そしてスキラは、またティガの前足の隙間を利用して避けたが。

スキラ「!!!」

ティガは突進を急停止し少し後に下がった。

メライ「危ない!スキラ」

ティガの右前足の前にスキラはいた。

スキラ「（このまま雪を投げつけてくるやつで俺は終わりか。スゴいな、死ぬ直前はスローに見えるんだな）」

ティガの右足が上に上がった。

クレス「間に合って。お願い」

クレスはある弾をティガの前足の爪あたりに撃ったがティガは無視をして、スキラを攻撃した。

ボンツ　クレスが撃った弾は徹甲榴弾だった。爆破のおかげでティガの投げる雪が無くなり、さらに急に足場が無くなったティガは転んだ。

スキラ「ありがとな！よっしゃ。終わらせるか」

スキラは転んで動けないティガにスタンプを思いっきり叩き込んだ。鈍い音がしてティガは絶命した。

クレス「こんな感じですよ」

シアン「ナチヤ足手まといだね」

ナチヤ「いや。尻尾切ったから。多少なりとも役にたったから」

トアスク「しかし今回のティガは強かったな」

ナチヤ「まあ、まだ俺もそんなに強く無かったからな」

ライリ「ナチヤは今も強くないわよ」

ナチヤ「それを言ったら、おしまいだ」

トアスク「さあて次は俺かな」

シアン「私やる」

トアスク「またですか」

シアン「冗談だよ。なに真に受けてんの」

トアスク「いや。シアンだったらやりそうだったから」

ナチヤ「確かにな。でも順番通りにいくとトアスクだからトアスク

が話せよ」

トアスク「まあ、そのつもりさ。今回はクリストの話だな」

第27話 主人公によくあること（後書き）

いつかやる番外編のために話を残したら凄く短くなった。

シアン「私とトアスクで文字稼ぎしたんだよ」

トアスク「言うなよ。文字稼ぎって」

ライリ「？ナチヤ、今日は、やけに機嫌が良さそうね」

ナチヤ「今日は作者に役をもらったからな。最近、俺やってなかったから久しぶりで、なんか嬉しいだよ」

クレス「役って何ですか？」

ナチヤ「よし。皆に報告があります。よく聞いて下さい」

シアン「はい」

ナチヤ「次回は番外編をやりませう。タイトルは・・・」

【ヤバヤバ 温泉であれこれ
です。」

女子軍「・・・」

トアスク「（とうとう、やるのか）」

ナチヤ「読者の皆、期待しとけよな！」

トアスク「分かると思いますがエロ要素が入ってるので気をつけて下さい。では また次回に ノシ」

第28話 番外編 作者の陰謀（前書き）

久しぶりに番外編です。今回も本文が前書きと後書きの世界になります。ではごゆっくり お読みください

第28話 番外編 作者の陰謀

ナチヤ「やっと着いたな」

今日は番外編ということで小説に出てきた名前のあるキャラが温泉に来ている

ナチヤ「前書きに補足は書いてあるので読んで下さい」

トアスク「やっぱ温泉に来たんだから早速風呂だな」

シアン「私一番乗り」

シアンが風呂場に走って行った

ライリ「私も入ろうかしら」

クレス「皆が入るなら私も入ります」

チヨ「私はここに不思議な力を感じるから見物してくるわ」

ミヨア「よし。長湯するわよ」

メライ「私も入ろうかな」

ナチヤ「女性陣はチヨを除いて皆入るらしい。もう俺には入るしか選択肢が無いな」

トアスク「この小説男性陣が多いよ。もっと女性陣を増やさない？」

作者「番外編で新キャラ作るか？」

ナチヤ「ちよ。出てくんない」

アルミン「ライリと一緒に入れるのでは無いのか？」

ナチヤ「それは無理だから（作者の技量的に）止めたんだよ」

サバレ「なん・・・だと・・・」

トアスク「さっ。風呂に入ろうか」

（露天風呂（男））

ナチャ「いや〜。風呂は、いいね」

トアスク「確かにな。ここに酒があると、もっといいんだがな」
ナチャ「俺は風呂上がり牛乳だ」

シナオ「やつほ〜い」

ザバ〜ン。シナオは風呂に飛び込んだ

ディルク「馬鹿はマナーも知らないのか」

シナオ「あ！なんだと。俺は馬鹿じゃない」

クリスト「・・・うるさい」

シナオ「いや。俺はうるさくないからディルクがうるさいだけだ」

ディルク「ハハハ。殺してやるうか？」

シナオ「殺れるなら、やってみな」

トアスク「まあ。落ち着け。後で殺ろうな」

ダーフィット「僕達は一体なんの目的で出てきたんだらうね？」

アマデオ「分からない。でも名前があるだけマシだよ」

ダーフィット「そうだよ」

スキラ「あ〜。女がいない〜」

スキラは体を浮かせて漂っている

サバレ& amp ;アルミン「入れない。入れない」

二人は呪文みたいに繰り返し言っていた。

フェリクス「いつまで落ち込んでるんだよ」

アルミン「俺はお前と違ってライリを愛してるんだ」

フェリクス「いや。愛してるのは見るからに分かるよ」

サバレ「フェリクス。お前ミヨアの裸見たいと思わないか？」

フェリクス「は！？急に何をいいだすんだよ」

アルミン「フェリクスはマザコンだからな。見たいんだろ？」

フェリクス「いやいや。何を言ってるかよく分からん」

フェリクスはテンパっている。

サバレ「まあ、覗きをしないか？という話だ」

その時、男全員の神経がサバレの話にいった。

サバレ「ふむ。聞けと言わなくても皆聞いてるな。今回は、かなり危険なミッションだ。家のライリとミヨアはかなり強い。さらにシアンと言った娘は恐らくこの小説で最強だ。クレスとメライの能力は未知数。下手に突っ込むと確実に殺られる」
そして男性陣がマジで女湯の覗きについて作戦会議をし始めた。

〈露天風呂（女）〉

シアン「お風呂は最高だね」

クレス「そうですね」

ライリ「私は男性陣が何を考えているか気になるわね」

シアン「確かに、覗き見してきそうね」

ミヨア「大丈夫よ。サバレいるから」

クレス「大人がいれば平気ですかね？」

ライリ「お父さんは、やりそうだけど・・・」

ライリの予想は当たっていた。

メライ「スキラは絶対に、やってくるよ」

クレス「あの人はやってきそうですね」

シアン「皆、心配しないで護身用に弓もってきたから」

メライ「シアンが武器を持っていたら大丈夫だね」

〈露天風呂（男）〉

サバレ「よし。それでいこう。

ではミッション開始だ」

第28話 番外編 作者の陰謀（後書き）

ナチヤ「今回も酷い回になりそうだな」

トアスク「キャラがたくさん出てるな」

ナチヤ「そうだな。たまに誰が誰だか分からなくなる」

トアスク「まあ本文で茶番したから後書きは、そんなに書かなくていいか」

ナチヤ「ああ。では」

トアスク「また次回に」

ナチヤ& amp ;トアスク「ノシ」

第29話 番外編 エロ予告なんてなかった（前書き）

本当にタイトル通りエロ予告なんて無かったんだ。本当なんです！
信じて下さい！刑事さん

あと補足ですが皆タオルを巻いていますよ。裸じゃないですからね。
今回も前回と同じ設定です。

では ごゆるり お読みください

第29話 番外編 エロ予告なんてなかった

サバレ「皆準備できたな」

男性陣は桶などを使って隣の女湯にジャンプすれば入れるようになった。

（少し前）

ナチヤ「覗き見ると言ってもバレるだけじゃないか？」

サバレ「俺達はハンターだぞ。覗きなんて、ちっぽけなことはしない」

トアスク「じゃあどうするんだ？」

サバレ「一気に全員で女湯に飛び込む」

アマデオ「ふむ。それだったら何人か入ることが出来るかもな」

サバレ「そして入ったら、あとは自由だ。では準備するぞ」

サバレ「じゃあ。行くぞ。せーの」

サバレ達は一斉に女湯に飛び込んだ。

シアン「来たね」

シアンは人間とは思えない速さで弓を放った。

トアスク「グハ」

アマデオ「何故俺」

ダーフィット「やっぱりか」

フォルク「ここで今まで出てなかった俺か」

クリスト「・・・」

ナチャ「避けられないぜ」

ディルク「無理だよな」

だが全員は落とせなかった。

ライリ「はあ」

ライリは溜め息をつきながら桶でアルミンをぶっ飛ばした。

ミョア「あとで説教ね」

ミョアもサバレを桶でぶっ飛ばした。

メライ「スキラ。いい加減にしなさいよ」

メライもスキラを桶でぶっ飛ばした。

クレス「キヤアー。ナチャの変態」

ナチャ「いや。待てよ。確かに変態だが」

ライリ「フェリクスお兄ちゃんまでそんなのだったんだ」

ミョア「フェリクス。見損なったわ」

メライ「やっぱりナチャもそういう人なんだね」

シアン「ぶぶ・ダメ」

シアンは笑いを必死にこらえている。

フェリクス「え。いや、ちょっと」

女性陣の目が二人に冷たく突き刺さる。

ナチャ& amp ;フェリクス「・・・」

二人は隅の方で落ち込んだ。

シアン「この二人は倒さなくても余裕だね」

シアンはまだ軽く笑っている。

クレス「私は何もしなかったけど平気でしたね」

ライリ「女は強いからね」

フォルク「作者完全に忘れてたろ」

ダーフィット「僕もいつ忘れられるやら」

スキラ「いつて〜。なんなんだよ。別に見たつていいだろ。ん？

!!!。皆！ちよつと来てみ」

トアスク「・・・。死んでるのか？」

サバレとアルミンが頭から血を流して倒れている。

〈泊まる部屋〉

トアスク「今回の事件は突然だがサバレとアルミンが死んでいた」

シアン「犯人分かつてるような気がするけどな〜」

トアスク「サバレとアルミンを殺して得する人は誰だと思う？」

ライリ「お母さんと私は得するわけではないわね」

クレス「考えるとナチャじゃないですか？」

ナチャは、まだ隅で落ち込んでいる。

トアスク「死体は頭に打撲傷があった」

シアン「は！分かった。犯人はナチャよ」

ナチャ「なんで？」

ナチャはテンションがかなり低い。

シアン「サバレとアルミンはナチャを数回襲った。これが動機だね。殺し方はシンプルだよ。桶で殴ったら偶然にサバレとアルミンが岩に頭をぶつけて死んだんだよ」

ナチャ「いや。クレスとミョアが桶を投げたからだよな」

トアスク「流石だな、シアン。お前の推理力には、いつも驚かされるよ」

ナチャ「いやいや。証拠も無いのに凄いのかよ」

シアン「2時37分 ナチャを逮捕」

ナチャ「え？待ってよ。話を聞いて下さい。刑事さん！」

ここで太陽に吠えるのテーマ曲がながれた。

テッレテテッレテッレテテテテテ

湯煙温泉殺人事件みたいのを思い出したら書いてました。

サバレ&a m p・アルミン「死んでないから。勘違いするなよな」

第29話 番外編 エロ予告なんてなかった（後書き）

今回の番外編、何をしたかったのか作者も分からない。

ナチャ「ただの茶番だな」

シアン「エロ要素のこと話してたんだ」

トアスク「うっ……。ヤバイな」

シアン「さあ覚悟はできてるよね？」

ナチャ& amp ;トアスク「逃げる」

クレス「何故、男の人は悪いことばかりするのでしょうか？」

ライリ「単純で馬鹿だからよ。まあそれが男だからいいんじゃないの」

ナチャとトアスクは逃げられるわけもなくシアンの弓の餌食になった。

では また次回に ノシ

第30話 トアスクの過去2nd（前書き）

そういえば番外編でシアンの弓が当たってぶっ飛びましたが、矢はあの蝟の吸盤みたいのが先についていますから刺さってないですよ。そして吹っ飛んだのはシアンの矢が強いということ。

シアン「流石。この小説最強だね」

トアスク「嬉しそうだな」

シアン「そりゃ。もちろん。嬉しいよ」

ディルク「どうした？シナオ。俺が最強だって言わないのか」

シナオ「え！？いや。俺は今、腹痛で最強じゃないから」

ディルク「・・・。（馬鹿も馬鹿なりに考えてるんだな）」

では「ごゆっくり お読みください」

第30話 トアスクの過去2nd

シナオ「今日も皆いるな」

デイルク「黙れ遅刻野郎」

シナオ「な！俺は遅刻してないし。ちゃんと約束守ったぜ」

トアスク「うん。30分遅刻だよ」

シナオ「いや。俺の時計は約束の時間だぜ」

デイルク「その時計が遅れてんだよ。馬鹿」

シナオ「ふ。クエスト行くぞー！」

トアスク&デイルク「（誤魔化した）」

トアスク「今日はシエンガオレンだよ」

シナオ「誰が相手でも余裕だぜ」

デイルク「あ、そくだ。言うの忘れてたが、もう一人来るらしい」

シナオ「なるほど。俺のファンだな」

デイルク「そんなわけないだろ馬鹿。ギルドマスターと一緒に」

てくれと頼んできたんだ」

トアスク「へ〜。誰だろうね」

シナオ「とりあえず竜車に乗ろうぜ」

シナオ達は竜車に乗った。竜車には見知らぬ男が一人乗っていた。

シナオ「！？誰だお前」

謎の人物「・・・クリスト」

トアスク「名前がクリストということで、いいのかな？」

謎の人物は黙って頭を縦に振った。

デイルク「俺はデイルクだ。よろしく」

トアスク「トアスクだ。よろしく」

シナオ「俺は最強のシナオ様だ。よろしくな」

デイルク「ただの馬鹿だろ」

シナオ「違うから。何度言えば分かるんだ、この馬鹿デイルク」

デイルク「あ？ぶち殺されたいのか」

トアスク「やめろよ。二人とも」
クリスト「・・・」

クリストは無言で自分のメテオバスターを手入している

〔街〕

シナオ「街に誰もいないな」
デイルク「まあ死にたくないってことだ」
そして全員、砦に移動した。

〔移動中〕

シナオ「？なんだあれ」

ドゴオン

シナオ「グハ！」

シナオを華麗にシエンのアレを喰らった。

〔砦〕

シナオ「絶対にシエンぶつ殺すぜ」

デイルク「まあテキトーに頑張れよ」

クリスト「・・・」

トアスク「ハンマーは戦いにくいけど頑張らなきゃな」

シエンから見ればハンターなど蟻も同然の生物だ。だが、その蟻にやられるシエンもいる。

トアスク「おっと」

トアスクはシエンの足を攻撃をしようとしたが震動で動けなくなつた。

シナオ「うわ」

シナオは転んだ。

デイルク「なんで転んだ？」

デイルクは上手く震動が無い時に攻撃をしていた。

もちろんクリストは遠距離でヘビィボウガンを撃っていた。

そしてシエンは皆の目の前になると構えた。

シナオ「さつき俺が喰らつたやつか」

そうシエンのおしこ。

漢字で書くとだ。

トアスク「止めないと不味いね（二つの意味で）」

だがシエンが攻撃をする間は震動がない。

シナオ「見せてやるぜ。スーパーシナオ大回転斬り」

シエンがアレを放つと、ほぼ同時にシナオの大回転斬りが当たった。

シナオ「どうだ。ざまあみる」

シエンはシナオの攻撃で怯み攻撃が出来なかった。

トアスク「流石だな」

だがシエンは次の攻撃に移った。

その前に一旦後ろに下がり、また皆の前に戻った。

シナオ「ちっ。動くなよ。めんどくさい」

シエンが、またもアレを出すために構えた。

シナオ「もう一度やってやるぜ」

シナオの大回転斬りは当たったが今回はシエンが踏ん張り怯まなかつた。

デイルク「オー！！！」

デイルクの大剣の溜め3がシエンの足を思いつきり斬ったがシエンは、なんとか耐えた。

トアスク「これで怯むとは思えないけど。やるしかない！」

トアスクはハンマーの最大溜めからのスタンプを放った。しかしシ
エンは耐えた。

クリスト「・・・手伝う」

クリストはガンナーだがシエンの足に近づいていた。

第30話 トアスクの過去2nd（後書き）

クリストは何をするためにシエンに近づいたのでしょうか。

ナチャ「大体、想像は出来るけどな」

トアスク「そうだね。まあヒントを出すなら、小説は派手な物があつたら使うな。モンハンでガンナーの派手な物はアレしかないな」

シアン「そうだね。フロンティアではないけどね」

ライリ「もう答えを言ったようなものね」

クレス「でも分からない人もいるかもしれません」

ナチャ「そういう人は次回を期待しといてください！」

全員「では また次回に ノシ」

第31話 ダブルデートの意味(前書き)

タイトルの理由は後書きに書いてあります。

茶番が書きたかったので書いただけです。

あと最近は本文も軽く悪ふざけが入ってきましたね。できる限り、
気をつけていきたいです。

では ごゆっくり お読みください

第31話 ダブルデートの意味

トアスク「？クリスト何をやる気だ」

クリストは無言のままヘイボウガンを生エンの足に構えた。

ヘイボウガン「ぼおおうおおお」

クリストが撃つ弾は竜撃弾だった。これはtryにだけ出てくる弾である。ガンランスが無いtryは、これを竜撃砲の代わりとした。ドッコーン

豪快な音がしてシエンは怯んだ。

シナオ「おお！クリストやるじゃん」

軽くテンションが上がっているシナオが叫んでいる

シエンは二度も攻撃を邪魔されて怒った。

クリストは狙いをあしからシエンの弱点に変えた。シエンの弱点は基本、殻に守られているがクリストのメテオバスターは貫通弾を撃てるので意味がない。そして攻防を繰り返して。

シナオ「よっしゃ。だんだんなれてきたぜ」

シナオも攻撃タイミングが掴めてきた。

トアスク「悪いけど死んでもらうよ」

デイルク「はああああ」

デイルクの溜め3が生エンの足を襲った。シエンはダメージが蓄積されており崩れ落ちた。

トアスク「喰らえ！」

トアスクのスタンプが見事にシエンの頭に当り殻を壊した。

シナオ「最後は俺だぜ！」

クリスト「・・・」

だがクリストの貫通弾がトアスクの壊した所に全弾当りシエンは絶命した。

「帰りの竜車の中」

シナオ「クリスト。なんで俺がカツコよく決めるところを邪魔したんだよ」

クリスト「・・・早く終わらせるため」

シナオ「！！俺がやったほうが速かったしな」

デイルク「いや。お前の大回転斬りは無駄に時間かかるから時間かかるだろ」

トアスク「確かにね。今回はクリストの判断のほうが正しい」

シナオ「けっ。皆が言うならそれでいいさ。反論するのも、めんどくさいぜ」

クリスト「・・・反論・・・出来ない・・・だけ」

デイルク「そうだな。反論が出来ないだけだな」

シナオ「デイルク。テメー。よし分かった。決闘だ！」

トアスク「はいはい。また後でな。それよりクリスト。お前はいつもいる仲間みたいのはいるのか？」

クリストは首を横に振った。

トアスク「だったら俺らと一緒に狩らないか？」

クリストは少し悩んだ顔をしたが首を縦に振った。

シナオ「よし。今日はクリストが仲間に入った記念に、飲みまくるぞー！」

デイルク「二日酔いになっても知らないぞ」

そして四人のハンターは酒屋に行った。

トアスク「よし。終わったぞ」

シアン「なんでクリストを仲間にしたの？」

トアスク「まあ単に強かったからだな。少し戦力が足りないと思っ
てた頃だし」

クレス「クリストさんは本当に喋りませんね」

トアスク「それでも上手くやってるけどな」

ライリ「さあて。次は誰が話すのかしら？」

ナチャ「なぐ。ずっと気になってたんだが、ライリがハンターの頃
の話をしてくれよ」

ライリ「・・・私のハンターの話？」

ナチャ「ああ。そうだが何かあるのか？」

ライリ「なんでもないわよ！ただ変な思い出を思い出したただけだか
ら」

シアン「へへ。変な思い出ってなに？」

ライリ「！顔近いからシアン。分かったわよ。話すわ。この話は私
がハンターになって少し時間が経った時のことよ」

第31話 ダブルデートの意味（後書き）

シアン「茶番の開始だよ〜」

今から一番言いたかったことを言います。作者が言っているのかわかりませんが。

作者「皆、評価のポイント入れて〜」

ナチヤ「待てー！作者が言っちゃ駄目だろ」

作者「いいじゃん。ポイントが欲しいんだー！」

ナチヤ「何が目的だよ」

作者「テンション的な意味合いで」

ナチヤ「別に、こっやって妄想膨らませるだけで十分だろ」

作者「いやなんだ！妄想で終わりたくないんだ！」

謎の人物「いいぞ。ポイントだけを求める、その貪欲な目」

ナチヤ「・・・誰？」

作者「雷11人の主人公のおジサンのアレンジバージョン」

ナチヤ「いや。知らないから。いい加減止めるよ」

作者「ハハハ！私は止まらないよ。ハハハハハ」

シユン

ナチヤ「・・・」（作者の頭に弓の矢が刺さって血がでている）

トアスク「処理はどうするんだ？」

シアン「塩酸の中に入れて溶かせばいいよ」

ナチヤ「え？シアン」

シアン「ナチヤ。このことを黙って無いと・・・殺すよ」

シアンから異様な殺気が溢れている。

ライリ「あ！いた。ナチャ 今日デートの予定でしょ」
クレス「そうだよ。ダブルデートって言ってたじゃないですか」
ナチャ「？そんな約束したっけ」
ライリ「いいから早く」
クレス「ほら」

ナチャはライリとクレスに腕を掴まれて歩き始めた。

バサッ

ナチャ「は！夢か」
夢を見ていたらしい。
ナチャ「ていうか、ダブルデートって意味違うよな」
何か微妙なことを突っ込んだ、ナチャだった。

では また次回に ノシ

第32話 番外編 緊急会議（前書き）

今回のことを俺は電撃結婚ならぬ電撃投稿と名付ける！
まあ、なんか書きました。あと今回も本文が前書きと後書きの世界
になります

では ごゆっくり お読みください

第32話 番外編 緊急会議

作者「今回は私も出て話します」

ナチヤ「ていうか緊急会議ってなんだ？」

作者「最近おふざげが多くなっているのは知っているだろう。だがそれでは駄目だと思う」

トアスク「じゃあ。この会議しないほうがいいのでは？」

作者「静粛に！それでだ。この記念すべき第32話だろ。何かふざけたことをここでいっぱいやって次から、あまりやらないようにしよう」

ナチヤ「意味が分からないな」

トアスク「まあ。溜めたストレスを一気に発散させるみたいない感じだと思うよ」

ライリ「まさか。作者は私の話が思い浮かばないとか言わないでしようね？」

作者「おっと。もう、こんな時間か俺は帰らなくてはな」

ライリ「逃がすわけないでしょ」

ライリは作者を捕まえた。

作者「いや。マジごめん。なんか変な思い出とか言っただけと思いつかないんだよ。とりあえず時間稼ぎに番外編をいれたんです」

クレス「いつもと同じ戦法ですね。この小説は番外編がやたらと多いのも、このせいですね」

作者「いや。本編より番外編のほうが思い付くんだよ。分かるかな、この気持ち」

ライリ「分からないわよ。早く私の話を書きなさい」

作者「いや。俺はその前死ぬかもしれない」

ライリ「?どういうことよ」

シアン「あれ?なんで私が出てくるのが500文字以降なんだろ?」

作者「ライリ。放すんだ。このままだと殺られる」
ナチャ「作者修羅場だな」
トアスク「ていうか作者のくせにキャラだな」
謎の人物「？あれクレスかな。おい」
クレス「？誰か呼んだような」
クレスは辺りを見渡した。
クレス「！？ツヤガちゃん」
ツヤガ「そうだよ。久しぶりだね。クレス」
どうやらツヤガはクレスの知り合いらしい。
ツヤガ「あれ？ナチャもいるんだね」
ナチャ「えっと。どちら様？」
ツヤガ「ひどっ！もう忘れたの私だよ、ツヤガ」
ナチャ「ツヤガ・・・？ あ！蹴り女か」
その瞬間ナチャの顔にツヤガの蹴りが炸裂した。
クレス「なんでここにいるの？ツヤガ」
ツヤガ「いや。今日なんか家に手紙がきてて、ここに招待された」
ライリ「あれ？作者は」
シアン「？あれ逃げたかな」
トアスク「ツヤガは、なんの武器が得意なんだ？」
ツヤガ「うん。ソロは弓で皆とやる時は主に双剣やランス、笛を使うよ」
クレス「そろそろネタバレいいですかね？」
ナチャ「いいだろ。実はツヤガをアルファベットにして、並び替えるとyugataになります。あとは解るな」
トアスク「そういえば作者もツヤガと同じような感じでモンハンやってたな」
ナチャ「まあ、くだらない情報だな」
クレス「演技も意外とたいへんですね」
ナチャ「俺は、すっかり忘れてたがな」
ツヤガ「番外編で新キャラだすほど馬鹿ではないよ」

ライリ「別に馬鹿なわけじゃないけど」

シアン「作者って、そんな趣味あったんだ」

ツヤガ「？私は作者の代理人であり作者自身ではありませんよ。と
いうか作者はちよつと前に逃げました」

シアン「！作者め絶対殺してやる」

何故か急に可愛くなつたシアン。

ツヤガ「今度から私が作者の代わりに色々補足などを言います。で
はこの辺りで終ります」

第32話 番外編 緊急会議（後書き）

ツヤガ「今回は何が言いたかったのかといいますと、作者やyugataだと気分的に嫌だったので代理人のツヤガを作ったという話です」

ナチャ「本文全部使うとか長いな。もっと短く言えばいいのに」

ツヤガ「まあ時間稼ぎとしてもちようど良かったので書きました」

シアン「ツヤガ。なんで蹴り女って呼ばれたの？実際は会って無かつたんでしょ」

ツヤガ「それはナチャのアドリブです。私はその位対応出来ますよ」
ナチャ「そうなんだよな。そして普通に蹴りが痛かった」

ツヤガ「練習にもなりますので、私のキャラ詳細を決めましょうか」

特別キャラ：ツヤガ

身長は平均的。体重は秘密。歳は不明。髪はセミセレブロングの深赤色。胸は貧乳。そしてテキストに美人顔をイメージしてください。

ツヤガ「なんで貧乳なのよ。私は胸があったほうがいいんだけど」

ナチャ「貧乳女に名前を変更しよ（ry）」

ナチャにツヤガの蹴りがまた炸裂した。

ツヤガ「ちなみにセミセレブロングは3rdにある髪型です。では、そろそろ終わりにしたいと思います」

シアン「今回、出番が全く無かった。私が言うよ。では また次回にノシ」

第33話 ライリの過去3rd（前書き）

ツヤガ「今回は真面目に話です。まあ内容は、かなりアレですけど。ではごゆっくり お読みください」

第33話 ライリの過去3rd

アルミン「ライリ。大丈夫か？ちゃんと、回復薬とか持ったか」

ライリ「もう。子供じゃないんだから大丈夫よ」

フェリクス「アルミン兄さんは本当に過保護だな」

アルミン「馬鹿やるー！ライリが可愛いと思わないのか！」

アルミンはかなり大きな声で言った

ライリ「アルミンお兄ちゃん。ここ集会所だから」

アルミン「ごめんな。よし、じゃあお兄ちゃんは行ってくる」

アルミンは今日ハンターランクを上げるテストがある。

フェリクス「ライリ。今日は友達と一緒に狩る予定だが来るか？」

ライリ「そうね。私は用事が無いから行くわ」

謎の人物「あ！フェリクス！こっちよ」

ライリ「あれが友達？」

フェリクス「ライリは初めてか。あいつの名前はシミカだ」

シミカ「？隣にいるのは誰」

ライリ「私はライリよ。フェリクスお兄ちゃんの妹」

シミカ「ああ！話に聞いているよ。アルミンさんに大切にされてるんですよ？」

ライリ「フェリクスお兄ちゃん。何を言ったのよ」

フェリクス「テキストに話した。というかアルミン兄さんが話したから」

ライリ「はあ。アルミンお兄ちゃんは止められないわね」

シミカ「でもアルミンさんが居ないのは残念だな」

ライリ「？アルミンお兄ちゃんが居ないほうがいいと思うけど」

シミカ「何を言ってるのよ。あの美しいボディ。そして絡んだら最高じゃない」

ライリ「・・・？」

フェリクス「ライリ、言いにくいがシミカは世間で言う腐女子ってやつだ」

ライリ「フェリクスお兄ちゃん。そんな趣味があつたんだね」

ライリの冷たい視線がフェリクスにいく

フェリクス「いやいや。勘違いするなよ。シミカが急に目覚めたんだ」

ライリ「シミカはフェリクスお兄ちゃんを、どう思ってるの？」

シミカ「（直球で聞いてきた）まあ、カスね。絡んでもつまらない」

ライリ「（フェリクスお兄ちゃんて妄想は、したようね）」

フェリクス「・・・いいから、クエスト行こうぜ」

シミカ「もう受注したから行きましようか」

（竜車の中）

シミカ「はあ、いいわね。もつと頑張つてよ」

シミカは意味が分からない夢を見ているようだ。（夢の内容のイメ

ージは各自でよろしく）

ライリ「zzz」

フェリクス「皆寝るなよ。暇だな」

フェリクスは気づいた

フェリクス「男が俺しかいないな。しかも女達は寝ている」

フェリクスも年頃の男の子だ。

フェリクス「あー。何を考えてるんだよ。俺も寝るか」

そしてフェリクスも寝た。

ライリ「もう話したくないんだけど」

シアン「駄目だよ。面白いのは、これからじゃん」

トアスク「頑張れ。今はこれしか言えないな」

ナチャ「ライリがいじられるの珍しいな。(結構いいかもな)」

ライリ「!? ナチャの馬鹿!!!」

パツシーン

ライリの平手がナチャの頬を叩いた。

クレス「ナチャがダウンしましたね」

ナチャは動かない

ライリ「いいきみよ。じゃあ話の続きね」

第33話 ライリの過去3rd（後書き）

ナチャ「作者は何がしたいんだよ」

ツヤガ「作者はこの小説は前置きみたいに考えてるから」
ナチャ「え！？なにそれ」

ツヤガ「この小説で色々書き方などを練習して次回作に備えてるのよ。だから色々なキャラを書いてるの」

ライリ「だからって腐女子を出さないですよ」

ツヤガ「ちょうど良かったので出したんです」

ナチャ「いつか。ホモとか出るのかな？」

ツヤガ「あれ？ナチャはホモが好きなんですか？」

ナチャ「いや。推測だからな。好きでは無い」

ツヤガ「じゃあ私みたいな女性が好きなの？」

ナチャ「ちよ。近いって」

気づく、ナチャは。

全員「ジ〜〜」

ライリが怒りの目をしている

クレスは心配そうな、困った顔して見ている。

トアスクは完全に冷たい目線だ

シアンは笑いを堪えている

ツヤガ「ふふ。計画通りね」

ツヤガは楽しそうだ

ナチャ「ふざけんなよ・・・」

ナチャは鬱になりそうだ

ツヤガ「そうそう。私の服装はスカラー装備の一式よ。スカラー装備は3rdに出てくる装備ね。確認したい人は確認して。ではまた次回に ノシ」

第34話 ネットを思い付くのに時間が大量に掛かった（前書き）

ツヤガ「タイトル通り時間が掛かりました。多分、もう腐女子なんて書きません」

ナチヤ「まあ難しいよな。この小説、年齢制限も無いから」

ツヤガ「ナチヤが意味分からないこと言いましたが始めます」

ナチヤ「いや。酷くない？正論だったよな」

ツヤガ「では ごゆっくり お読みください」

第34話 ネットを思い付くのに時間が大量に掛かった

〔沼地【昼】〕

フェリクス「普通に寒いな」

ライリ「洞窟だからって寒すぎるわよね」

シミカ「あ！あれかな」

今回の敵は赤いフルフル。フルフル亜種だ

フェリクス「よし。お先に」

フェリクスがフルフルに突っ込んだ

ちなみにフェリクスとライリは父親であるサバレに憧れて太刀を使っている。だがアルミンはガンランスを使っている

シミカ「二人とも気をつけてね」

シミカは遠距離で弓を使っている

ライリとフェリクスでフルフルに攻撃をしたがフルフルも負けじと体内電気をしてきた

フェリクス「よっと」

フェリクスとライリは切り下がりで避けた

シミカ「流石兄弟。回避タイミングぴつたしね」

シミカは的確にフルフルの頭を狙っていた

ハンター達によってフルフルは追い込まれていった

ライリ「今頃怒ったって無駄よ」

フェリクス「通常の三倍速じゃないのか」

シミカ「何を言ってるの？」

フェリクス「なんでもない」

フルフルは遠くから攻撃するシミカに向かって電撃を放った

シミカ「そんなもの。って、きゃあ」

シミカは足下が濡れていて転んでしまった。そして電撃が直撃した

シミカ「うご・・けない」

シミカは必死に動こうとするが痺れて動けなかった

ライリ「危ない！」
フルフルがチャンスだと感じシミカに電気のしかかりをした
シミカ「・・・」（一発くらいなら耐えられるかも）
シミカは望みの薄いことを思っていた
フルフルは完全にシミカを捉えて、のしかかった
しかし、そこに獲物はいなかった
フェリクス「ふう、危なかったな。大丈夫かシミカ」
シミカ「・・・って！何すんのよ！」
シミカは赤面だ
フェリクス「何って。助けたんだろぅがよ」
シミカ「ち、ち、ち違う！フェリクスが今やってることよ！」
フェリクス「？お姫様だっこだ」
フェリクスは特に気にしていない
シミカ「早く。下ろしなさいよ！」
フェリクス「ああ。悪いな」
シミカ「（恥ずかしい。特にフェリクスの妹のライリがいるのが更に酷くしているよ）」
フルフルはフェリクスにムカついたらしく、のしかかりをしてきた
フェリクス「よし。きめるか」
ライリ「私も手伝うわ」
フェリクスは攻撃を避け、ライリがフルフルの足に攻撃をした。その結果フルフルは転んだ
フェリクス「まだ完璧では無いがいくぜ！」
フェリクスは大回転斬りを使った
フェリクス「ちっ。まだ無理か」
未完成で上手く力が入らなくてフルフルはまだ死ななかった
ライリ「まだまだね。これで終わりよ」
ライリの縦斬りでフルフル亜種は絶命した
シミカ「は！あの後から戦闘に参加してなかった」
フェリクス「大丈夫か？なんか、いつもと違う感じがするぞ？」

シミカ「え！？だ、大丈夫よ」

ライリ「（フェリクスお兄ちゃんも鈍感ね）」

アルミン「ライリ」。大丈夫だったか？怪我は無いか。何か困ったことは無いか？お兄ちゃんが全て解決してやるぞ。なんでも言ってくれ」

ライリ「とりあえず。うるさいから静かにして」

アルミン「そんなの御安い御用だよ」

フェリクス「何が悪かったんだ？」

ライリ「大回転斬りのこと？」

フェリクス「ああ。なんか力が入らないんだよな」

ライリ「お父さんに聞けば？何かヒントくれるかもよ」

フェリクス「そうだな」

（帰宅）

サバレ「ライリ」。大丈夫だったか？怪我は無いか。何か困ったことは無いか？お父さんが全て解決してやるぞ。なんでも言ってくれ」
ライリ「とりあえず。アルミンお兄ちゃんと同じ台詞言つの止めてくれる」

ライリ「はあ」。終わりよ」

シアン「親子は息が合ってるね。同じ台詞は、なかなか無いよ」

トアスク「腐女子か。それは嫌な思い出かもな」

ナチヤ「まあ腐女子が絶対悪いってわけじゃないしな。ていうか軽蔑する物じゃないし」

クレス「そうですね。実は私も腐女子なんですよ」

ナチヤ「え！？うそ」

クレス「うそですよ。騙されやすいね、ナチヤは」

ナチヤ「また騙された」

シアン「じゃあ次は誰が話す？」

トアスク「俺が話そうか？」

ナチヤ「じゃあトアスク。よろしくな」

第34話 ネットを思い付くのに時間が大量に掛かった（後書き）

ツヤガ「では問題です。今回、言いたかったことはなんでしょう」
シアン「ライリが太刀を使うこと」

ツヤガ「違います」

トアスク「腐女子キャラは書くのが難しいこと」

ツヤガ「少し合ってるかもしれませんが違います」

ライリ「私の恥ずかしい思い出じゃないの？」

ツヤガ「普通に違います」

ナチャ「フルフル亜種が意外に弱いことだな」

ツヤガ「全然違います」

クレス「作者のイメージが入ってるけど腐女子は本当に好きな人で妄想してもつまらない（絡み）。そしてシミカはフェリクスのこと
がアレだ、ということですか？」

ツヤガ「流石、正解よ。付け加えるなら、これによって腐女子を書くのが途中で止められたから凄いだろと作者が自慢したい、ということね」

ナチャ「凄いか？普通だと思うけどな」

ツヤガ「では次からナチャが小説を書いてくれるようです。よろしく

お願いします」

ナチャ「いや、待てよ。書かないから。普通って言って、ごめん」

シアン「謝っても遅いよ」。番外編でナチャが書いた作品を出そう」

ツヤガ「作者が考えたキャラに作者が作ってる小説を書かせるのは

新しいですね。（私は知らない）じゃあ、採用です」

ナチャ「採用早いな。嫌だからな。やらないからな」

ライリ「あら。ナチャに拒否権は無いわよ。三回目かしら？」

ナチャ「まだ、その設定あるのかよ」

クレス「ナチャ。頑張って期待してるよ」

ナチャ「・・・え。本当にやるの？」

トアスク「まあ良い経験になるだろ。頑張れ」

ナチヤ「いや、え？」

ライリ「まあ、しょうがないから読んであげるわ」

シアン「面白そうだから。読むよ」

ツヤガ「私も読みますよ」

ナチヤ「・・・。もうなんでもいいや」

ツヤガ「本当にやるのか知りません。では また次回に ノシ」

第35話 トアスクの過去3rd（前書き）

ツヤガ「作者が今日ダメ出しされたようです」

トアスク「まあ当然だろ」

ツヤガ「トアスクは出番が無くなるらしいです」

トアスク「え！？ちょ」

ツヤガ「ではごゆっくり お読みください」

第35話 トアスクの過去3rd

トアスク「今回は凄い話さ」

ナチャ「凄い話？なんだそれ」

トアスク「聞いて驚くなよ。俺は幻と言われた古龍 ミラバルカン
を狩ったことがあるんだ」

クレス「え！？あの伝説のミラバルカンですか？」

トアスク「ああ、そうだ。そして驚いたのはクレスだけか」

ライリ「別に驚くことかしら？ミラバルカンは時々クエストにある
じゃない」

トアスク「いや、無いからな。嘘つくなよ」

シアン「まあ私は、あれを狩ったけどね」

ナチャ「あれってなんだ？」

シアン「秘密」。さっ、トアスク話してよ」

ナチャ「(気になるな)」

トアスク「じゃあ話すか」

〔竜車の中〕

竜車では異様な空気が漂っていた。いつもの四人とモンスターを狩りに来ている。だが違うものがある

シナオ「なんか空気が重い・・・」

デイルク「それは相手が相手だからな」

今回のモンスターはミラバルカンだが、このバルカンは何人ものハンターを帰らぬ人にした。

トアスク「大丈夫だよ、皆。バルカンもある程度弱ってるはずだから」

シナオ「そうだぜ。俺達が殺られるわけがない」
クリスト「・・・」

デイルク「じゃあ今回の目標は倒すのではなく、生きるにするか？」
トアスク「それがいいね」

シナオ「いや。バルカンを倒せば俺ら生きるだろ」

クリスト「・・・多分倒せない」

シナオ「じゃあ途中で逃げるのかよ」

デイルク「時には退くことも重用だ。そろそろ着くぞ」

↓決戦場【キャンプ】↓

トアスク「いよいよだな」

デイルク「ミラバルカン。話でしか聞いたことないからな。気をつ
けていこう」

トアスク「ああ」

シナオ「まあ俺が負けるわけないぜ」

クリスト「・・・」

巨大な体。誰も寄せ付けられない赤い鱗。見ただけで発狂する目
古龍 ミラバルカン

トアスク「震えてきたけど武者震いだよな」

デイルク「さあな」

シナオ「バルカン！テメーは俺が倒す」

トアスク「シナオは凄いな」

バルカンは、こちらに飛んできた。全員避け攻撃体勢になった
デイルク&トアスク「はあああ」

ディルクの大剣とトアスクのハンマーがバルカンに当りダメージをあたえた。

シナオ「攻撃は通るらしいな。だったら余裕だぜ」

シナオもバルカンに攻撃をした。クリストは様子を見るように色んな所を撃っていた。調子よく攻撃をしていた四人だがバルカンは余裕だ。

バルカン「ギャグアーン」

バルカンは吼えた

シナオ「ちっ。うるせ」

シナオ達は動けなくなった

ドゴオン

トアスク「!? 皆気をつける。上から何か降ってくるぞ」

クリスト「・・・! 火山岩」

ディルク「なんだと! こいつは自然を操れるのか」

シナオ「考える時間は与えてくれないようだな」

バルカンは空に飛んだ

トアスク「皆、当たるなよ」

全員必死に逃げた

ディルク「なめるなよ!」

ディルクはバルカンが降りてきた時に下にくる頭に、ため3を当てた。そして角を折った

トアスク「よし。怯んだね」

シナオ「次は俺だぜ」

シナオは攻撃をしようとした
だが

バルカンがさつきよりも大きな鳴き声で吼えた

トアスク「これは」

クリスト「・・・」

シナオ「倒せんのかよ」
ディルク「流石、古龍だな」

そこには角を折られた怒りで一杯な真っ赤のミラバルカンがいた

第35話 トアスクの過去3rd（後書き）

ツヤガ「早い段階でミラバルカンを出してしまいましたね」

ナチャ「いつか出るから、いつ出たっていいだろ」

ツヤガ「それもそうですね。じゃあ、いつか消えるからナチャを消したいと思います」

ナチャ「待てー！消すな。主人公だぞ」

ツヤガ「私が主人公で頑張るから心配無く」

ナチャ「いや。やらせないからな」

ツヤガ「なんでもいいですけどね。では また次回に ノシ」

第36話 バルカンがバルバルカーン（前書き）

ツヤガ「前書きって前回のあらすじとか、したほうがいいでしょう
か？」

ナチヤ「別にやらなくてもよくない？前回の覚えてないなら前回の
話を見ればいいだけでしょ」

ツヤガ「さらに毎日投稿してるから覚えてるでしょうね」

ナチヤ「じゃあしない方向で」

ツヤガ「前はトアスク達がミラバルカンに傷を負わせてバルカン
が怒ったところです」

ナチヤ「ん？なんで前回のあらすじ」

ツヤガ「サービス誠心ですよ。そんなのも分からないんですか馬鹿
？」

ナチヤ「な！俺は馬鹿じゃないから」

ツヤガ「どっかのシナオと似てる台詞ね。ではごゆっくり お読
みください」

第36話 バルカンがバルバルカーン

デイルク「くっ、一気に戦況が悪くなったな」

バルカンが怒ったことによりクリスト以外は攻撃が弾かれて攻撃出来なくなっていた

クリスト「・・・多分効いてない」

トアスク「そうだろうな。鱗が硬くなるのは卑怯だ」

シナオ「いや、まだだ」

バルカンが降りてきた。

デイルク「シナオ。まさか教えてもらったアレをやるのか」

シナオ「その、まさかさ。いくぜ！」

シナオは気刃斬りの後、大回転斬りをした。

トアスク「！？普通のが出来る」

シナオ「勢いを落とさず・・・。おらあああ」

シナオは大回転斬りの後に威力を殺さずに太刀を頭の上にやり、斜めにバルカンを斬った

シナオ「よっしゃ。斬れた！」

シナオの一撃はバルカンの顔に傷をつけた

トアスク「なんだ、あの技」

デイルク「この前、少し間居なかっただろ。その時にある人に教えてもらった技だ。だが出来る奴は多分シナオが初めてだ」

トアスク「出来るのが初めてなのがシナオ？矛盾してないか」

デイルク「まあ話は後だ」

バルカンは角を折られ顔に傷をつけられ激怒した

トアスク「また隕石みたいのが降ってきたね」

トアスク達は二度目で当たることは無いが上手く避けられない

クリスト「・・・また飛んだ」

バルカンは空に飛び火球をうってきた

デイルク「危ないな」

シナオ「余裕。余裕」

そしてデイルクは降りてくるバルカンに攻撃をしようとした
クリスト「・・・！危ない」

クリストが久しぶりに大声をだした。だがデイルクは攻撃を止める
ことは出来なかった

ドゴオン

シナオ「デイルク！」

バルカンは降りてくると見せかけ低空飛行で火球を放ってきた。デ
イルクは避けられず直撃した

クリスト「トアスク。シナオをよろしく」

クリストは吹っ飛んだデイルクのところに急いだ

シナオ「・・・おい。テメー絶対に許さねえからな」

シナオは完全に怒っている。そしてバルカンは人語が分かるわけが
なくシナオに地上から火球を放ってきた

シナオ「うおおお」

シナオは火球をギリギリで、かわしバルカンの頭に攻撃をした

トアスク「無茶な戦い方を」

バルカンは足下にいるシナオを前足で殴ってぶっ飛ばした

トアスク「シナオ！」

シナオはさっきの攻撃で怪我をして血を流したが、シナオは直ぐに
立ち上がりまたバルカンに攻撃をしようとした

クリスト「大丈夫？デイルク」

デイルク「ヤバイな。一発でこのダメージか」

デイルクは火傷と打撲と流血が酷かった。幸い骨折はしていなかった
クリスト「・・・」

クリストは無言のまま回復薬を渡した

デイルク「すまないな。バルカンはシナオ達が引き付けてるのか？」

クリストは首を縦に振った

シナオ「おらあああ」

トアスク「シナオ！闇雲に攻撃しても無駄だ」

バルカンはまたシナオを前足でぶっ飛ばした

シナオ「なめんなよ！」

シナオは太刀だが無理矢理ガードした。そして後ろに大きく下がった

トアスク「！！！」

シナオ「やばっ！」

バルカンは後ろに下がったシナオに火球を放とうとしていた。無理矢理太刀でガードしたシナオは少しの間動けなかった

第36話 バルカンがバルバルカーン（後書き）

ツヤガ「またまた番外編のネタですね」

トアスク「いや」。作者代理がそれを言っちゃ駄目でしょ」

ライリ「別にこの小説ならいいわよ。作るの作者だし」

シアン「トアスクの話は長くなりそうね」

ツヤガ「そうですね。もしかしたら、あと二話くらいしますね」

ナチャ「なあツヤガの口調が変わりすぎなんだけど」

ツヤガ「私の口調は気分だから。なんでもいいの」

トアスク「楽だな。では次回は頑張ってバルカンを倒したいと思

います（紳士的に言った）」

シアン「じゃあ最後は役目の無かったクレス。どうぞ」

クレス「あ、はい。では また次回に ノシ」

第37話 前回のタイトルは気にするな（前書き）

ツヤガ「流石にバルカンなんで話が長いです」

ナチャ「俺が話すのはいつになるのやら」

クレス「大丈夫だよナチャ。いつか来るよ」

ナチャ「うん。それは知ってるから」

ツヤガ「そういえば前回のタイトルは気分で決めました。それだけです。ではごゆっくり お読みください」

第37話 前回のタイトルは気にするな

デイルク「あの馬鹿！」

トアスク「うおおお」

キーン

トアスクはハンマーでバルカンの頭を下から上に思いっきり殴った。しかし硬化していたバルカンに弾かれた。だが、このおかげで火球の軌道がずれてシナオに当たらなかつた

トアスク「っ、手が痺れた。シナオ！馬鹿なんて言われたくないなら、さつきまでの自分の行動をよく考える」

バルカンは邪魔をしたトアスクに前足で攻撃をした

トアスク「ちっ」

トアスクは、なんとか攻撃を避け距離をとつた

シナオ「・・・（さつきまでの俺の行動）」

デイルク「ふ。馬鹿がいくら考えたって馬鹿だろ」

シナオ「デイルク！平気か」

デイルク「俺は平気だ。それよりお前の方が重症だ」

シナオ「・・・」

クリスト「・・・またメテオくるよ」

全員避け攻撃体勢になつた

シナオ「よし。分からない！俺がいくら考えたって分からない。だつたら馬鹿と言われてもいいから俺が思うようにいくぜ」

トアスク「分かつてるよな」

だが全員バルカンにダメージを与えられなかつた

デイルク「！！皆、今気づいたがこいつにダメージを与える方法がある」

トアスク「どうするんだ」

逃げながら会話をしている

デイルク「剥ぎ取りの時、切れ味がそんなに良くない刃物使ってる

だろ」

トアスク「まさか相手の鱗と鱗の間の隙間を狙うとか言わないよな」
デイルク「そのまさかだ。出来れば、弾かれないでいける」

シナオ「今はやるしかないな」

だが簡単なものではなく、なかなか成功しない

クリスト「・・・」

バルカン「ウギャオン」

トアスク「バルカンが怯んだ！」

シナオ「流石クリスト。よく当たるな」

クリストの弾は狙い通り当りダメージを与えた

トアスク「！鱗が剥がれている」

クリストが隙間に撃った弾は撤甲榴弾で爆発して鱗を取っていた

シナオ「クリストに出来たなら俺にも出来る！」

デイルク「こいつら化け物だな」

クリストとシナオはバルカンの鱗の間を上手く攻撃していた

トアスク「デイルク！クリストがバルカンの鱗を剥いだよ」

デイルク「！本当だな。じゃあ俺達は、これを狙うか」

四人のハンターがバルカンを追い詰めていく

シナオ「これならいける！」

だが世の中甘くない

トアスク「まだ怒るか」

バルカンは怒りが最高潮に達した

クリスト「・・・早い」

さつきより、攻撃がかなり早くなった

トアスク「気を付ける！」

メテオが降ってきた

デイルク「！！トアスク避ける」

バルカンはトアスクに向かって空中から突っ込んできた

トアスク「なに！」

トアスクはメテオから避けるのに精一杯でありバルカンの攻撃を避

けられなかった。だがトアスクの横から誰が来た

クリスト「・・・」

トアスク「クリスト！」

クリストはトアスクをぶっ飛ばしバルカンの攻撃をヘビィボウガンでガードした。しかしガードしきれず後ろに吹っ飛び岩に叩きつけられた

デイルク「シナオ！」

シナオ「分かってる」

トアスク「頼んだ。二人とも」

デイルクとシナオはバルカンを引き付けトアスクがクリストの所に急いだ。トアスクがクリストの所にいくとクリストは既に立っていた。だが怪我はデイルク位酷い

トアスク「クリスト。大丈夫か？」

クリスト「・・・大丈夫」

トアスク「なんで俺を？」

トアスクは申し訳なさそうに言った

クリスト「・・・仲間」

それだけ言っただけクリストはバルカンのもとに行った

そして四人のハンターと一匹のモンスターは死闘を繰り広げていた
トアスク「はあはあ」

ハンターは全員息がきれている。バルカンも傷だらけである。

第37話 前回のタイトルは気にするな（後書き）

（女子の会話）

シアン「最近出番が少な〜い」

ライリ「そういえばナチヤが出過ぎじゃない？」

クレス「確かに、そうですね。補正でしょうか」

シアン「ツヤガ何か知らないの？」

ツヤガ「作者が主人公らしくするために沢山だしてると思ってますよ」

ライリ「ナチヤが主人公って今も疑問よね」

クレス「シアンさんが主人公の方が面白そうですね」

シアン「そうだね。今からナチヤを消そうか」

ツヤガ「だったらナチヤに何か力をつけますか？」

ライリ「まあ特別な力があるなら主人公らしいわね」

シアン「よし。ナチヤは夜になるとリオレウスになるって、どう？」

ツヤガ「色々めんどくさいので駄目ですね」

クレス「話が変わるんですがナチヤが書く小説はあるんですか？」

ツヤガ「今頑張ってるわよ。多分」

ライリ「ナチヤのことだから変な小説でしょうね」

シアン「そうだね〜。全く期待しないよ」

ツヤガ「じゃあ、そろそろ終わりでもいいですか？」

シアン「うん。いいよ」

全員「では また次回に ノシ」

第38話 古いドラゴン（前書き）

ツヤガ「今回でトアスクの話が終わります。つかれました」

ナチャ「それは連続で書けば疲れるな」

ツヤガ「ナチャも小説書くから頑張ってね」

ナチャ「いや。マジでやるのかよ」

ツヤガ「本気ですよ。ではごゆっくり お読みください」

第38話 古いドラゴン

トアスク「体力ありすぎ」

ハンター達は疲労がピークに達していた

シナオ「トアスク！」

トアスクはバルカンの前足の攻撃を喰らった

デイルク「くっ」

バルカンは助けに行かせまいと咆哮をした

トアスク「酷いな。！！メテオか」

トアスクは、なんとかメテオを避けた

クリスト「・・・」

デイルク「喰らえ！」

クリストが頭を狙い、デイルクは鱗が剥がれた場所を切った

シナオ「よし。怯んだ」

トアスク「俺も活躍しないと」

トアスクはバルカンの足に回転しながらハンマーで殴った。遠心力

がついた、この攻撃は弾かれるのを無効にして攻撃した

デイルク「！！シナオ」

シナオ「分かっているぜ。これで終わらせる！」

トアスクの攻撃でバルカンが転び頭がシナオの前にきた

シナオ「スーパーハイパーシナオ究極斬り！」

バルカンの顔に傷をつけた、あの攻撃をした

だがバルカンは死ななかった

トアスク「まだ生きてるのか」

デイルク「シナオの攻撃は、きいたはずだ」

バルカンはさっきの攻撃で、かなりの痛手をおった

バルカン「ドギヤオーン」

クリスト「・・・また咆哮」

トアスク「くつ。体力的に避けられないかもな」

だがメテオは降って来なかった

ディルク「？降ってこないぞ」

そしてバルカンは空に飛んだ

シナオ「！まさか。あいつ逃げるのか」

シナオが台詞を言い終わったと同時にバルカンは何処かへ行ってしまった

シナオ「・・・」

ディルク「・・・」

クリスト「・・・」

トアスク「・・・」

全員、失望というか終わった安心感で無言になった

（帰りの竜車の中）

シナオ「んだよ。あいつ逃げやがって」

ディルク「だが逃げたおかげで助かったな」

トアスク「気づいたけど目標は達成してるね」

シナオ「いや。バルカンを倒してないから駄目だろ」

ディルク「いや。第一目標を生きることだからな。馬鹿」

シナオ「あ！またまた馬鹿って言いやがったな」

トアスク「でも馬鹿って言われてもいいってシナオが言ったんだよね」

シナオ「っ。あのときはあの時。いまは今だ」

クリスト「・・・言い訳」

ディルク「そうだな」

トアスク「よし、終わったよ」

シアン「長い」

トアスク「悪かったな」

クレス「古龍はよく逃げますよね」

ライリ「そうね。古龍達は固体数が少ないから生きることが一番なのよ」

トアスク「あの時の俺らもそうだったな」

ナチャ「両方生きることが一番なら戦わなければ、いいのにな」

シアン「世の中そんなに簡単じゃないんだよ。多分」

ナチャ「じゃあ次は誰が話す？」

クレス「私でいいですか？」

シアン「よし、じゃあクレス。どうぞ」

クレス「今回の話はナチャに会う前の話ですね」

第38話 古いドラゴン（後書き）

トアスク「ミラバルカン。倒したかったな」

ナチヤ「そういえばミラバルカンのクエストをよく受けられたな」

トアスク「ああ。あれは強いハンターが皆クエストに行つてて、俺達が一番強かつたんだよ」

ナチヤ「まあトアスク達は強い分類に入るけどな」

トアスク「そうだね。でも俺達より強いハンター達があミラバルカンに殺られてたから心配だったよ」

ナチヤ「お疲れだな。じゃあもう終わらせるか」

トアスク「そうだね。では」

ナチヤ「また次回に」

ナチヤ& amp ;トアスク「ノシ」

第39話 クレスの過去3rd（前書き）

ツヤガ「クレスの過去の話ですね。では、ごゆっくりお読みください」

第39話 クレスの過去3rd

謎の人物「えっと、何をすればいいんだろ？」

謎の人物こと、クレスは困っていた

クレス「まず素材ツアーかな？」

今のクレスはハンターになって一週間も経っていない

謎の人物「クレス」

クレス「!？」

直ぐに後ろに振り向いた

クレス「なんだ」。ケミ姉さんだったんだ」

ケミ「何よ。私で悪かった？」

クレス「いや。少し悪いかな」

ケミ「意外と酷いわね。ていうか、なんで一緒に行かないのよ」

ケミはクレスの近所の人でクレスより2つ年上だ

クレス「えっと、それは・・・」

ケミ「?。まあいいよ、今日は何を狩りに行くの」

クレス「(やつぱり何かを狩らなくてはいけないのかな?)」

クレスは、泣き目だ。ケミはクレスよりハンターを早く始めて最近

調子が良くモンスターを狩りたい。クレスは素材ツアーなどで場所

の確認などをした。二人とも意見が逆であるがケミの方の意見が

無理矢理決定される。流石、姉さん

クレス「クッククでいい？」

ケミ「え。またクック」

クレス「じゃあババコンガでいい？」

ケミ「またババコンガ」

クレス「私はまだ、その二匹しか狩ったことないんだけど・・・」

ケミ「知ってるよ。でも一匹忘れてる」

クレス「・・・。あ!ダイミョウ」

ケミ「またダイミョウ」

クレス「文句ばっかり言うならケミが選んでよ」

ケミ「じゃあ強すぎると危険だからババコンガで」

クレス「さっき言ったじゃないですか（泣）」

ケミ「あー！こら。敬語は使っちゃ駄目でしょ」

クレス「うっ」

ケミは何故かクレスが敬語で話すのが嫌いであり、クレスに敬語を使うことを禁じている

ケミ「よし。じゃあ行こうか」

ナチャ「ケミなんて奴、俺は知らないんだが」

クレス「はい。ナチャには話してませんね」

ナチャ「ていうか引越して来る前の過去を聞いてなかったな」

クレス「話す必要も無いのでいいんじゃないですか？」

シアン「甘いよ、クレス！」

クレス「？」

シアン「好きな人にはすb（ry）」

トアスク「はいはい。シアン退場な」

ライリ「トアスク、そんなことして平気なのかしら？」

トアスク「え？俺は正論を言っただけじゃ・・・」

シアン「トアスク。頭痛くなるまで酒を飲めー！！」

トアスク「ちよ」

グピグピ

シアンに無理矢理飲まされた

シアン「私も飲もう！」

全員「それは駄目！」

グピグピ

シアン「よっしゃ。盛り上がってきたねー！」
ナチヤ「やっちゃったな」

第39話 クレスの過去3rd（後書き）

ツヤガ「テキストな所で終らせちゃいましたね」

ナチャ「いや、どうにかしろよ」

ツヤガ「そういえば新しい小説を投稿しました」

ナチャ「流した」

ツヤガ「自分の小説なんで勝手にコラボします」

紐「え？いいの」

ナチャ「いやいや。来ちゃ駄目ですよ」

シアン「紐？変な名前ね」

紐「初対面からキツイこと言うな」

ツヤガ「あ！言うの忘れてましたがキャラ崩壊するかもしれないからね」

トアスク「それは無い気がするが・・・」

クレス「小説を読んで来ましたが弾が出てませんね」

紐「そうなんだよな。なんで出ないんだろ」

シアン「貸して」

紐「え！？まあ、いいけど」

バン、バン

ナチャ「ちょ！危な」

シアン「普通に出るじゃん」

紐「なんでだ？」

ツヤガ「ネタバレは止めて下さいよ」

トアスク「弾を入れたら出るんじゃないのか？」

紐「いや、入れる所が無いんですよね」

シアン「面白ーい」

ナチャ「危ないから！止めるよ」
ライリ「私も撃たせて」

カチッ

ライリ「？出ないわね」

ナチャ「なんで俺が的なんだって」

クレス「私も出ませんね」

トアスク「俺もだな」

ツヤガ「私は出ますよ」

ナチャ「怖いって」

紐「ナチャって大変なんだな」

ナチャ「そうなんだよな。龍もキャラが増えたら気をつけな。これ

は先輩からのアドバイスだ」

紐「龍って百花だけしか言わなかったニックネームですよ」

ナチャ「まあ主人公だから」

ツヤガ「長くなりましたね。では また次回に ノシ」

クレス「そういえば、これは宣伝ですか？」

ツヤガ「まあ、そうかな。でも言っちゃ駄目だよ」

第40話 急に作ったからキャラが定まってない(前書き)

ツヤガ「前はババコンガをクレス達が狩りに行く所でしたね。ではごゆっくり お読みください」

第40話 急に作ったからキャラが定まってない

ナチャ「このあと、どうする?」

シアンが暴走したことにより店から追い出された

ライリ「本人は楽でいいわね」

シアンはトアスクの背中では寝ている

クレス「シアンさんの寝顔って子供ですよね」

トアスク「言っちゃ駄目だよ。シアン怒るから」

ライリ「そうだ!海に行かない?」

ナチャ「俺は、どこでもいいよ」

クレス「私もです」

トアスク「俺もだ」

ライリ「じゃあ海に行きましょう」

〈移動〉

トアスク「シアンは、ここに寝かしても平気かな?」

ナチャ「大丈夫だろ、シアンだったら」

ライリ「じゃあ話の続きね」

クレス「はい。えっと」

クレス「ババコンガって臭いやつだよな?」

ケミ「そうよ。あとハンターなんだからモンスターくらい知ってな

きゃ
「
クレス「まだ私は初心者」

そんなこんなで密林

ケミ「いつ見ても殴りたくなる顔ね」

ババコンガはケミ達に気づいて戦闘モードになった

ケミ「臭くならないように気を付けてね」

クレス「だから初心者は無茶言うな」

ケミ「あら？無茶だったかしら」

ババコンガはケミに突進してきた

ケミ「余裕余裕」

ケミはガードした。そして竜撃砲を放った

ドゴオン

ババコンガのピンクの毛が焼け焦げた

クレス「いきなり怒らせないでください」

ケミ「だから敬語は駄目！」

ババコンガとクレスに砲撃を当てた

クレス「！酷い」

クレスは直ぐに立ち上がり片手剣で攻撃をした

ケミ「（やっぱりね。クレスはハンターの才能がある）」

クレスはババコンガの攻撃をギリギリで避け攻撃を確実に当ててい

っている

ケミ「流石。我、妹ね」

クレス「褒めてないで攻撃してよ」

ケミ「任せなさい。終わらしてあげるから」

クレス「？いくらなんでも早くない」

ケミは竜撃砲をまたババコンガに撃った

ケミ「これは特注品のガンランスだからね、こんな使い方も出来るの」

ケミはガンランスをババコンガに叩きつけた

クレス「？何をするつもり」

ケミ「いくわよ。フルバースト！！」

クレス「きゃ」

竜撃砲にも劣らない爆発が起こった

シューッ

クレス「ババコンガが焼け死んでる」

（上手に焼けました〜！）

ケミ「まあこのガンランスが強いから倒せたんだけどね」

クレス「なんでもいいから。帰ろうよ」

ケミ「そうね」

トアスク「フルバースト使えるガンランスか。珍しいな」

ナチャ「俺は全然知らなかったな」

クレス「私はあれ以降いつぱい見せられたんです」

ナチャ「そういえば、クレスはライトボウガンを使ってなかったけ
？」

クレス「そのころは片手剣で色々慣れようとしてましたから片手剣です」

ナチヤ「引越してくる時にライトボウガンに変えたのか？」

クレス「そうなりますね」

ライリ「ケミって強引な人ね。誰かとそっくり」

ナチヤ&トアスク「（ああ。ライリとシアンにそっくりだ）

」

クレス「次は誰が話ます？」

ナチヤ「シアンが寝てるし俺が話すよ」

ライリ「シアンは起きなそうね」

トアスク「もし、ナチヤの話が終わっても起きなかつたら飛ばすか」

シアン「ヤッダ〜。むにゃむにゃ」

クレス「寝言ですね」

ナチヤ「紛らわしいな。じゃあ話すか」

第40話 急に作ったからキャラが定まってない(後書き)

ツヤガ「事情により次回から番外編です」

ナチヤ「まさか」

トアスク「ようやく、ナチヤの小説か」

ナチヤ「いや、本当に止めない？作者、自分の首を絞めてるよ」

ツヤガ「大丈夫ですよ。問題ありません」

ナチヤ「何を根拠に？」

ツヤガ「紐。銃貸して」

紐「？、ほい」

ナチヤ「危ないから。止めてくれ」

シアン「なんで私は寝てるのよ」

クレス「わかりませんね。何か意味があるのでしょうか？」

ツヤガ「あ、それは意味が無いわよ。なんとなく寝かしたらしいよ」

シアン「作者、変態ね」

トアスク「別にそういう意味じゃないだろ」

ツヤガ「長くなると、いけないからこころ辺でね。では また次回
に ノシ」

第41話 番外編 前の話さ（前書き）

ツヤガ「今回は第25、26、27話の戦いで書けなかった物の番外編です。忘れた人はもう一度見るのをオススメします」

ナチャ「正確に言うと番外編のために残したんだよな」

ツヤガ「言わないでよ。ナチャの馬鹿！ ふん。もう知らない」

ナチャ「！？誰！あんた、だれだ！」

ツヤガ「キャラを変えただけです。では ごゆっくり お読みください」

第41話 番外編 前の話さ

ツヤガ「今回は番外編です。前書きに色々と書いてあるので読んで下さいね」

ナチヤ「・・・」

一人で何もすることが無くボーっとしている。骨が折れて痛いが気にしない（作者的な意味も含めて）

ナチヤ「そういえばクレスを見たとき・・・」
過去を振り返った

ナチヤ「ヤバイな。考えるすぎるとクレスを直視出来なくなりそう」
恥ずかしいことを言っていたら

クレス「ナチヤ」

ナチヤ「帰ってきたな。!?」

スキラとメライから血が流れたのを見て驚いた

ナチヤ「何があっただんだ？」

スキラ「いや」。あのティガ特別だったらしくてさ」

メライ「起こったことを話した方が早いね」

「ちょっと前」

メライ「なかなか手強い」

ティガは二人の攻撃を充分に受けていたが一向に弱らない

スキラ「だが俺達が有利なのは変わらない！」

スキラのスタンプがティガの頭にヒットした。ティガは怯んだ

メライ「？スキラ気を付けて！」

スキラ「何をするつもりだ!？」

ティガは大きく息を吸ったと思ったら、通常の何倍もの咆哮をしたスキラ「。。。」

スキラは言葉さえ発することが出来ず吹っ飛んだ

メライ「スキラ!！」

メライがスキラに近寄った

スキラ「いてて。なんだあれ」

スキラは、かなりのダメージを受けた

メライ「私の記憶が正しければ、あれはティガレックス亜種の大咆哮よ」

スキラ「何故に、このティガが?」

メライ「分からない。でも気を付けなきゃね」

スキラとメライはティガの左右に別れて体制を整えた

メライ「(もしかしたら、このティガレックス)」

ティガはメライに突進をしてきた

メライ「避けれるよ」

避けた後ティガを殴った

スキラ「!?おい、なんだあれ!」

ティガは前足で上半身をあげて突進をしてきた

メライ「これは!」

だがメライは気づくのが遅かった

ティガ「ドギャーオ」

メライもティガの咆哮で吹っ飛んだ

スキラ「メライ!」

メライ「だ、大丈夫よ」

見た目はとても苦しそうだ

スキラ「・・・テメー。生きて帰れると思うなよ」

スキラの口調が変わった。ティガはそんなのお構い無しにトドメの突進してきた

スキラ「見せてやるよ!」

笛では、やらない構えをした。野球のバッターのような構えだ
メライ「何をするの!？」
スキラ「ホーームーランだああ!」

ポツグユ

ティガの巨体が少し浮いた
メライ「ティガが浮いた・・・」
スキラ「へ!ナメんなよな」
だがティガは直ぐに体勢を立て直した

メライ「そしたらクレスが来たの」
クレス「そうだったんですか」
スキラ「しかも、あいつ最後の突進でも通常じゃあ、やらない動き
をやってきたしな」
メライ「突進を急に止めて数歩下がったあれね」
ナチャ「そんな行動するんだ」
クレス「ナチャ。そういえば怪我は平気なの?」
ナチャ「まあ、大丈夫だよ。痛いけどな」
通常では、あばら骨折れたら痛くて我慢出来ません
メライ「とりあえず急いで帰りましょうか」

第41話 番外編 前の話さ（後書き）

ツヤガ「次回に続きます。何を書くのか、あんまり決まってないの
で、書けるか心配ですね」

トアスク「じゃあ書かなければいいのにな」

ライリ「人は、やらなくてはいけないものがあるのよ」

トアスク「？関係あるのか」

ツヤガ「トアスクもライリの言葉にいつか気づくよ」

トアスク「？」

ナチヤ「あー！何も思いつかない！」

クレス「大変そうですね」

シアン「主人公になると大変よね。本当に」

ツヤガ「さあ、ナチヤはどんな小説を書いてくれるのか！？では

また次回に ノシ」

第42話 番外編 ナチヤの気持ち（前書き）

ツヤガ「また番外編ですね。恐らく、この一週間はずっと番外編です」

ナチヤ「何をやりたいんだよ」

ツヤガ「まあ気にしないでください。ではごゆっくり お読みください」

第42話 番外編 ナチヤの気持ち

ナチヤ「・・・」

帰りの電車の中でメライとスキラは疲れてるのが寝ている。クレスはナチヤが心配で頑張っで起きようとしてるが、うとうとしているナチヤ「（なんだろ、この気持ちは。なんかクレス見るとアレなんだよな）」

よく分らないことを考えていた

クレス「ナチヤ。一人で大丈夫でしゅか？」

眠たくて口が回らない

ナチヤ「ああ、大丈夫だよ。だから寝な」

クレス「そうしましゅ」

ナチヤ「寝たな」

これで起きてるのはアイルーとナチヤだけになった

アイルー「そこの起きてるお兄さん」

ナチヤ「？俺か」

アイルー「あんた以外いないにや」

ナチヤ「そうだな。で、なんだ？」

アイルー「あんた、さっき話してた子は彼女ですかにや？」

ナチヤ「いや、違う。彼女ではない」

軽くパニックになっている

アイルー「ふむ。じゃあどう思ってるのかにや？」

ナチヤは、このアイルーなんなんだ？と思いつながら、特に何も無いと言った

アイルー「お兄さん、嘘は、いけないにや。実は私は心理学などをちよつと深い所まで勉強したにや」

ナチヤ「はあ。それで何か？」

アイルー「私の予想では貴方は、その娘さんに恋をしています！どこから持ってきたか知らないが眼鏡をかけてシャキーンというB

G Mが掛かりそうな動きをした

ナチヤ「・・・」

アイルー「まあ、この後の行動は自分で決めてくれにゃ」

ナチヤ「・・・（恋か。そうなのか？この気持ちか？）」

自問自答を繰り返して帰ってきた

メライ「またいつか会えるといいね」

スキラ「今度会ったら食事しようね、女神！」

メライ「ス〜キ〜ラ」

スキラ「うぎゃー！」

ナチヤ「あいつら、いつもあんな感じだな」

クレス「ほら、そんなこと言ってないで早く病院に行こ」

クレス「全治3ヶ月だつて」

ナチヤ「3ヶ月も狩りに行けないのか」

クレス「大丈夫ですよ。私もいるから」

ナチヤ「・・・なあクレス」

クレス「？」

ナチヤ「なんで俺と一緒に行動してくれるんだ？俺は初対面の時あれほど、やらかしたのに」

クレス「何を言ってるんですか。ナチヤと一緒に居たいから居るんです」

ナチヤ「・・・？」

クレス「確かに初対面はふざけたかもしれませんが、その後何度も謝りに来たじゃないですか」

ナチヤ「ああ、確かにな。（ナンパ感覚でやってたよな）」

クレス「まあ、それだけじゃありませんけど」

ナチヤ「なんかやつたけ？」

クレス「色々ありますよ。調合教えてくれたり、モンスターの情報とか色々」

ナチヤ「そうだったな。(あの頃頑張ってたな、俺)」

クレス「だから、そういう所に優しいところに惚れ・・・じゃなくて憧れてたんです」

ナチヤ「そっか。俺にも良い所あるんだな」

クレス「いっぱいありますよ。例えば・・・」

この後二人で話をした

ナチヤ「クレス。寝たな」

クレスはナチヤと話していると、だんだん体が傾き寝た

ナチヤ「俺の優しい所か」

まだ考えていた

ナチヤ「でもこの気持ちは恋とかじゃ無い気がするんだよな」

ナチヤは結局答えを出せずにいた

ナチヤ「〜」。クレスの寝顔」

クレスの顔は腕を下敷きにしてナチヤの方に向いている。ナチヤは何を思ったか。頬つぺたをつついた

ナチヤ「柔らかいな。って」

自分が今やってる行動が恥ずかしいと思いつめた

ナチヤ「！分かったかもな」

何かに納得したようだ

ナチヤ「よし。分かったということで俺もお休み」

そしてナチヤも寝た

第42話 番外編 ナチヤの気持ち（後書き）

ツヤガ「今回の話の最後は別に手抜きつてわけじゃないですよ」

紐「まあナチヤは結局何も分からないから、諦めたんだろ」

ツヤガ「そうだよ。流石、紐。小説更新してないけど」

紐「いや、しようよ」

トアスク「どうだいナチヤ？」

ナチヤ「？トアスクか。いや今話が浮かびそうなんだ」

トアスク「頑張ってるね。悪い作品だとシアン達にお仕置きされるよ」

ナチヤ「大丈夫だ。問題ない。俺は頑張ってお仕置きを回避する」

ライリ「ねえツヤガ」

ツヤガ「？何」

ライリ「私にもナチヤとフラグ立ててよ」

ツヤガ「キャラが言っちゃ駄目ですよ」

シアン「でも難しくない？」

クレス「確かに、過去ではライリさんはナチヤに会ってないですよ
ね」

ツヤガ「あまいよ、皆。ナチヤが死んだ後、この世界に来たね。その後の行動は書いてない」

ライリ「じゃあ、そこで初めて会った時の話をするのね」

ツヤガ「そうなるかな」

シアン「じゃあ私たちの出会いも書かなきゃね」

ツヤガ「ふふ、大丈夫よ。しっかりと書くから。長くなっちゃたわね。では また次回に ノシ」

第43話 番外編 技か業さ（前書き）

ツヤガ「番外編は楽しいね。なんか楽しいんだよね」

ナチヤ「なんでだ？」

ツヤガ「さあ？私にも分からないわよ」

ナチヤ「あ・・そうなんだ」

ツヤガ「今回はミラバルカンの話の最中に出てきた話の内容です。

確かめたい人は確かめて下さい。では、ごゆっくり お読みください」

第43話 番外編 技か業さ

謎の人物「おい、その若いの！」

シナオ「？俺か」

謎の人物「そうじゃ！分かったなら早く来い！」

ディルク「なんだ、このじいさんは」

じいさん「じいさんでは無い！バルトロメーウスじゃ」

シナオ「バ スだと！？あの名作の言葉か！」

ディルク「何を聞いてんだ、馬鹿が」

シナオ「な！馬鹿じゃねえし」

バルトロメーウス「いいから早く来い！」

ツヤガ「バルトロメーウスだと名前が長いのでメーウスにします。

あとバルトロメーウスは童人の背が小さい人です」

シナオ「どうするか？」

ディルク「面白そうだし。行くか」

シナオとディルクはメーウスについていった

（メーウスの自宅（庭））

ディルク「広いな」

メーウス「お前！何故ついてきた」

メーウスはどこから持ってきたか知らない木刀をディルクに向けた
ディルク「駄目だったか？」

メーウス「これは非常に貴重な技だぞ。それは、もう国宝級じゃ」

デイルク「（技を教えるのか、シナオじゃ無理だな）」

シナオ「マジで！！じいさん流石！」

シナオはおもちゃを買ってもらった子供みたいに騒いだ

メーウス「じいさんでは無いと言っておろうが！」

木刀はシナオの頭をぶった

シナオ「いて！何すんだよ」

メーウス「技を教えて欲しければ師匠と呼ばんか！」

シナオ「はい！師匠」

デイルク「（なんか、シナオに変な影響を与えそうだな、このじいさん）」

メーウス「まずシナオは太刀使いだな」

シナオ「おお！スゲー。なんでわかつたんですか師匠」

メーウス「弟子のことはなんでも、おみとうしじゃ」

自慢気に言ってるがシナオが太刀を担いでいる時点で十中八九、太刀使いである

デイルク「ていうかメーウスは、なんでシナオに技を教えるんだ？」

メーウス「そうじゃな。説明するか」

少し真剣な表情になり二人も緊張した

メーウス「それは・・・」

なんとなくじゃ」

シナオ「いや待てデイルク」

デイルク「何がだ、馬鹿。今この害虫殺すだけだろ」

メーウス「わあわ。止める。年寄りは大切にせんとあかんじゃろ」

デイルク「ちつ。次に、くだらないこと言ったら殺すぞ」

メーウス「（キレるところが、よく分からないやつじゃのう）」

シナオ「で、その技ってなんだ！」

メーウス「弟子よ。鬼刃大回転斬りは出来るかのう？」

シナオ「おう！出来るぜ。見とけよ。スーパーシナオ大回転斬り！
スーパーシナオ大回転斬りをした

メーウス「ちつがう！」

シナオ「なんか駄目だったか？」

メーウス「余分な動きを入れすぎじゃ。あと技の名前が変じゃる！」

シナオ「え、でもカッコいいだろ？」

メーウス「弟子よ。技を覚える気はあるのか？」

シナオ「あるぜ。ばつちしな！」

ディルク「（まあ自分で撒いた種だし、どうにかするだろう）」

メーウス「では、まず普通の鬼刃大回転斬りを習得してもらおう」

シナオ「はい！師匠」

メーウス「よく見ておけ。これが鬼刃大回転斬りじゃ」

鬼刃大回転斬りをした

ディルク「！？凄いな。よくあの老体で」

だがメーウスは技を使った後に倒れた

シナオ「！？師匠ー！」

メーウス「くつ。ヤバイかもな」

ディルク「おい、じいさん。まさか、あんた・・・」

メーウス「そうじゃあ。もう歳だからな」

ディルク「・・・」

シナオ「なんでも言うこと聞くから元気になれよ、師匠！」

メーウス「だったら湿布を持ってきてくれ。いや、やっぱり歳だからやるもんじゃないのう」

ディルク「は？」

メーウス「？只のぎっくり腰じゃが、どうかしたか？」

ディルク「（ぶち殺して）。紛らわしことすんな爺が！」

第43話 番外編 技か業さ（後書き）

シアン「バルトロメウスは私の過去に出てきた、竜人のギルドマスターぐらいの大きさだね」

ツヤガ「そうね。確か、シアンの過去2ndだったかな？」

ナチャ「心配なら確かめれば？」

ツヤガ「めんどくさいから、いいよ。シアンの過去2ndに書いてあります」

ナチャ「（間違ってたらどうすんだよ）」

ツヤガ「じゃあ今日はこの辺で。では また次回に ノシ」

第44話 番外編 シナオの気持ち（前書き）

ツヤガ「最近暑いわね」

ナチャ「まあ夏だからな」

クレス「まだ夏ではありませんよ」

ナチャ「気分的な感じで夏だからいいんだよ」

ツヤガ「ナチャ、もう夏だよ。クレスの珍しいボケを無駄にしたね」

ナチャ「え！？クレスがボケを！」

クレスは顔が赤くなっている

ツヤガ「では ごゆっくり お読みください」

第44話 番外編 シナオの気持ち

シナオ「こうか？」

メーウス「違う！」

シナオ「んじゃ、こうだな」

メーウス「全然なつとらん。もっとシャキッとせんかい」

デイルク「（シナオ、大変そうだな〜）」

気がつくとき技を教えてもらうために三日経っていた

メーウス「鬼刃大回転斬りはあんなに早く修得したのこのう」

シナオはメーウスの命懸け、鬼刃大回転斬りを見て直ぐに覚えた

シナオ「師匠！俺はきつと見れば覚えるんだよ」

メーウス「そうか・・・。じゃあ無理じゃな」

シナオ「！？なんでだよ」

メーウス「この技は修得しづらいらしくなあ。まだ誰も成功してないんじゃ」

メーウスの技は渾身の一撃である大回転斬りからの派生であり、その後の攻撃はどうしても難しくなる

シナオ「じゃあ、もし俺が修得したら俺が一番か！」

メーウス「そうなるな」

シナオ「よし、もつとやる気出てきたー！！」

デイルク「馬鹿は単純でいいな」

だがシナオは練習に夢中で気づかない

メーウス「その、デイルクと聞いたか？」

デイルク「ん？ああ。そうだけど、なんか用か？」

メーウス「お主大剣を使うのか？」

デイルク「ああ。そうだ」

メーウス「では通常の溜め方ではない溜め方を知っておるか？」

デイルク「なんだそれ？」

メーウス「知りたいなら。わしの弟子になることじゃな」

ディルク「いや、絶対に、ならないから」
メーウス「なんじゃ。お主は強くなりたくないのか？」
ディルク「大丈夫だ。あんたが言った通常ではない溜め方を自分で見つけるさ」
メーウス「ほう、面白いのう」
そう言つてシナオの方に行った

（一週間後）

メーウス「うむ。もう、わしの指導は要らないのう」
シナオ「なんでだ？まだ完成してないぞ」
メーウス「技のやり方も教えた。しかもシナオは才能がある。恐らく、わしが居なくても完成するじやろ」
シナオ「でも師匠。技など色々教えてくれたんです。最後まで一緒にやりましょうよ！」
メーウス「・・・甘いこと言ってるでない！！わしにも、わしの事情があるのじや」
シナオ「事情つて、なんですか！」
メーウス「まつ、まあ色々あるのじや」
ディルク「（なんか隠してるな）」
シナオ「・・・」
ディルク「え？なんでマジに落ち込んだの？」
シナオ「師匠、分かったぜ。俺、強くなるよ。そして技が完成したら見せにくるぜ！」
ディルク「何が分かったんだよ！？」
メーウス「ふむ。流石わしの弟子じや」
ディルク「いや、おかしいだろ！？」
シナオ「ディルク、行くぞ！」
ディルク「え？行くのかよ」

シナオとディルクは何処かに行った

（バルカンを撃退後）

シナオ「師匠、出来ました。完成しました！」

メーウス「なんじゃと！？なら早速見してくれ」

シナオ「いきますよ！スーパーハイパーシナオ究極斬り！！」

鬼刃斬り

それだけでも高威力

大回転斬り

体を回転させ遠心力を付けた大技。使ったとき、空気を切る音、さらに風が発生する

究極斬り（シナオのみ）

メーウスが考えだした技で大回転斬りの威力を落とさずにもう一回攻撃をする。空気を切る音、風を生み出す力は大回転斬りを遙かに越える

メーウス「……。流石じゃ。わしの技を完成させるとはのう」

シナオ「今もだけど成功率は大体半分くらいだぜ」

ディルク「！？お前よくあの状況で使ったな」

シナオ「まあな。俺だからさ！」

ディルク「よく分からないな。それよりじいさん、そっいえば、事情ってなんなんだ？」

メーウス「ああ、それはのう」

メーウスの表情が暗くなつた

ディルク「？どうした」

メーウス「あまり話したくないがのう……」

シナオ「……」

ディルク「……」
メーウス「それは……」

なんとなくじゃ」

その時一筋の閃光がメーウスを吹き飛ばした

シナオ「ししょーう！」

メーウス「あいつ。年寄りを大事に……せんかい」

メーウスはディルクから受けたダメージは奇跡的にほぼ無だがぎっくり腰が痛い

ディルク「つたく。シナオ、俺はもう帰るからな」

ディルクは帰った

第44話 番外編 シナオの気持ち（後書き）

紐「なあ、いつ俺のは投稿するんだ？」

ツヤガ「この小説が意外と忙しいのよ。だから更新スピードは、かなり遅いわよ」

ナチヤ「どんまい。まあ投稿されないより、良いだろ」

紐「そうだな。ポジティブにいくか」

ツヤガ「わっと、ムダな情報書いてる場合じゃないね。では また
次回に ノシ」

第45話 ナチヤの過去3rd（前書き）

ツヤガ「この小説はそろそろ終わりかな」

ナチヤ「え！？早くない」

ツヤガ「だって一通りやりたいネタは書いたし、長くなるとめんどくさい」

ナチヤ「いや、頑張れよ」

ツヤガ「大丈夫だよ。次回作はちゃんと、この小説の続きにするから」

ナチヤ「マジで！？やったな」

ツヤガ「主人公は変わるかもね」

ナチヤ「あ！」

ツヤガ「ではごゆっくり お読みください」

第45話 ナチヤの過去3rd

ナチヤ「本当に大丈夫か？」

クレス「大丈夫ですって」

今日は珍しくクレスが風邪を引いた

クレス「だから行ってきていいですよ」

ナチヤ達は前からクエストを予約しており今日が約束の日だった

ナチヤ「いや、断るよ」

クレス「だから、大丈夫ですよ。クエスト断ったら沢山の人困ります」

ナチヤ「でも・・・」

クレス「行け！」

ナチヤ「え？」

クレス「あの時のナチヤのマネです。だから行ってきて下さい」

ナチヤ「・・・、分かったよ。行くさ」

〈集会所〉

受付嬢「ナチヤ様ですね？」

ナチヤ「ん？ああ、そうだけど。何か？」

受付嬢「イャンガルガですが最新情報によると二匹いるようなんです」

ナチヤ「二匹！？一人じゃキツいな」

受付嬢「そう言うと思ってギルドの方で用意しました」

ナチヤ「？誰だ」

受付嬢「直接会った方がいいと思いますので、こちらへ」

そう言うって受付嬢はある部屋に案内した

謎の人物「へ、そうなんだ。まあ、どうにかするよ」

ナチャ「（誰だ、あいつ？）」

背はナチャと同じ位である。ギルドマスターに敬語を使ってないことを見ると恐らく偉い人だろう

謎の人物「？君がナチャかい」

ナチャ「はい、そうです。よろしくお願い致します」

謎の人物「別にそんなに堅くならなくてもいいよ」

ナチャ「えっと、分かりました」

謎の人物「自己紹介がまだだったね。私はコルネスだよ。よろしく」

トアスク「ちよつと待って」

ライリ「トアスクも？」

シアン「私もよ」

クレス「シアンさん、いつ起きたんですか？」

シアン「さつき。トアスクもコルネスが気になっただけでしょ？」

トアスク「ああ。同じ名前だけかもしれないが俺はコルネスに会ったことがある」

ナチャ「!？」

シアン「ちなみに私もよ。ライリもでしょ」

ライリ「ええ、でもおかしいわね」

クレス「そうですね。皆生きてた時代が違うから同一人物に会うわけないですよね」

シアン「私が見たコルネスは右目の下に傷があったはずだけど、皆あつた？」

ライリ「あつたわ。しっかりとね」

トアスク「俺もだ」

ナチャ「俺もだな」

シアン「……。気になるね」
ライリ「とりあえずナチヤの話の聞きかじら」
ナチヤ「ああ、それでだ」

（竜車の中）

コルネス「イヤンガルルガがね。しかも二頭」

コルネスは今ごろクエストの資料を見ている

ナチヤ「なあ、疑問に思ったんだがコルネスは何処かの偉い人なのか？」

コルネス「？なんでそう思ったんだい」

ナチヤ「いや、ギルドマスターに敬語を使ってないし、見た目的に偉い人っぽいしな」

コルネス「まあ、偉いよ。そこら辺のとは比べ物にならないくらい」

ナチヤ「（っ、どんだけだ。こんな人と狩り出来るのかよ）」

コルネス「さ、着いたようだね」

そこには雨上がりの密林が広がっていた

第45話 ナチヤの過去3rd（後書き）

シアン「フラグね」

ライリ「あんまり言わないほうが良いと思うわよ」

シアン「大丈夫だよ。ネタばらしをしなければ、なんでもいいの」

ツヤガ「まあ、なんでもいいよ。一週間番外編をやると言いました
が嘘になりましたね。すいませんでした。では また次回に ノシ」

第46話 頭脳戦の四（前書き）

ツヤガ「最近一話が短いですね」

ナチヤ「作者しっかりしろよ」

ツヤガ「ナチヤ、小説は？」

ナチヤ「（ぎくっ）なっ、なんのことだ？」

ツヤガ「へへ、そんなこと言うんだ。まあ後でお仕置きね。では
ごゆっくり お読みください」

第46話 頭脳戦の四

コルネス「いたいた」

ナチャ「イヤンガルルガか。久しぶりだな」

コルネス「そうかい。じゃあ頑張っていこうか」

ナチャはコルネスの武器が気になっていた。見た感じ大剣でもハンマーでもない

ナチャ「ここで聞くのもあれだけど、コルネスの武器はなんだ？」

コルネス「ん？あ、これかい。これはスラツシユアックスといつて新しい武器さ。だが試作段階で俺が試しに使っているんだ」

そんな会話をしているとガルルガが突進を仕掛けてきた。二人は普通に避けた

ナチャ「スラツシユアックスって言うには斧だよな」

コルネスはスラツシユアックスを突いたり下から上に斬ったりと色々なモーシヨンをする

ナチャ「そういえば、なんでスラツシユなんだ？」

疑問に思っていたら、ガルルガが怒った

コルネス「ナチャ、怒ったけど大丈夫か？」

ナチャ「ああ大丈夫さ」

だがガルルガが通常の声とは少し違う声を出した
コルネス「・・・まさかな」

すぐにもう一匹のガルルガが飛んできた

ナチャ「！？仲間を呼んだのか」

コルネス「めんどろだな。ナチャ、今来たガルルガと戦えるか？」

ナチャ「いけるけど、どうするんだ？」

コルネス「こいつを速攻で殺る」

コルネスの殺気が怒っているガルルガに向いた。しかしガルルガ達は気にせず攻撃してきた

ナチャ「こいつ、さっきのよりでかいな」

このガルルガは怒っているガルルガより大きくナチャは苦戦していた。そして戦っている最中に赤い光をみた
ナチャ「？なんだ」

その赤い光は、どうやらコルネスの武器から出ているらしい
ナチャ「なんだあれ？」

ガルルガが咆哮をしたせいでナチャはコルネスをよく見れなかった
ナチャ「！？」

そこには絶命したイヤンガルルガがいた

コルネス「よし、あと一匹だ」

ナチャ「（なんだ、あの光は）」

ガルルガは仲間を殺られて怒った

ナチャ「くっ。早いな」

このガルルガは大きく避けるのに集中して中々攻撃のチャンスがない
コルネス「何か早く終わらせる方法は・・・」

ナチャ「よし、今だな」

ガルルガが火球を撃ってきたがそれを全て避けガルルガの目の前に
きた

ナチャ「喰らえ！！」

乱舞が炸裂する

コルネス「！？」

ガルルガはナチャの攻撃に怯まずサマーソルトを、だそうとしている
ナチャ「ちっ。避けれないな」

コルネス「大丈夫さ。当たらないから」

コルネスがいつの間にかガルルガの後ろにいた

ナチャ「（何をやる気だ？）」

コルネスの武器が赤い光を放ちながら変形した

ナチャ「！？」

コルネス「剣モード、スラッシュアックスはモードチェンジが出来るんだ」

剣モードのコルネスの攻撃でイヤンガルルガの尻尾が切れ痛さに飛

び上がった

ナチヤ「その赤い光は？」

コルネス「さあ？俺もよくわからない、作った武器職人に聞いてくれ」

イヤンガルルガは仲間をやられ尻尾を切られて怒りが最高潮になった

第46話 頭脳戦の四（後書き）

トアスク「コルネスは何のフラグだと思う？」

ライリ「分からないわね。でも特別な存在かな？」

シアン「そうじゃなきゃ、名前が出ないけどね」

アマデオ「では俺は、なんなんだ？」

クレス「久しぶりに出ましたね」

シアン「君たちは一時期、特別で後は用なしのキャラだよ」

ツヤガ「あら、意外と酷いこと言うわね」

クレス「反応は自分で考えてくださいね（かんぺ）」

ツヤガ「では また次回に ノシ」

第47話 ナチヤが本気で弱い（前書き）

ツヤガ「ガルルガが残り一匹です。果たして二人は残りのガルルガを倒せるのか!？」

ナチヤ「さあな。どうなるかね」

ツヤガ「ではごゆっくり お読みください」

第47話 ナチヤが本気で弱い

ナチヤ「助かった。コルネス」

コルネス「どうってこと無いさ」

ガルルガは怒り最高潮でさらに早くなった突進をしてきた

ナチヤ「また攻撃しにくくなったな」

コルネス「このままだと不味いな」

ナチヤ「なんかあつたか？」

コルネス「うーん。多分俺達が体力尽きて負けるな」

ナチヤ「体力尽きる前に殺ればいい話だろ」

無理矢理だがナチヤは攻撃をした。ガルルガは後ろからきたナチヤを少し飛んで避けた。そしてサマーソルトをした

コルネス「低空飛行！？ナチヤ避ける！」

ナチヤ「っ！！」

ガルルガのサマーソルトは命中した

コルネス「おらああ」

スラッシュアックスがガルルガの足を殴りガルルガが転んだ

コルネス「ナチヤ、大丈夫か？」

ナチヤ「う・・・大丈夫だ。」

コルネス「ほら解毒薬」

ナチヤ「すまないな」

ガルルガはチャンス逃さずナチヤに突進をしてきた

コルネス「うるさいな。殺すか」

ガルルガは驚いた、人間がまるで羽があるようなくらい跳んだ

ナチヤ「！！！？？」

コルネス「喰らえええ！！」

スラッシュアックスの剣モードがガルルガの背中に突き刺さった

ナチヤ「・・・よし、決めるぞ」

怯んだガルルガにナチヤが乱舞をした

だがガルルガは最後の力でサマーソルトをしようとしてきた
コルネス「いい加減飽きたな。その技」
コルネスの攻撃で片翼がボロボロになった
ナチヤ「終わりだー!!!」
ナチヤの両方の腕が下に降りてガルルガは絶命した

〈帰りの竜車〉

ナチヤ「コルネス、戦闘中に、すごい跳ばなかったか？」
コルネス「ああ、あれね。まあ俺くらいレベルのハンターなら、
やれる人もいるよ」
ナチヤ「俺くらいって・・・偉いさんにならなくちゃ駄目じゃん」
コルネス「そうだね。偉いさんになるくらい強くなればいいのさ」
ナチヤ「無茶言うなよ」

ナチヤ「ふー。疲れた」
トアスク「コルネス。誰なんだろうな」
クレス「とりあえず皆の話を聞きましょう」
ライリ「じゃあ、そうなる」と
シアン「私ね！頑張っちゃうよ」
ナチヤ「無駄に頑張って過去を変えるなよ」
シアン「大丈夫だよ。じゃあ話すね」

シアン「へへ、分かった。行けばいいんでしょ？」

受付嬢「はい、そうです。では、こちらへ」

今回シアンはギルドマスターの願いであるハンターと一緒に狩りに行くらしい

シアン「(どんな人かな？強いと楽なんだけど)」

コルネス「なるほどね。こちらも色々と準備しなきゃな」

シアン「(あれかな)」

ギルドマスター「おお、シアン。よく来てくれたのう」

シアン「マスター、この人が一緒に行く人？」

コルネス「ああ、そうだ。名前はコルネスだ。よろしく」

シアン「私はシアンだよ。よろしく」

ギルドマスター「そういえば狩りに行くモンスターを連絡してなかったのう。えつとな、グラビモスじゃ」

シアン「ふん。楽勝ね」

ギルドマスター「だが気を付けろい。今回のグラビモスの大きさは、かなりデカイらしいぞ」

シアン「大丈夫だよ。私を誰だと思ってるのよ」

コルネス「頼もしいな。じゃあ行くか」

シアン「了解」

第47話 ナチャが本気で弱い（後書き）

ツヤガ「後書きで書くことが無い」

ナチャ「書かなければいいだろ」

ツヤガ「でも何か書きたいんですけどよね」

クレス「ナチャを、いじめるのはどうでしょうか？」

ナチャ「いやいや、駄目ですよ」

ツヤガ「今は疲れてるから後で、いじめようかしらね。では また
次回に ノシ」

第48話 シアンの過去3rd（前書き）

ツヤガ「シアンの過去です。一話で終わりました。なんか色々急展開ですが、すいませんね。ではごゆっくり お読みください」

第48話 シアンの過去3rd

く火山【昼】く

シアン「さくで、グラビモス倒そうか」

コルネス「そうだな。探索は別れてやるか？」

シアン「そうだね。どうせ私たちだったら一人で倒せるもんね」

コルネス「・・・そうだな。じゃあ俺は、こっちで」

シアン「私は、こっちな」

そうして二人は別れた

コルネス「（シアンは、かなり強いな。俺の実力を見切ったし、別々に行動するってことは自信もあるようだ）」

そんなことを考えていたら目の前にグラビモスがいた

コルネス「おっと、ここにいたのか」

ペイントボールを投げてシアンに場所を教えた

シアン「いないな。ザザミと遊ぼうかな!?」

ペイントボールの匂いに気付いた

シアン「うん、あっちの方かな」

コルネス「本当にでかいな」
グラビモスはコルネスの何倍もの大きさだ
コルネス「まあ、倒すだけだな」
双剣でグラビモスの腹を切ろうとしたが弾かれた
コルネス「硬いな」
グラビモスは、ある攻撃の構えをした
コルネス「ガスを噴射するつもりか」
グラビの体の何処からガスが出てきた。しかしコルネスはすでに
射程範囲外にいた
コルネス「どうするか」
グラビは気にせずコルネスに突進をした
シアン「おつきいね。やりがいがあるよ」
コルネス「シアンか、気を付ける。あいつ強いぞ」
グラビはハンターが二人になり良い行動を思い付いた
コルネス「!？」
シアン「なめないでね」
グラビの目の前にはシアンがいた
シアン「扇形のビームを撃とうとしてたようだけど、やらせないよ」
シアンの矢が至近距離でグラビの顔に当たり怯んだ
コルネス「(恐ろしいな)」
シアン「今日の天気は矢が降るよ」
グラビは怒り、咆哮をしようとしたがシアンの矢が上から雨のよう
に降りそそぎ、怯んだ
コルネス「よし、チャンスだな」
コルネスは弾かれない攻撃である乱舞を放った
グラビはガス噴射をやりコルネスを遠くにやった
コルネス「また同じ戦法か」
シアン「!？」
グラビは急に飛んだ

コルネス「こいつ飛んだぞ」

シアン「やばい！避けて」

グラビは上からビームを放ってきた

シアン「っ。髪が焦げた。・・・殺すよ（クシャルダオラに似ている。関係あるのかな？）」

コルネス「ふっ。射程範囲内だ」

グラビの背中にジャンプした

シアン「やるね。じゃあ私も活躍しますか」

グラビは背中に人間が乗ったことに驚き少し動けなかった

シアン「試作品だけど、いけるよね」

弓に爆薬を付けて撃った。グラビの腹に当たると爆薬が爆発して腹の甲殻を破った

コルネス「あと一回だな」

また乱舞をグラビにお見舞いした。グラビは上と下からの攻撃に怯み落ちた

コルネス「よつと、危なかったな」

シアン「腹の甲殻を剥いどいたよ」

コルネス「よし、じゃあ本領発揮だな」

まだ、もがいているグラビの腹の下に潜りこんだ

コルネス「鬼人強化。まだ俺くらいしか出来ない技だ」

そう言つて乱舞とは少し違う動きの攻撃、鬼人連斬をした

シアン「スゴいね」

グラビは、すでに体力が無くコルネスの鬼人連斬で絶命した

トアスク「コルネスは色々な武器を使うんだな」

ライリ「確かにね」

ナチャ「他に何を使うんだ？」

ライリ「それは私たちの話を聞いてからでしょ」

ナチヤ「まっ、そうなるよな」

トアスク「ライリが先で良いよ」

ライリ「分かったわ。じゃあ話すわね」

第48話 シアンの過去3rd（後書き）

ツヤガ「眠いね」

ナチヤ「じゃあ寝れば？」

ツヤガ「そうする。じゃあ、おやすみ」

ナチヤ「あれ？本当に寝た」

クレス「さあ、このあとナチヤはどんな行動をするのか！？正解は次回に！では また次回に ノシ」
ナチヤ「何故に次回に、まわした」

第49話 ライリの過去4th（前書き）

ツヤガ「毎日投稿するの疲れる」

ナチヤ「じゃあ止めれば？」

ツヤガ「次の小説になったら不定期にする予定だから、この小説は頑張ってるのよ。ではごゆっくり お読みください」

第49話 ライリの過去4th

フェリクス「いつまでやるんだよ」

フェリクスは二人の行動に呆れている

アルミン「父さん。こればかりは譲れない」

サバレ「ライリに幸せな生活をさせるためだ我慢しろ！」

今二人は、ある問題にぶつかっている。今日は特別任務でサバレはアルミンとフェリクスを連れて、ある所に調査に行く予定にしたいがアルミンがライリと狩りに行く約束をしていて（いつも無理矢理している）サバレの手伝いをしないと云っている

フェリクス「じゃあ、ライリに決めてもらえば、いいだろ」

サバレ「そうか、その手があったか」

アルミン「どう考えても、ライリはお兄ちゃんと狩りたいと言っさ」

ライリ「また、くだらないことしてたのね」

フェリクス「で、どうする？」

ライリ「モンスターくらいは一人で狩れるから心配しないで、アルミンお兄ちゃんはお父さんの手伝いをしてね（笑顔）」

アルミン「よっしゃや。任せな、ライリ。手伝ってくるぜ」

口調が変わった

サバレ「流石、ライリだ。あとで何かしてやるからな」

ライリ「別に何もしなくていいわよ」

フェリクス「じゃあ、行ってくるよ」

ミヨア「行ってらっしゃい」

ライリ「私も行くわ、お母さん」

ミヨア「ええ、行ってらっしゃい」

ライリ「一人だから、そんなに強くないのがいいわね」

受付嬢「ライリ様ですね？」

ライリ「？ええ、そうだけど。(受付嬢から話しかけてくるなんて珍しいわね)」

受付嬢「ギルドマスターがお呼びです。こちらへ、どうぞ」

ライリ「ギルドマスターが呼んでるの……」

コルネス「止められなかったか。じゃあ対抗するしかないな」

ライリ「(ギルドマスターは何か話してるようね)」

コルネス「？君がライリかい」

ライリ「はい、そうです」

コルネス「悪いが今日は一緒にナルガクルガを狩ってもらおう」

ライリ「ナルガクルガをですか。そういえば貴方は？」

コルネス「おっと、自己紹介が、まだだったね。俺の名前はコルネスだ。よろしく」

ライリ「よろしく。じゃあ早速行きましょうか」

（樹海）

ライリ「蒸し暑いわね」

コルネス「樹海だからな」

二人はナルガを探してる

コルネス「!?。気を付ける。上からくるぞ」

ナルガはハンターに奇襲をしかけた

ライリ「ったく、喰らうわけがないわ」

ライリはナルガの攻撃を紙一重で避け攻撃をした

ライリ「まだまだ」

さらに攻撃を当てていく、しかしナルガは大きく後ろに跳んだ

ライリ「距離をとったわね」

ナルガはジグザグに迫ってきた

コルネス「喰らわないな」

コルネスは弓でナルガを攻撃していた

ライリ「はああ！」

そしてライリから闘気が溢れだした（鬼人ゲージが溜まった）

ナルガは奇襲までしてダメージをあたえられず、痛手をおつて怒った

第49話 ライリの過去4th（後書き）

ナチャ「次回で記念すべき第50回だな！」

ツヤガ「何かやる？」

トアスク「面白いことなら、やろうか」

シアン「ナチャが書いた小説は？」

ナチャ「・・・まだ終わってないんで勘弁を」

ツヤガ「うん、そうね。キャラ紹介と、おふざけの話でどうかしら？」

クレス「面白そうですね」

ライリ「キャラは全員出すの？」

ツヤガ「勿論、結構な数ですがテキストにやろうかな」

ナチャ「また俺は捕まりそうだな」

シアン「じゃあ今から逮捕〜」

カチャ

ナチャ「いや、意味わからないから。この手錠外してよ」

トアスク「流石、シアンだな。またまた、やられたよ」

ナチャ「トアスクも変なところで乗るな！」

トアスク「ごめん、ごめん」

ツヤガ「じゃあ、次回は番外編です。キャラ紹介やお話をしたいと思います。では また次回に ノシ」

第50話 番外編 久々のオールスター（前書き）

ツヤガ「今回は番外編なのでいつも通り本文が前書きや後書きの世界になります。キャラ紹介なので見なくても問題ありません。では
「ごゆっくり お読みください」

第50話 番外編 久々のオールスター

ツヤガ「前書きに注意したいのが書いてあるので読んで下さい」

ナチヤ「え？何これ」

ここはどこかのスタジオらしく皆忙しそうに働いている

ライリ「あ！遅いわよ、ナチヤ」

ナチヤ「なあ、ライリ」

ライリ「なっ、何よ」

ナチヤ「この状況は何？」

ライリ「ああ、そういうことね。今は自己紹介するためのスタジオの準備してるのよ」

ナチヤ「スタジオの準備って・・・」

ライリ「司会はクレスらしいわ」

ナチヤ「へへ。俺は何の役だ？」

ライリ「カメラマンよ」

ナチヤ「主人公!？」

クレス「さあ、始めました。キャラ紹介の時間です。今回はかなり前の人の紹介になりますが気にしません。では最初にチヨさんです。どうぞ」

そう言うとチヨが階段から降りてきた

クレス「ではチヨさん。自己紹介を」

チヨ「任せなさい。私の名前はチヨ。神に選ばれた者よ。主に片手

剣を使うわ」

クレス「では、言いたいことを一言」

チヨ「新キャラで、ケミって奴がいるけど、名前が二文字は私の特許よ。なんで貴方が二文字なのかしら？」

クレス「（自分勝手だな）はい、ありがとうございます。次にアマデオさん、どうぞ」

アマデオ「えっと、名前はアマデオだ。・・・それだけかな」

クレス「なるほど。では次の人」

アマデオ「早くない!？」

クレス「時間が無いので早いですよ」

アマデオ「え・・・まあ、いいや」

クレス「では次にダーフィットさん、どうぞ」

ダーフィット「僕の名前はダーフィットだよ。この小説で一人だけ一人称が僕なんだ」

クレス「地味に凄いですね。それだけですか？」

ダーフィット「え?これだけけど」

クレス「・・・では次の人です。メライさん、どうぞ」

メライ「私はメライよ。まあよくスキラと一緒に行動してるよ」

クレス「メライさんはスキラさんのことをどう思ってるんですか？」

メライ「え!?!そんな質問、台本には」

クレス「ナチャがカンペを持ってますよ」

ナチャ「いや、シアンが俺に渡しただけで俺じゃないから!」

メライ「あとで来てね」

笑顔だが異様な殺気が出ている

クレス「次はスキラさんです。どうぞ」

スキラ「イツヤッホー。全国の女性の皆、俺のことが好きかい？」

次の瞬間誰かの笛がスキラに当たりスキラは気絶した

クレス「・・・えっと、次にいきましよう」

第50話 番外編 久々のオールスター（後書き）

ナチヤ「なんで俺の役がカメラマンなんだ？」

ツヤガ「なんとなくですよ。まあ、いいじゃないですか」

ナチヤ「主人公なんだがな」

ツヤガ「主人公だったけ？」

ナチヤ「それは酷くないか？」

ツヤガ「なんでもいいですね、では また次回に ノシ」

第51話 番外編 またキャラ紹介（前書き）

ツヤガ「前回と一緒に世界が変わっています。ではしゅっくり
お読みください」

第51話 番外編 またキャラ紹介

クレス「シミカさん、どうぞ」

シミカ「えっと、名前はシミカです」

クレス「シミカさん、そんなに緊張しなくても平気ですよ」

シミカ「私はどうも苦手なのよね」

クレス「なるほど。ではキャラ紹介は私がやりましょうか？」

シミカ「え？いいの。じゃあ、よろしく」

そしてシミカは何処かに行った（逃げた）

クレス「シミカさんは腐女子キャラですね。作者が書きにくくて頑張っていました。では次にケミさん、どうぞ」

ケミ「私の名前はケミよ。クレスとは義理の姉妹みたいな感じだったわね」

クレス「ケミに色々と振り回されたな」

ケミ「ふふ。今は彼氏と上手くやってるの？」

クレス「っ。はい、次にいきましょう」

ケミ「ちよっと、誤魔化さないですよ」

しかし強制的に退場した

クレス「次はバルトロメーウスさんです。どうぞ」

メーウス「バルトロメーウスじゃ。年寄りだからといって、なめとると痛い目みるぞ」

クレス「誰に言ってるのでしょうか？」

メーウス「誰かじゃ」

クレス「では最後にコルネスさん、どうぞ」

コルネス「名前はコルネスだよ。今までの話から分かると思うけど俺は何かしらあるよ」

クレス「気になりますね。今回のキャラ紹介は、これで終わりですね」

ナチャ「（この後は何するんだ？）」

クレス「では皆さんお待ちかねの第50回記念のパーティーをやり
ます！」

ナチャ「!?」

いきなりスタジオの壁が倒れた。そして周りは森林が広がっていた
クレス「今回はキャンプに来ました。皆さん、楽しんで行きましよ
う！」

全員「オオー！」

ナチャ「え、だからなんで、ここにいるの？」

ツヤガ「だから、スタジオを移動させたんだよ。皆に気づかないよ
うに」

ナチャ「それは分かったけど何故、みんな平然と遊んでるんだ？」

ツヤガ「普通じゃない？ナチャがおかしいのよ」

ナチャ「俺が変なのかよ!？」

トアスク「ナチャ！助けてくれ！」

シアン「逃がすわけないでしょ」

トアスクの目の前にシアンが急に現れた

ナチャ「誰だよ。シアンに酒を飲ませた奴は」

トアスク「スキラだ。あいつ酒でテンションがおかしいぞ」

シアン「トアスク、逃げたからバツゲーム！」

トアスク「やめ・・・」

ナチャは聞かなかった。トアスクの断末魔を

ナチャ「今はスキラを止めなきゃな」

スキラ「いいね。女がいるじゃないか！」

ナチャ「言ってることは、いつも通りだが、なんでダーフィットとア
マデオを女と間違えてるんだよ!？」

シミカ「ああ。リアルでこんな熱い絡みが見れるなんて、幸せ」

ナチャ「・・・。とりあえず助けようか」

スキラ「よう、ナチャじゃないか。一緒に飲もうぜ！」

ダーフィット& amp; アマデオ「(助けて)」

ダーフィット達が助けの目でナチャを見ている

ナチャ「(どうすれば・・・ハッ)スキラ、ケミは美人だろ？ナンパしてくれば？」

スキラ「！そうだな。良いアイデアじゃないか。じゃあグッバイ天使達」

そういつて、捕まっていたダーフィットとアマデオに投げキッスをしたナチャ「大丈夫か？」

ダーフィット「死ぬかと思った」

アマデオ「なんだ、あの人・・・」

ケミ「大変だったんだね」

クレス「でもナチャが居たから平気だったよ」

ケミ「へへ。やっぱりナチャ君のことが」

クレス「だから、何も想ってないから」

ケミ「あれ？まだ全部言っていないよ？」

クレス「っ。ケミ姉さんの意地悪」

ケミ「別に意地悪くないわよ」

スキラ「おお、貴方の笑顔はとても美しい！」

この一言が始まりだった

第51話 番外編 またキャラ紹介（後書き）

ナチヤ「何が始まるんだ？」

ツヤガ「それは次回のお楽しみ」

ナチヤ「まあ、そうなるよな」

ツヤガ「話変わるけど、こうキャラが多いと全員動かすの大変なのよね」

シアン「じゃあ私だけを書けば？」

ツヤガ「出来たら、それがいいわね」

シアン「大丈夫だよ。文句言ってくる奴は私が殺るからさ」

ツヤガ「じゃあ、そうしましょうか」

ナチヤ「待てよ、二人とも」

シアン「？何」

異様な殺気が漂う

ナチヤ「（誰か止めるよ。こいつらを）」

ツヤガ「では また次回に ノシ」

第52話 番外編 合戦（前書き）

ツヤガ「いつ本編に戻るのでしょうかね。あと二話くらい番外編が続
きそうです。ではごゆっくり お読みください」

第52話 番外編 合戦

ケミ「急に何？」

スキラ「ふっ、驚くのも無理はないさ。なぜなら今俺が君をナンパしているから」

メライ「へへ。じゃあ死にたいってことかな？」

スキラ「……。逃げるが勝ちだ！」

メライ「あっ！待ちなさい！」

クレス「なんだっただらうね」

ケミ「さあ？」

メライ「これでも喰らえ！」

メライは肉を切る専用のナイフをスキラに投げた

スキラ「危ない！当たったら怪我するぞ」

メライ「傷ならいつか癒えるよ」

そんなことをしていると

シナオ「！？戦闘してるぞ。よっしゃ、俺も参加するぜ」

メーウス「若い者は、いいのう」

ディルク「嫌な時もあるがな」

メーウス「年寄りになるとその嫌なことが多くて困るわい」

スキラ「なんだ！？」

シナオ「戦闘なら俺も混ぜろよ」
スキラ「馬鹿が、メライに殺されるぞ」
シナオ「テメー、馬鹿って言ったな。よし、勝負だ」
スキラは敵が二人になった
スキラ「ヤバイって」
逃げ回るスキラを追いかける二人。しかし最悪の事態になる
ライリ「きゃ」
アルミン& amp ;サバレ「!?!」
フェリクス「あゝあ。やつちゃったな」

スキラ& amp ;シナオ「うおおお」
メライ「大変なことになったね」
ライリを少し驚かせたスキラはアルミンとサバレに容赦なく攻撃をされた。そして共犯者に思われたのかシナオも一緒に狙われている
シアン「面白そうなことやってんじゃん。トアスク、私たちも参加するよ」
トアスク「いや、止めとけよ」
シアン「早く、行ってこーい!」
トアスク「はいはい」
そしてシアンとトアスクも混ざった
スキラ「一時休戦だ。シナオ、戦うぞ」
シナオ「そうだな。俺たちなら、なんとかなるかもな」
アルミン「ライリを驚かせたんだ。死ぬ覚悟は出来てるよな？」
サバレ「楽には殺さないぞ」
トアスク「シナオの助太刀するか」
シアン「私はライリの味方だからサバレのほう」
チヨ「待ちなさい。戦闘なら私もやるわ。もちろんシナオの方よ。戦力的に弱いから私の力が必要でしょ」

クリスト「・・・」

クリストもいつの間にかシナオの軍についていた
サバレ「ちようどいい、ハンディキャップだ。いくぞ！」

フォルク「なんかヤバイ状況だな」

ナチャ「そんなこと言ってる場合じゃないよな」

コルネス「どっちが勝つかな？」

ナチャ「いや、そんなことじゃないだろ」

ツヤガ「私はサバレ軍で」

フォルク「俺はシナオ軍だな」

コルネス「俺もシナオ軍だ」

クレス「では両軍、試合開始！」

ナチャ「なんでクレス？」

クレス「私は大体こんな役ですから」

第52話 番外編 合戦（後書き）

ナチヤ「第50回記念が、ただの乱闘になったな」

ツヤガ「もともと、記念なんてやる気なかったので、なんでも良いの」

ナチヤ「そうですか……。なあ、最後の台詞久々に言わしてくれない？」

ツヤガ「？いいですよ」

ナチヤ「まあ理由は特に無いよ。では また次回に ノシ」

第53話 番外編 戦いをするには目的がある（前書き）

ツヤガ「対人戦を書くの楽しいですね」

ナチャ「しかし本文に俺が一回も出てないな」

ツヤガ「あれだよ。主人公補正」

ナチャ「そんな補正なら主人公嫌だな」

ツヤガ「じゃあ止める？」

ナチャ「いや、やるさ。どんな困難があっても俺は乗り越えてみせる！」

ツヤガ「（軽蔑の目）……。ではごゆっくり お読みください」

第53話 番外編 戦いをするには目的がある

ツヤガ「そういえば、この試合のルールを説明してなかったね。この試合は時間制限は無しで、みんな本物の武器を使っています。そして相手を全員気絶させるか降参させた方の勝ちです」

コルネス「怪我したら、どうするんだ？」

クレス「看護師が、そこに居ますよ」

メライ「なんで私が看護師なのよ」

ナースのコスプレをしている。そして、かなり顔が赤いツヤガ「流れるにメライが看護師なのよ。我慢して」

シナオ「俺はサバレと戦う。他の奴は手を出すなよ」

チヨ「あら、そんなことするなら私はアルミンと戦うわ。もちろん手は出さないでね」

スキラ「じゃあ俺らはシアンだな」

クリスト「・・・」

トアスク「倒せる気がしないな」

サバレ「ほう、お前か」

シナオ「あんだ、見た目で分かるが、かなり強いだろ」

サバレ「さあな、戦ってみれば分かるだろ」
シナオ「そこなくっちゃ。じゃあ、いくぜ！」

アルミン「関係ない奴か」
チヨ「あら、関係ないとか、あるとかじゃない。強いか弱いかでしよ」
アルミン「ふつ。分かっているな」

シアン「三人か。少ないね」
スキラ「何言ってるんだよ。俺一人でも十分だぜ」
クリスト「・・・無理」
トアスク「スキラ、それは無理だ。相手は化け物だからな」
シアン「化け物って、なによ！！よし、私怒っちゃったからね」

シナオ「予想通りだ」
サバレ「甘いな。その予想を越えてやろう」
シナオはサバレと戦っている。二人とも腕は良く激しい戦いになっている
サバレ「太刀を使うなら、負けるわけがない」
サバレの鋭い攻撃がシナオを襲った
シナオ「それは、こっちの台詞だぜ」

その攻撃を避け、隙をついてサバレに攻撃をした。しかしサバレの蹴りによって弾かれた

シナオ「っ！」

直ぐ様後ろに下がり距離をとった

シナオ「（あれを当てれば勝てる）」

サバレ「無闇に飛び込んできても無駄だ」

サバレは鬼人斬りをしてきた

シナオ「（！チャンス）やってやるぜ」

シナオも鬼人斬りで対抗した。剣と剣がぶつかる。その音から二人の激しさが伝わる

サバレ「なかなかだな」

シナオ「ああ、だがこれからが本番だぜ」

サバレ「ほう、やれるのか？大回転斬りを」

シナオ「出来るさ、俺だけの特別な技もな」

そして二人の大回転斬りがぶつかる。剣の厚さは数ミリしかない。だがその数ミリで当たっている

シナオ「喰らえ！俺だけの技！」

サバレ「！？」

シナオはサバレの大回転斬りを弾き、最後の派生技をやった

サバレ「くっ。ダメージを受けたか」

サバレはシナオに斬られて血が出ている

シナオ「あんた凄いな。一撃で決めるつもりだったか」

サバレは当たる寸前に軽く避けていた

サバレ「次は、こちらの番だ！」

シナオ「来いよ、おっさん！」

チヨ「随分、重たそうな武器ね」

アルミン「それでも対人戦とか結構強いんだぜ」

チヨはアルミンを攻撃出来ないでいた。アルミンの武器はガンランス。下手に近づけば砲撃で一撃である

チヨ「まさか、私が片手剣しか使えないと思ってる？」

チヨはメライが投げたナイフと同じ物をアルミンに投げた

アルミン「ちよ。卑怯くさ！」

しかし砲撃でナイフを蹴散らした

アルミン「予想通りだな」

砲撃の煙からチヨが現れて蹴りをしてきた。だがアルミンの盾でガードされる

チヨ「こつちも予想通りね」

そしてアルミンを台にして上に跳んだ

アルミン「空中だと身動きがとれないだろ」

ガンランスを上に向け砲撃をしようとした

チヨ「甘いわよ」

アルミン「ちっ」

チヨは片手剣の盾をアルミンに投げつけてきた。それをアルミンはバックステップで避けた

アルミン「だったら降りてきた時だ」

アルミンのガンランスがチヨを狙った

第53話 番外編 戦いをするには目的がある（後書き）

ツヤガ「無理矢理な所が多々ありましたね」

シアン「私の戦闘は次回か」

トアスク「次回、シアンと戦うのか。勝てそうにないな」

ナチャ「でも三人だし、いけるでしょ。スキラとクリストも強いぜ」

トアスク「それもそうだな。ポジティブにいかうか」

ツヤガ「（まあ、いつか）では また次回に ノシ」

第54話 番外編 意外に長くなってしまった(前書き)

ツヤガ「どうやら今回の番外編は予想を遙かに越えて長いようです」

ナチャ「俺の出番少ないし、どうしてくれるんだ!」

ツヤガ「?殺されたいの」

ナチャ「すみませんでした。調子に乗りました」

ツヤガ「謝れば、よろしい。ではごゆっくり お読みください」

第54話 番外編 意外に長くなってしまった

チヨ「攻撃は最大の防御ってね」

またナイフを投げつけてきた

アルミン「めんどくさいな」

またナイフを砲撃で蹴散らした

アルミン「喰らえ！」

砲撃で前が見えなかったが煙の中に突っ込んだ

チヨ「っ！危ないわね」

だが全て避けきれず腹にカスった

チヨ「でも、これで私の番ね」

チヨはアルミンの懐に近寄り攻撃をしようとした

アルミン「まだだ！」

アルミンの蹴りがチヨを狙った

チヨ「盾を拾った理由を教えてあげようか？」

盾でガードをした

チヨ「喰らいなさい！」

アルミン「ふっ、甘いな」

チヨ「！？」

チヨの攻撃はアルミンを浅く斬った

アルミン「転けることも時には使えるんだよ」

アルミンはチヨがガードした時、さらに足に力を入れて自ら転け、

チヨの攻撃を避けた

アルミン「グッバイ」

チヨ「くっ」

アルミンの砲撃がチヨに命中した。だが受け身をしっかりとしたので

ダメージを最低限に抑えた

アルミン「さあ、反撃だな」

チヨ「させるわけないでしょ」

シアン「誰からでもいいから、かかってきなよ」

トアスク「スキラ」

スキラ「ああ、わかってる」

トアスクとスキラは同時にシアンに突っ込んだ

シアン「ふふ、当たらないよ。そんな大振り」

二人の攻撃は避けられた

クリスト「・・・」

シアン「そんなものよね」

シアンは回避直後クリストに狙われたが読んでいたらしく、それも回避した

トアスク「まったく、攻撃当てられるのかよ」

諦めずトアスク達は攻撃をするが全て避けられる

シアン「そろそろ、攻撃しようかな」

スキラ「だったら」

トアスク「？」

クリスト「・・・」

スキラ「よろしくな」

トアスク「・・・、ああ。分かった」

スキラはトアスク達と何かアイコンタクトをした

シアン「（邪魔なのはクリストよね。でも一番倒しにくいな）」

スキラ「喰らえ！」

シアンは考えていて少し反応が遅れていた

シアン「っ！！」

スキラは閃光玉を投げていた

ナチヤ「あれは、ありなのか？」

クレス「アイテムを使用禁止にして無いので、ありです」

ナチヤ「ていうか、そんなこと言ったらチヨはナイフ使ってたしな」

ツヤガ「そうそう、作者が「投げナイフ」の存在を忘れてて、ナイフになっちゃたんだよ」

コルネス「まあ基本、投げナイフなんて使わないからな」

シアン「（目が・・・）」

閃光玉でシアンは一時的に視力を失った

トアスク「うまくいったな」

スキラ「これで一気にフィニッシュだ」

第54話 番外編 意外に長くなってしまった(後書き)

ナチヤ「閃光玉とか、なんで持ってたんだ？」

スキラ「いや、クラッカーと間違えて持ってたちゃったんだ」

ナチヤ「よく間違えたな」

スキラ「このせいで、女の子を祝福出来ない・・・」

ナチヤ「別の手段で祝福すればいいだろ」

スキラ「例えば？」

ナチヤ「え！？・・・では また次回に ノシ」

第55話 番外編 バーベキューしているよ(前書き)

ツヤガ「もう長いな。これだからトアスクは」

トアスク「なんで俺!？」

ツヤガ「気分」。では ごゆっくり お読みください」

第55話 番外編 バーベキューしているよ

スキラ「いくぜ」

容赦なくスキラはシアンを狙った

シアン「ふふ、私が目を使えなくらいで負けると思った？」

シアンはスキラの攻撃を避けた

スキラ「！？目が見えてないはずだぞ」

シアン「風の音を聞けばある程度分かるよ」

トアスク「だが目が見える時より当てやすいはずだ！」

クリスト「・・・」

トアスクとクリストは同時にシアンに攻撃した

シアン「じゃあ時間稼ぎさせてもらおう」

つぎの瞬間、シアンは上に大きく跳んだ

コルネス「ほら、やれるだろ？」

ナチヤ「まあコルネスほど高くないけどな」

クレス「？・・・！コルネスがジャンプした時の話ですね」

コルネス「そうだよ。よく覚えていたね」

シアン「今日の天気は矢が降ってくるでしょう」

空中で大量の弓をばらまいた

トアスク「！？ヤバイ」

全員降ってくる矢に集中してシアンを攻撃出来ない

スキラ「本当に化け物だな。あんだけの数を一瞬で」

シアン「まだまだ、いくよ」

クリスト「・・・」

シアンは目が見えていないので矢をバラバラに撃っている。クリストは、このチャンスを逃さずシアンの矢が一番来ない後ろに回り込んだ

クリスト「・・・」

睡眠弾をリロードしてスコープを覗いた

シアン「おいしいね、私もう視力回復しちゃた」

クリストの額に吸盤つきの矢が当たった

クリスト「・・・負けた」

トアスク「クリストがやられたか」

スキラ「どうする？笛とハンマーじゃ相性が悪いぞ」

トアスク「相性悪くてもやるしかないな」

しかし二人は攻めるが全く攻撃が当たらない。だがシアンも攻撃を当てられていなかった

シアン「(さっきので矢を、いっぱい消費しちゃったから、攻撃を確実に当てないとな)」

トアスク「喰らえ！」

足払いをしたがシアンは軽くジャンプして避けた

スキラ「今だ！当たれー！」

スキラはシアンの後ろから笛で殴った

シアン「スキラ、もうらい」

スキラはシアンを吹っ飛ばした

トアスク「よし、攻撃が当たった」

だが吹っ飛ばした後にスキラの額に吸盤つきの矢が当たった

スキラ「悪いな。トアスク、あれは無理だ」

シアンは吹っ飛びながら矢を撃ち、動けないスキラの額に矢を当てたシアン「いった」。女の子なんだから優しくしたっていいでしょ」

トアスク「強い相手に手加減出来るわけないだろ」

シアン「私、出来るもーん」
トアスク「シアンより強いやつ、いるのか？」
会話しながらトアスクはハンマーで攻撃をする
シアン「面倒だから、もう終わらせるね」
シアンは突っ込んできたトアスクに突っ込んだ
トアスク「！？接近戦か」
シアンが攻撃をする前にトアスクが攻撃した
トアスク「これで終われー！」
スピードが急に上がりハンマーを下から上に振り上げた
シアン「残念。はい、終わり」
シアンはハンマーの上に乗る止めをトアスクに当てようとした
トアスク「まだだ」
シアンの攻撃を避けハンマーを捨てた
シアン「きゃ」
バランスを崩した
トアスク「気が引けるが終わりだ！」
トアスクの拳がシアンの腹に直撃する

シナオ「くっ」
チヨ「・・・」
サバレ& amp; アルミン「終わりだ」
シナオの首にはサバレの太刀がある。チヨの目の前にはガンランスの先がある
チヨ「負けたわね。降参よ」
シナオ「くそ、勝てなかつた」
だが、その時
ミョア「サバレとアルミン。分かっているわよね？」
今回ミョアは奥様の関係で遅れて来た

サバレ「やばい・・・」

アルミン「どうする、父さん」

サバレ「逃げたら、さらに説教が長くなるぞ」

アルミン「・・・」

サバレ「だが」

アルミン「やっぱり」

サバレ& amp; アルミン「逃げろー！！！！」

ミヨア「逃がすわけないでしょ」

サバレとアルミンの首に双剣があった

ミヨア「じゃあ説教ね」

第55話 番外編 バーベキューしているよ(後書き)

クレス「あれ？ミヨアって戦えるの？」

ミヨア「私は元ハンターよ。サバレと会って止めちゃったけどね」

クレス「(だから強いんだ)」

ツヤガ「変な設定入れたけど平気だね。では また次回に ノシ」

第56話 番外編 結果（前書き）

ツヤガ「第50回記念なのになんだろうね。ではごゆっくりお読みください」

第56話 番外編 結果

ナチヤ「あれ？あの双剣俺のじゃないか？」
コルネス「ん？そうだね。いつ取ったんだろ」
クレス「ミヨアさんも強いですね」
ナチヤ「でも、これでシナ才軍の勝ちだな」
ツヤガ「？シアンをよく見てみなよ」

シアンの腹にパンチを直撃させたトアスクだった

トアスク「終わったな」

シアン「何を言ってるの？」

トアスク「え？」

トアスクの顔が青ざめる

シアン「殺してあげる。本気で」

トアスク「いや、もう降参。負けた、俺が負けたから止めてくれ」

シアン「死ね」

トアスク「ぎゃー」

ナチヤ「ああ、書いたら18禁になるくらい、グロいな」

クレス「見たくないです」

ナチヤ「ライリは平気なのか？」

ライリ「私は・・・駄目なほうかしら」

ナチヤ「へへ、意外だな」

ライリ「！ナチヤの馬鹿」

ナチヤ「？なんで」

ツヤガ「乙女心は複雑なのよ」

ナチヤ「いや、ますます意味が分からないんだが」

クレス「はい。結果はサバレ軍の勝ちです」

シアン「わ〜い」

ナチヤ「大丈夫か？トアスク」

トアスク「死ねないって辛いな」

クレス「そういえば私も霊体でした」

ナチヤ「自覚なかったのかよ」

ライリ「まあ死んで少ししか経ってないから、しょうがないわよ」

ツヤガ「じゃあバーベキュー終わったらキャンプファイアね」

このあと色々あったがバーベキューが終わりキャンプファイアをすることになった

ナチヤ「あ〜、疲れた。なんで俺が働きまくってんだよ」

シアン「一番活躍しなかったから（いつもの五人で）」

ナチヤ「・・・反論出来ない」

ライリ「ナ・・・ナチヤ」

ナチヤ「？何」

ライリ「一緒に踊らない？」

ナチヤ「へ？なんで踊るの？」

ライリ「知らないの？キャンプファイアの周りで踊るのよ」

ナチャ「でも、それって入れ替わるよな」

ライリ「だっ、だから最初、一緒に踊ってあげるって言ってるの！」

ナチャ「お願いが命令になってるぞ」

ライリ「っつ、ナチャの馬鹿。ナチャなんてレウスの火球に当たって燃えなさい！」

ナチャ「いや、待てよ」

ナチャはライリが走り去る前に手を掴んだ

ナチャ「別にもお願いでも命令でも、なんでもいいさ。踊ろっぜ」
ポフッ

ライリが噴火した

シアン「いいね、青春で」

トアスク「シアン、俺たちも踊るか？」

シアン「え？・・・トアスク」

トアスク「ん？なんだ」

シアン「・・・はあ。まあいいや。踊ろっか」

クレス「早いよ」

ケミ「クレスが遅いの。ほら」

クレス「もうやだ」

ケミに振り回されていた

サバレ「くっ。ミヨアの説教でバーベキューが楽しめなかった。！
？キャンプファイアだと、ライリは、ライリは何処だ！」
運が悪くナチャと一緒に踊っていた

サバレ「あいつ・・・殺すぞ！」

フェリクス「あれ？なんでアルミン兄さん寝てるの？」

ミヨア「疲れたんでしょ、ゆっくり寝かせて、あげなさい」

フェリクス「ふ〜ん。なあ、母さん、一緒に踊らない？」

ミヨア「あら？フェリクスはサバレより私のこと想ってるのかしら
？」

フェリクス「いやいや、そうじゃなくて」

ミヨア「ふふ、分かってるわよ。私のことが大好きなんですよ？」

フェリクス「・・・もう、それでいいよ。ほら行こう」

ミヨア「はいはい」

第56話 番外編 結果（後書き）

ナチヤ「楽しかったな」

ツヤガ「お肉たくさん食べたから体重気にしないと」

ナチヤ「そんなの気にするなよ。見た目が変わらなければいいだろ」

ツヤガ「そういうものじゃないのよ」

ナチヤ「ふくん。そうなんか。では また次回に ノシ」

第57話 約一週間振りの本編（前書き）

ツヤガ「あのふざけた番外編からようやく本編になったね」

ナチヤ「番外編で俺が活躍すること少ないよな」

ツヤガ「まあ番外編ですから」

ナチヤ「・・・ではごゆっくり お読みください」

第57話 約一週間振りの本編

漆黒の中に赤2つ

ライリ「早いわね」

今ライリとコルネスは怒ったナルガと戦っている

コルネス「だが俺の敵じゃないな」

ナルガの攻撃を完璧に避け攻撃をしていた

ライリ「（普通に強いけど、何かあるのかしら）」

ナルガはコルネスばかり狙っていた

コルネス「無駄、無駄」

ライリ「私がいること忘れてない？」

ライリの鬼刃大回転斬りがナルガの尻尾にあたり切れた

コルネス「やるな。じゃあ俺も」

痛みに苦しんでるナルガに攻撃をした

コルネス「目が見えなければ、どうなるかな？」

ナルガの目に矢が刺さり失明した

痛い 暗い

自分が置かれている立場が分からない

今までハンターと戦っていた

そして怒っていた

何故？

分からない

ライリ「？急に動かなくなっ たわね」

コルネス「まあ、いいさ。終わらせようか」

グチャ

そうしてナルガは絶命した

ナチャ「ナルガかわいいそうだな」

ライリ「モンスターに同情しても無駄ね」

ナチャ「まあ人間だから同情したくなるのさ」

トアスク「次は俺の番だな」

シアン「よし、じゃあよろしく」

トアスク「はいはい」

トアスク「最近シナオとディルクが居ないな」

クリスト「・・・」

トアスク「クリスト何か知らないか？」

クリスト「・・・知らない」

トアスク「じゃあ、どうするか」

クリスト「今日用事ある」

トアスク「ん？そうなんか。じゃあ一緒に狩れないな」

クリスト「・・・すまない」

トアスク「気にするな。俺は一人でも狩れるから」

トアスク「とは言ったものの何を狩ろうか」
受付嬢「トアスク様ですか？」
トアスク「ん？ああ、そうだけど」
受付嬢「ギルドマスターがお呼びです」
トアスク「ギルドマスターが？分かった。行くよ」

コルネス「そろそろ向こうは揃ってきたか」
トアスク「えつと・・・」
コルネス「来たか、俺の名前はコルネスだ。よろしく」
トアスク「え？よろしく。それよりギルドマスターに呼ばれたんだが」
コルネス「ああ、それは俺が依頼したから俺に呼ばれたことと、いっしょさ」
トアスク「・・・（なんか怪しいな）」
コルネス「ちよつとね。君の実力を試したいから訓練所に来てくれ」
トアスク「訓練所だな、分かった」

（訓練所）
トアスク「相手は？」
コルネス「キリンだ」
トアスク「古龍のキリンか？」

コルネス「それ以外で何かあるのか？」
トアスク「いや、多分ない」

トアスク「よし、さっさと倒すか」
キリンはハンターを見つけて、開始の合図のように雷を落とした

第57話 約一週間振りの本編（後書き）

ツヤガ「キリンの訓練は大変だったらしいわ（作者）」
シアン「あれは確かに難しいよね」

ナチヤ「太刀が下手だとクリアがムズいな」

ツヤガ「まあ、いいや。では また次回に ノシ」

第58話 トアスクの過去4th（前書き）

ツヤガ「もう終わりますね」

ナチヤ「ああ、主人公が」

ツヤガ「大丈夫だよ、次回の主人公に託せば」

ナチヤ「何を託すんだ？」

ツヤガ「んつと、まあ。色々ね。では、ごゆっくり
お読みくださ
い」

第58話 トアスクの過去4th

トアスク「あぶな。この雷止められないのかよ」

キリンの雷のせいでトアスクは上手く攻撃出来ないうでいた

コルネス「よつと」

コルネスは頭に確実に当てて気を溜めた（鬼刃ゲージ）

トアスク「俺も攻撃しないと。無理矢理だが」

キリンが振り向いた、その時。まるで自分の雷のようなハンマーが降り下ろされた

トアスク「よし、怯んだ」

コルネス「（運も強いな）」

キリン「ギヤーン」

キリンは怒った

コルネス「っ、早いな」

トアスク「どうするか。攻撃出来ないな」

二人とも早くなったキリンに攻撃が出来なかった

トアスク「？そうか、自給用大タル爆弾があつたな」

キリンがこちらに突進をしてきたことを確認して爆弾を置いた

トアスク「コルネス！」

コルネス「分かつてる」

キリンが爆弾に気づき突進を止めた時

コルネス「止まるなよ」

鬼刃斬りがキリンを襲った。そして軽いキリンはコルネスの攻撃で吹っ飛んだ

トアスク「よし、いくぜ。オラー！！」

トアスクの渾身の力で石を投げた

ドゴオン

コルネス「よし、最後だ」

爆弾でさらに吹っ飛んだキリンは倒れている。そこにコルネスとト

アスクの攻撃が炸裂した
トアスク「終わったな」
キリンは絶命した

ナチャ「そういえばクレスはコルネスに会ったことあるのか？」
クレス「無いですね。なんででしょう？」

シアン「まずコルネスが何者なのんだろね？」

謎の人物「教えてあげようか？」

ナチャ「！？誰だ」

ライリ「あなたは・・・」

シアン「まあ予想していたけど」

トアスク「久し振りだな、コルネス」

コルネス「久し振りですね、皆さん」

ナチャ「（口調が変わってる）クレスとは会ってないだろ」

コルネス「いや、会ってますよ。でも小さい頃だから覚えてないでしょう」

ライリ「で、そんなことより何者が教えてくれるんでしょう？」

コルネス「ああ、そうでしたね。いいですよ。その代わり条件があります」

シアン「条件？」

コルネス「貴方たちには、使命を与えます。それを真っ当してください」

第58話 トアスクの過去4th（後書き）

ツヤガ「誰か第48話の後書きのこと覚えてる？」

トアスク「ん？なんかあつたか」

ツヤガ「いや、覚えてないなら、いいよ」

クレス「確かツヤガが寝てナチャの反応がどうなるかと言って次回に回しましたね」

ツヤガ「あら、覚えてた。いや、今更ながら気づいたんだよね」

ナチャ「どうするんだ？」

ツヤガ「じゃあ18禁なんで書けませんでしたので済ませよう」

ナチャ「何した、俺!？」

ツヤガ「では また次回に ノシ」

第59話 最後は呆気ない(前書き)

ツヤガ「今回は途中から世界が変わりますね。ではしゅっくり
お読みください」

第59話 最後は呆気ない

ナチヤ「使命？なんのことだ」

コルネス「まあ話を聞かないと分かりません」

ライリ「じゃあ話なさいよ」

コルネス「それは出来ません。こちらも事情があるので」

トアスク「それじゃあ何者が教えて、もらえないだろ」

コルネス「いえ、使命を真つ当すると約束するなら教えますよ」

シアン「・・・いいよ。だから教えて」

ナチヤ「ちょ、シアン勝手に決めるなよ」

シアン「いいじゃん、皆反対しないし」

ライリ「確かに反対しないわね」

シアン「じゃあ決定ね。ほら早く教えてよ」

コルネス「私は・・・そうですね、現世で言う神にあたる存在です」

クレス「神ですか」

コルネス「まあ俺はこの世界の創造者だ。そして現世の監視者でもある」

トアスク「監視者。だからバラバラの時代に来れたのか」

コルネス「そして近い未来現世にある変化が起きる。それを止めてほしい。それが今言える使命だ」

シアン「変化？」

コルネス「まあ、いずれ分かるさ。じゃあ皆生まれ変わるか」

トアスク「！！生まれ変わる」

コルネス「そうだ、心配するな。お前らは特別な運命で結ばれている」

シアン「じゃあ・・・」

コルネス「いつか会えるさ。じゃあ頼んだぞ」

そうしてクレス以外の人が光になり消えた

クレス「え？私は」
コルネス「クレスは少し違う運命にあるようだ、それを伝えたかっただけさ。じゃあ行ってこい」
そうして光になり消えた

ツヤガ「終わった。長かった道のりだね」

ナチャ「まさか次回作の主人公って」

ツヤガ「うん、ナチャの生まれ変わりだよ」

ナチャ「なんか間接的に関係あるじゃん」

ツヤガ「あ、良いこと教えてあげよっか。名前、面倒だから変えな
いよ」

ナチャ「それって」

ツヤガ「まあナチャは主人公のままだね。あと他のシアン達みたいな重要キャラもね」

ナチャ「やった。コルネスありがとう！まじ神様最高！」

ツヤガ「良かったね。でも、まだ考える話があるんだよね」

ナチャ「？何かあるのか」

ツヤガ「まず皆の（クレスとナチャ除く）死ぬときの話と、この世界での出会いの話（クレスを除く）。あとシアンがルーツと戦うフ
ラグ立てたままだし、あとその他色々」

ナチャ「いっぱいあるな」

ツヤガ「これも次回作でやるのかな。番外編として」

ナチャ「時間稼ぎ用か」

ツヤガ「まあ、そうなるね。えっと、ここまで読んでくれた皆さん
ありがとうございました。かなり急展開で終わらせましたがすいま
せんでした。次回作もグダグダで、いきますが飽きなければ見てく

だ
さい
」

第59話 最後は呆気ない（後書き）

ツヤガ「なんか後書きみたいのを本文に書きちゃった」

ナチャ「まあ、いいだろ」

ツヤガ「せっかくだし、皆意気込みをよろしく」

ナチャ「よし、次回作がどんな作品なのか知らないけど頑張ってくださいます！」

シアン「私は生まれ変わっても、かわいい子がいいな」

ライリ「私もシアンと同じ意見ね」

トアスク「もつと楽な位置がいい」

クレス「特別な運命ってなんでしょうか？」

ツヤガ「うん、まともにやってるのがナチャしか居ないね。まあい

いや。では また次回作に ノシ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1332t/>

死んだハンター達は今

2011年7月1日10時28分発行